

求道

第七卷
第八號



求道第七卷第八號目次

求道

◎當に知る可し、本誓重願虚しからず

◎信仰の奥底

講話

◎自然と廻心

近角常觀

◎人生問題と信仰

近角常觀

告白

◎入信之經歷

鈴木龍司

雜錄

◎信仰問題の着眼點

◎朝鮮傳道所感

朝鮮基督教の排日觀

朝鮮教化と邦語

朝鮮開發と信仰

時局と十七憲法

◎時局と十七憲法

◎信仰書簡七章

時報

◎朝鮮傳道

講求道學會

每日曜午前九時

〔本郷區森川町一番地〕

第一 求道會

毎土曜午後二時

〔九段坂佛教俱樂部〕

第二 求道會

毎月二日午後七時

〔日本橋區船場町説教所〕

求道

第七卷 第八號

當に知るべし、本誓重

願虚しからず

信心決得して、所謂氣離れをした落ち心地なるものは、實にえも言はれぬ難有い、項が折れて且心頗る安らかなものである。眞宗の特徴は唯此一點である、此心持を遺憾なく直々聖人の御言によりて告白せられたる御自督が歎異鈔第二章である。此御教化ほど聞く度毎に胸突かるゝ貴き御言はない、而して人に語らんとするときは何時も我言葉の足らざるを感じ言ふてもくゝとても此に顯はれたる一念歸命の心持を言ひ盡すことが出来ぬ。そして誰が此二章を説くのを聞き居ても正鶴にいただけ居る人が少き様である、勿論眞實御慈悲をいただきたる人なれば所謂一文不通の人々が十分徹底して頂きて居らるゝ次第である。理窟をいたたく御信心ではない、いたゞく御慈悲が一つである以上は智愚善惡の區別ある筈はない。

ない。

たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄にちりたりともさらに後悔すべからず候、そのゆへは自餘の行をばげみて佛になりべかりける身が念佛をもうして地獄にもちて候はゞこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらばめ、いづれの行もちよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし。嗚呼この地獄一定の我身たることが知らして貰へたのが難有い、地獄へ行かぬ様になりたのが難有いのではない、地獄行の奴じやと知れたのが難有い、つまり地獄行が地獄行と分つたのが嬉しい、固より地獄に落つべき私と我身の程を知らして貰ふたのが嬉しい、なぜなれば此地獄行の私を助けずば惜かぬといふ如来の誓願の親心なくんば、地獄行の我身たること分かるものか。闇中の人は闇を知らず、松影の暗きは月の光哉、いづれの行も及びがたき我身たることの知れたるはいづれの行も及びがたき我身たることを佛かねてしるしめて、自餘の行をすて、唯念佛せしめてたすけずば惜かすとの誓の届けば也、誓は弓也、名號は矢也、誓は飽迄も我等に届けんとて張りつめたる満を持せる弓なりけり。名號は自餘の行の勵みあたはざる我等に與へんが爲に特に成就したまへる寶也、此誓の弓の力にて名號の矢が我等に

届きたる時、即選擇願力の届きたる一念、信樂開發の時刻也、此に至りて歎異鈔第二章の御教化全く法然上人附屬の選擇集内題の字及眞影の銘と全く同意たるを仰がずんばならず。

念佛より外に往生のみちをも存知し云云及たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとのほせをかうふりて信ずる外に別の仔細なきなりとは畢竟選擇本願念佛集南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の意に外ならず、而してたとひ法然上人にすかされざるらせて云云は畢竟眞影銘文の意を裏より言れ顯されたるのみ。曰く、

南無阿彌陀佛、若我成佛十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現在成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。

常に拜讀しながら、今更の如く如來の本誓を感ぜずんばならず、抑々如來の佛となりて現はれたまひし本意は偏へに我等十方の衆生に如來の御心を届けて佛の御國に生れしめんとの御心なり、しかも當に御國に生れしめんとにはあらず、若し生れしめずんば我佛とはなるまじとの御誓也、抑々強剛難化の我等若し此御誓あるにあらずんば、いかてか御心をいたゞきたてまつるべき、我等が地獄は一定と知れたも畢竟之を助

といふは、恰も瘡腕を揮はんとするが如し、大悲の御目より御覽なれば如何にはがゆく思召すらん、是ても未だ親心が知れぬかと御涙をしぼりたまふなり。しかも此心を徹到せしめずは我親とは呼ばるまじとの誓願なり、是即ち若不生者の誓なり。既に此誓ましまして正覺を成して彼佛今現在に成佛したまへり、看よ此本誓重願の虚しからざるを、此御誓のやるせなき如何て我等の心中は徹底せざるべき、衆生稱念必得往生、たゞ念佛して彌陀にたすけられまらすべしと信ずるほかに別の仔細なきなり。

若不生者のちかひゆへ信樂まことにときいたり、一念歡喜するひとは、往生かならずさたまりぬ、若不生者不取正覺の誓の下に既に業に正覺を取りたまひし彼佛現に在す已上は其やるせなき本誓重願は虚しからず切々哀々我等をみそなはして實に滿を持せる弓の如く、果して稱我名號の矢は遂に我等が胸に貫徹したるもの衆生稱念にあらずや。是實にたゞ念佛して彌陀にたすけられまらすべしと信樂まことに時到来るなり、一たび信する一念、若不生者の御誓は貫徹して必得往生と決定する也、是往生かならずさたまりぬといふ所以也、たとひ法然上人にすかされまらせて念佛して地獄におちた

けんとの御誓のやるせなき御心あればなり。

たとへば放蕩の息子親の慈悲とは知りながら、猶放逸に流れて横着を起すが如し、貧けれど猶餘れるの金錢あり、當分を費すを得ん、零落しつれども、猶瘡腕を揮ふを得ん直に親の前にあやまると能はず、しかも飽迄やり通せるとは思はず、何れは金錢も盡きなん瘡腕も折れなん、其時こそは佛ならでは致方なし、否今とても佛ならては致方無しとは思へども心に思ふばかりて其覺悟が出来ず、露骨に云へば悪いとは知りながら親の前に心から頭を下げると出来ず、其意潜かに金錢を費し盡し、零落窮迫其極に達せずんば頭は下がらずと云ふが如し。つまり地獄は必定すみかぞかしの覺悟は絶望落膽の極に達せずんば爲すべからずと思ふものあり、甚しきに至りては地獄は一定すみかぞかしは地獄に落ちてもかまはぬとくそやけになり、惡度胸をきめたるが如く考ふるものすらあり、かゝる餘裕を存せる放蕩息子に對する親の切々哀々の心は弓を引きつめたるが如く少しも餘裕なし、猶餘れる金錢あり猶瘡腕を揮はんとは如何にあさましき心ぞや、火宅無常の人生にありて猶一日を苟且するは猶金錢ありと云ふが如し、罪業深重の身にてありながら猶善を爲さんと試み、喜びたい

りともさらに後悔すべらず候とは是れ必得往生の有様にあらずや。西方指南鈔は聖人自ら法然上人の御教化を集めたまひし者、吾人は之を熟讀玩索して當時の吉水禪室の御教化を回想せずんばあにす。而して恰も御附屬の文意によりて本誓の御親心の行者に貫徹して往生のさだまることを示したまふこと切々として御親心の儘の實現たらずんばあらず。曰く

問 本願と本誓とその差別いかにぞ。

答 我成佛の時の名を稱せん衆生を生ぜしめんと云は本願也。もしむまれまじくは佛にならざると云は本誓也。總じて四十八願は法藏菩薩のむかしの本願也。この願に答へたまへる佛果圓滿の今は、第十九の來迎の願にかきりて化度衆生の御方便はあはしますへきなりと云なり、本願を立たまはずは、名號を稱すとも無明を破せされは報土の生因となるへからず、諸佛の名號におなしかるへし、しかるを阿彌陀佛は、乃至十念若不生者不取正覺とちかひて、この願成就せしめんがために、兆載永劫の修行をあくりて今已に成佛したまへり、この大願業力のそひたるかゆへに諸佛の名號にもすくれ、となふればかの願力によりて決定往生をもするなり。かるかゆへに如來の本誓をさくにうたがひなく往

生すべき道理に住して南無阿彌陀佛と唱てん上には、決定往生とおもひをなすへきなり、たとへばたきものゝにほひ薫せる衣を身にきつれば、みなもとは、たきものゝにほひにてこそありと云ども、衣のほひ身に薫するがゆへに、その人の香はしかりつると云か如く、本願薫力のたきものゝ句は名號の衣に薫し、またこの名號の衣を一度南無阿彌陀佛とひき着てんものは名號の衣の句身に薫するがゆへに、決定往生すへき人なり、大願業力の句と云は往生の句なり、大願業力の往生の句、名號の衣より傳はりて行者の身に薫すといふ道理によりて觀經には若念佛者當知此人是人中芬陀利華と説けり、念佛の行者を蓮華に喩ることは、蓮華は不染の義、本願の清淨の名號を稱すれば、十惡五逆の濁にも、そまざるかたを喩たるなり、また觀世音菩薩、大勢至菩薩、爲其勝友と云へり、文のこゝろは之も往生の句身に薫せる行者はかならず往生すべし、これによりて善導和尚も三心具足の者をは極樂の聖衆に接すとのたまへり、極樂の聖衆といふは因中説果の義なり、聖衆となる道理あれば當時よりして二菩薩と肩をならべ、膝をすじえて勝友となりたまふといふこゝろなり、命終の已後は往生して佛果菩提を

證得すべきによりて、當坐道場生諸佛家ときたまへり、かるがゆへに一念に無上の信心をえてん人は、往生の句薫せる名號の衣をいくへともなくかさねさんとおもふて、歡喜のこゝろに住して、いよく念佛すへしと云へり。

信仰の奥底

近時信仰問題が大に進歩して來た結果、諸方面に信仰を求め、聲が高まるやうになつて參つたことは、大に喜ぶべき現象だと思ひます。されど近時の信仰界の状態を見るに、唯徒に信仰の叫聲が高くなり又廣くなつたばかりであつて、信仰問題の切要なる急所奥底に觸れてをらぬやうである。此點より考へて近時は信仰問題の聲が都鄙一般に高まつたれど、一面に於て、どうも浮足である。眞面目に佛の眞實の呼聲を有難く頂た人が甚だ稀であるやうに思へるから、今殊更に角をたて、信仰問題に於ける急所をおさへ、特に他力信仰の急所奥底に就てお話しやうと思ふのである。

古來より信仰上の問題に就き種々あらうと思ふが、近時の青年間に於て多くの人のいふ信仰上の傾向に就て陥り易き間

題を注意しようと思ふ。少し評論的な言辭になるが、凡そ信仰には消極的方面と積極的方面との二者がなければならぬ。然も此二者は決して二あるのではなく一つになるのである。然るに近時多くの人のいふなる信仰問題は、單に消極的方面を述べる者は徒に消極的なる言辭を弄するのみで、積極的方面の光明面を説せず、又積極的方面をのみ述ぶる者は、徒に積極的なる言辭を弄するのみで、他の一面に於て消極的方面を缺如してをるやうに見える。今之を具體的にいへば、信仰は一面には人生の一切を棄つるの意味である。人生のすべては、財産も、名利も、位地も、妻子も、肉體も、道徳學問も、乃至人生の何物も一切吾人の當にならぬものである。然るに、かくの如き當てにならぬ人生に、たゞ一つ當になるものがある。それは何んであるか、眞實如來の誠である、如來のお誠を頂して頂くことである。人生に於ては何れの力も及び難き煩腦具足の凡夫、火宅無常の我等ではあるが、唯如來の本願念佛のみが誠にははします、此お誠は本願一實無碍の大道であるから、此大道に歸入し奉つた信心の行者は、天神地祇に尊敬せられ、魔界外道も障礙することなく、日月星辰も護持養育し給ふ。かく如來のお誠を信することによりては闇黒の人

生は光明四方に充ち満ち、事々物物皆如來の大悲ならざるはなしといふ確信に到達し得るのである。之れ即ち眞實なる信仰の状態であるのである。然るに近時多くの人の信仰の説示を見るに、積極的に説く人々は、初めより人生は之れ光明ならざるなく慈悲ならざるなしといふ。されど言ふ所の積極的方面は一面に於て未だ消極的方面を有たない積極的であつて、畢竟不具な積極的といはねばならぬ。極言すれば、人生の一切悉く吾人の當になるものなしと否定し、唯當になり頼になるは如來の本願のみと念佛の一道に歸入してこそ初めて『現世利益和讃』にあるが如き諸の恵は與へられ、人生は光明もて充たさるゝてふ確信を頂くのである。而して此現世利益攝取護念なるものは信心の人に與へらるゝ所得餘徳であつて、先づ我々の頂かねばならぬものは南無阿彌陀佛の如來のみ恵一つである。南無阿彌陀佛とは初めより決して疊をたゝいて南無阿彌陀佛、衣の襟をたゝいて南無阿彌陀佛と現はるゝのでなく、人生に於て煩惱具足火宅無常虛假不實にして一つの誠なき者を憐み給ふ如來の清淨眞實が南無阿彌陀佛であるのである。であるから南無阿彌陀佛を頂くには單に初めより、人生の總てが恵である光明である南無阿彌陀佛であると

ひつかぶせやうとした所が駄目である。一面に於て人生のすべての金銭、財産、位地、親子であらうが、縦念佛であらうが自分でこしらへ自分で御慈悲であると定め込んだのであるならば駄目である。て我々の頂く所の念佛は、かくの如き人生の何物も頼むべき所なき火宅無常の我等を見捨て給はぬ大悲の教、本願の招喚の勅命のみが眞實であるのである。此如來眞實のお誠に夜が明けてこそ、初めて如來攝取の光明裡に包まれ諸佛護念の益に頂かるのである。此結果として人生悉く大積極の光明裡に攝取されるのである。然し之は前述の如く人生の一切を捨てたる消極ありて、如來のお慈悲ばかりといふ關門を通過し來りて初めて、吾人の前に發展せられたる廣寛なる天地である。然るに初めより罪惡深重の我等、火宅無常の世界たるにも目覺めずして、人生の事々物々を頭こなしにお慈悲であるといふのは、消極的方面なき不具の積極的光明面であるといはねばならぬ。之れ人生の一切は何物も當にない中に、當になるは唯如來ばかりてふ一念歸命の肝要急所がないのである。こは餘りに露骨の言ひ方であるが、信仰上最も切要なる問題なるが故に、能く心を潜めて考へねばならぬことである。勿論茲に注意すべきは、初めより

し、其苦煩を訴ふる者頻々として相踵ぐ有様である。之即ち從來の積極的なるもの、消極的の一面なき證明である。抑從來の信仰問題に於て、如來の惠以外のものを混ざるのを雜行雜修といふのである。雜行雜修とはあながち阿彌陀佛以外の諸佛を念ずるてふ意味ではない、人生唯如來の慈悲のみてふ以外に、自己を頼みとし、他人を頼みとし、外人を頼みとするが如きをいふのである。信仰の要點は專修專念一向一心に如來を頼み奉り、如來の本願念佛を頂くことにある。かくの如き大消極ありて初めて現はれたる大積極的信念こそ、眞實の信仰といふべきである。阿含の説法の尊きは何れにあるかといふに、人生の一切は我等畢竟の依憑所にあらざることを説き、最後に至りて唯一涅槃のみ一切衆生の大安住地たることを示したる點にあるのである。即ち苦空無常無我の人生を捨て、眞に涅槃の大安住を見出すにある。此涅槃滅定の光明が大乗佛敎に於ては眞如と現はれ實相と現はれ、常樂我淨の大積極の光明と現はれたのである。蓮如上人が常に「もろ／＼の雜行雜修自力のこゝろをふりすて」と仰せらるゝのが此大消極である。此大消極の最後に「一心に阿彌陀如來今度の一大事の後生御助け候へ」と唯一絶對の光明の現はれた

人生悉く闇黒なりと苦惱してをる人が、人生の事々物々如來の惠でありお慈悲であると、大悲の招喚を聞きて信仰を得る人がある。これ畢竟この積極的に説くは消極を通過したるにはあらざれど、一方に懊惱せる人に適當する故に、反つて頂く方の人に、當にならぬ世に當になるは、たゞ如來の本願であると安心を得たのである。之れ其境遇に適合したからである。然るに世の多くの積極的方面を説示する人も、又之を聞く人も、人生上のすべての境遇其儘を人生的に掴んで、金銭其物、妻子其物、位地其物、乃至外界の事物其物を掴んで之を惠なりといふ時には、必ず人生的に失うた時に恰も其惠が消えたる如く失望することがある。殊に是等の場合に於ては、ただに外界を掴むのみならず、遂に自分の行爲其物即ち我々の罪惡の行爲其物を以て惠なりと掴み、又我々の惡行爲其物をもて惡なりと掴むのである。罪惡を以て惠なりといふに至りては、既に自ら中心かゝる思をなす能はざるはいふまでもなく、自己の惡行を以て善なりと思ふ人の如きは、人生の困難に逢着する時には、必ず善行を繼續する能はざるに至るは明かである。近時かくの如き傾向を有する多くの人々現はれ來り、然も從來自己の抱きたる思考の假定的信仰なりしを自覺する所が最も有難き所である。『嘆異鈔』の「何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」といふは此大消極である。此何れの行も及び難き身が唯だ「念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」と、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別に子細なきなりである。此たゞといふ意味は人生の一切が何等の當にならぬ中に、唯お慈悲ばかりが我々の當になることを現はしてゐるのである。此如來ばかり、念佛ばかり、本願ばかり親心ばかりといふ關門を通過せねば、信仰問題の眞の奥底に達したりといふことは出來ない。くれ／＼も多くの信仰問題に頭を悩ます青年諸君に言ふ、此消極なき積極は眞實の信念でない。勿論此問題は、今更新しき問題ではない。形こそ相違あれ、古昔より理論的に世界萬象は眞如の發現なりとか、宇宙の本體は眞如なりとか、假設的に論議して信仰の成立したるかの如く思惟するものがあるけれども、之又消極なき積極の信念である。之を理論から離れて、如何に修養的に若しくは信仰的にいふも、我々は虚假不實である、罪惡深重である。かゝる者を救済し給ふが如來清淨眞實のお慈悲である。此呼聲を聞き得たる一念に、あゝ我は到底淫ぶ瀬なき罪惡の塊である。此世は當にならぬ、我身で淫ぶせ

むとしたるは大なる間違だつたと、すつぱり手のはなれた心持、所謂「ふりすてた」心持の大消極がなくてはならぬのである。これこそ如何なる愛別難苦に出會するも煩惱の境に入るも、これならばこそ如來に御心配かけましたとあやまり且つ安心さして頂く事が出来るのである。

以上は積極的言辭を用ひるのみで、消極的方面を簡却せる場合を申述べたのである。茲に注意すべきは消極的方面を通過せざる者は眞の積極に至らざるものなるが故に、かくの如き場合の積極は眞の積極でない。唯言葉ばかりの慈悲や光明やであつて、眞の慈悲光明でない。單に人生其物に積極的にかく命名したに止まり、縦令之を積極といふも眞の積極ではないのである。

偕之に殆ど對をなして、又言語の上に消極ばかりを説き、更に積極的光明の出でざる者がある。これは寧ろ地方に多く存在する。其所説は喜ぶのも信心でない、楽しくなるのも信心でない、雜行捨つるにあらざり、彌陀を頼むにもあらざり、すべての信心安心に關する言語思想に對して否定の言を用ひ、徒に消極的に奮ふ方面のみを主としてをる傾向がある。恰も前者の傾向が信仰問題を頗る散漫に、廣く宇宙の事物にひる

て頼むにあらざり自力を捨てざるべからずというたのに外ならぬ。然るに多くの消極的言辭を用ふる者は、かくの如く大悲の上よりいふにあらざりして、行者の方より信心もいらざり安心もいらざりと定めてかゝるのである。一日私の宅へ或る人が訪ね來り、「私は改悔文の規則に適應したる信念を得ること能はず、雜行を捨つることも出來ず、彌陀を頼むことも出來ず此まゝのお助けである」といはれたが、私は其人に對して、「貴君の此まゝはこちらよりきめこみの此まゝである。此まゝとは信心も要にあらざり、雜行も捨つるにあらざりといふが如き意味にあらざり。此まゝとは如來の呼聲である。汝一心正念にして直に來れと、直ちにとは惡人は惡人ながら、罪ある者は罪ありながらとの如來の呼聲である」といへば、其人は涙を流して、「今こそ初めて如來の大悲に夜が明けた」と喜こんだ。そこで私は「それが自力の心を捨てたのではないか、それが一心に彌陀を頼んだのではないか」といへば非常に喜んで歸られた。が然るに、現今の消極的を繰返へす人々は大膽にも信ずるにあらざり、雜行捨つるにあらざりといふが如きは、決して眞の大悲のみ恵を受け入れたる者でない。即ち積極なき消極である。即煩惱具是の凡夫火宅無常の世界はみな以てそらごとたはご

げたと正反對に、此思想の傾向は信仰問題に没頭して唯徒に百非を繰返すのみである。然し其消極は唯徒に言語上に繰返さるゝのみで、最後に至るも何等の光明をも將來しないから、やむを得ず「このまゝお助け」とか「たゞのたゞぢや」とか言語が窮してしまふのである。而して遂に如來の深き慈悲方面を説示せず、多くの信徒は思想上の混亂を生じ、右にはなち左にふりすて、徒に信仰難を叫ぶ状態に陥るのである。これは青年よりも寧ろ安心問題に没頭し信仰を得たとか得ないとか苦悶してをる老人間に多きやうに見受ける。是等の人々は唯消極的方面のみ説き、最後に「たゞのたゞ」とか「このまゝながら」とか「無條件の救済」といふが、決して眞實の如來のお誠に夜が明けて然かいふのではない。勿論此まゝながらと聞きて眞の安心を得る者もあらう。之れ又前者の場合と同じく聞者の境遇によるのであつて、多年信仰問題に苦悶し、信仰を獲得せざるべからず、如來に歸命せざるべからず、雜行捨つるべからずと安心問題の爲めに煩悶せる者にとりては、幸にも頼むにあらざり、信ずるにあらざり、此まゝであるの一言を適切に感じ、眞の信仰に入るの場合がある。されどこれは自力の迷心にかゝはつてをつた者に對して、自力心

とまことあることなしの一面のみの言語を繰返すも、念佛のみぞまことにおはしますといふ積極的方面が缺けてをるのである。如何に我々が手をはなち足をはなち、あれもこれも捨てた處で、彌陀願力に乘じないことには、あゝ我れ惡るかりし、人生は無常なりしと、手をはなつ眞の大消極は實現せぬのである。

以上は多く側面より評論的に申したのであるが、かう言はねば、信仰問題の急所をおさへ奥底を叩き得ないからで、決して他意あるのではない。然らば眞の信仰の光景、即大消極てふ信仰の光景は、如何にして生起するかといふに、抑も我々が煩惱具足の凡夫火宅無常の世界、みなもつてそらごとたはごまことあることなしとの眞相に氣付くは自己の力ではない。罪惡深重と氣付き火宅無常と氣付くは、自分が苦悶した力や境遇によるのではない。如來の呼聲に、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と呼び、阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫罪業の我等たらんものと如來よりの呼聲に氣付かせて頂くのである。即ち我々の罪惡深重煩惱具足の衆生と大消極に宣言し、殊にそれらの衆生を我能く助けんと大積極の願力を現はし給ふ。殊に如來の我れ能くとの給へる、

「能く」の字は實に絶対無限の力を顯してをる。『愚禿鈔』に「能言對不堪也疑心之人也」とある。即能くとはあたふといふ文字である。如來の大慈悲の深きことは、罪惡深重の凡夫を助け能ふといふ大悲の言である。此大悲の我々の心に貫徹したる一念が、あゝ今迄は知らざりき、我こそ仰せの如く現に罪惡生死の凡夫であつたと、頭のさがつたのが機の深心である。我は今迄氣付かざりしは我能く汽を護らんの大積極の呼聲の聞こえざりし爲である。然るに如來清淨の願力に乗じて、疑なく往生を遂ぐるなりと信ずる一念に、我は過去以來浮ぶもてはなかつた、現在も常没常流轉、未來も又沈み切つた石の如き我等を助け給ふは阿彌陀如來なりと大積極の信念を實現するのである。之れ即大消極即大積極の妙味であつて、機法二種の深心即如來の勅命其物より喚び起されたる大消極大積極の心持である。

以上は信仰問題に就ては別に珍らしきことはないが、近時信仰問題の傾向の眞の急所奥底に到達してをらない者があることに思ひ至り、遠慮なく殊更に角を立ててお話ししたことである。

行 誠 上 人

くれてゆく秋のあはれを打そへていとどみにしむ入相のかね(鐘聲送秋)
 はるゝかとおもへばやがてふるてらの軒ばの時雨音を淋しき(古寺時雨)
 夕月のかげに亂れてかはほりのかけるがごとく
 ちる木葉かな(夕落葉)
 おくしもに色こそかはれみし秋のわすれかたみに句ふ白ぎく(殘菊)
 おく山につまどふ鹿のこゑすなりこゝも紅葉のちりのよの中(山里にやどりける夜)
 むらしぐれふりし音をしのばるゝ鹿の園生にもみぢ散るころ(羅漢供し侍りける時)
 年をへしきならし衣うすけれどかさねてをゆけ秋の夜さむに(人に肌衣をおくると)
 むさし野のすゑ野の秋の草の庵にやどるは露と我とよりけり(某寺にすみけるころ)
 もろともに老曾のもりの下草のかるゝに近くなりにけるかな(厚誓法師にあひて)
 み名をのみさくの下露あつまりてふかき恵みのふちとなりけむ(菊の花をみて)

講 話

自然と廻心

（求道學會講話）

近 角 常 觀

今日は『歎異鈔』に就きお話し仕度いと思ふのであります。『歎異鈔』に就きては平日話して居る事でありますが、初めに近頃深く私の考へて居る事は、多年間問題になり居りし誰れが此の鈔をお書きなされたかといふ事である。此の事につき近頃大に感ずる事が多いのであります。實は斯かる事をお話すると、直に『歎異鈔』の内容其ものゝ話で無き故、直ぐにお慈悲の話にかゝれぬ事になりますけれども、去りながら此の『歎異鈔』を如何なる方が如何なる心持でお書きなされたか分ると、非常に事柄が能く分かり、一層有難く頂かれるやうになるのである。夫は定めて平日『歎異鈔』をお頂きになる方は非常にお喜び下さる事と思ふ事でありますが、抑此の『歎異鈔』はどなたがお書きなされたのであるか、前から色々考への有る事で、果して古來よりの説の如く如信上人の作であるか、又唯圓房の作であるか。此の二つの考につき、自分如きも筋合ひから見ると何うも唯圓房のやうに思はれる

事に數年前より氣付き、爾來常に唯圓房の事には氣が附いて居たのである。けれども又一方親戀聖人の御孫に當らせられる如信上人が、聖人の信仰の其の儘を傳へお書き下されたものであるとの説古來より有る事故、之に對し何うも如信上人の作なる事をなくする事が自分の感情上惜しくあるのみならず、自分の信仰上、聖人の孫の如信上人の作ならんとの考が去らぬので、殊に今春如信上人の御墓に參詣して以來は、或は唯圓房かと思ひ、或は如信上人かと思ひ、取つたり措いたり氣に懸つて仕様がなかつたのである。勿論此の『歎異鈔』の有難い事は其の書き手がどなたであるかと儘よ、書き手の如何に係はず難有いのであるが、同じくば何様の作であるか、きつかり分かり度いと思ふ處から、今迄色々心配して居た事でありませう。

其處で筋合ひに就き細かくお話すると、歴史の研究の如くなり長くなります故、私の氣附かせて貰うた結果丈け一言しまするに、先づ今迄如信上人であるか唯圓房であるかと、苦しんだ點は何處に在るかといふに、此の『歎異鈔』の中に書いてある事柄が『口傳鈔』——即ち如信上人が覺如上人に傳へ、覺如上人が如信上人より聞いてお書きなされた『口傳鈔』と能く似てある故に、如信上人ならんとの説があるのである。又私の思ふのは第九章に

念佛まうしさふらへども踊躍歡喜のこゝろちるそかにさふらふこと……いかにとさふらべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親戀もこの不審ありつるに唯圓房おなじこゝろにてありけり云云。

之で見ると、何うも唯圓房らしいのである。又第拾三章には、またあるとき唯圓房はわがふことを信ずるか、おぼせのさふらひしあひだ、さんさふらふとまうしてさふらひしかば、さらばわがいはんことたがふまじきかと、かさねておぼせのさふらひしあひだ、つゝしんで領状まうしてさふらひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往定は一定すべしとおぼせさふらひしとき、おぼせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしともおぼえずさふらふとまうしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞと、云云。とある。之から見ても何うも唯圓房らしく思はれるのである。此の二つにつき長々取つて見たり措いて見たり、種々に考へて見た。中に書いてある事柄より見れば、如何にも親鸞聖人より如信上人覺如上人と傳へられた『口傳鈔』と同じやうに思はれ、又言葉つきより見れば如何にも唯圓房らしく、此二つて長々私の心に決まらなかつたのである。今日は餘り略して却て分らぬでありませうが、此の唯圓房説は私六七年前より言つて居たのである。すると兩三年前三河の了詳師の講義なるものが現はれた。夫には唯圓房に違はぬと言ひ、如信上人で無いと斷言してある。處が私は唯圓房であると思ふものも、何うも中に書いてある事柄が親鸞聖人の御子の善鸞上人——此方は勘當になられた方であるが、其の御子の如信上人が幼少の昔より長大の後に至る迄、常に聖人の側に侍りて聖人の御教化を聴きなされた。其の如信上人が聖人の御教化の眞實をお傳へ下されたものであるといふ考があつて、何

うしても之が唯圓房であると思ひ直せぬ。一言にいふと此の二つに就き長々苦しんだのである。處が今春如信上人の墓に參詣し、唯圓房の寺へも參詣させて貰うた。如信上人の御墓に參詣して其の歸り路にお墓を拜み、一段々遠くなり、遙かかなたに墓畔の銀杏樹を眺めつゝふと感じたのである。之は如信上人が金澤で正安二年正月二日に彌々御病氣におなりなされ、四日の日に隠れなされた。其のあとに唯圓房がひとり生き残り、如信上人が御傳へなされた聖人口傳の眞信が間違ふ事を恐れ、唯圓房が涙を揮つて書き遣したものであるまいか、といふ考が此時咄嗟の間に私の心に起り來つたのである。之は自分でも實に思ひ懸け無き事を思ふたのである。其處で早速此の事を同行の竹原君初め皆なの方に話した處が、皆な様子が非常に喜び下された。去りながら年代を考へると、唯圓房の方が如信上人より早く死なれたものと普通には思はれる。殊に唯圓房の寺で聞いた唯圓房往生の年時が、如信上人より先きになつて居つた故、致方が無いと控えて居たのである。處が此頃考へるに古くから唯圓房が承應元年の冬の上京し、覺如上人と善惡二業の事に就きお話したといふ事が『慕歸繪詞』に出てある。又之が『慕歸繪詞』の一本には、延慶元年冬の頃となつてある。處が寺の傳へには、正應元年八月八日唯圓房往生となりてあつた故、夫を信するの餘り延慶元年の上京は間違ひである、承應にして冬頃は間違ひであると、今迄は一途に然ら思ひ、唯圓房は正應元年八月に亡くなられたものとばかり思つて居たのである。處が此頃又考へるに、寺の傳へなるものは文明

年中に書いたものである。文明年中に書いたものよりも、之は何うしても古き『慕歸繪詞』の方を信せねばならぬ。して見れば兎も角『慕歸繪詞』に、承應元年冬の頃、又は延慶元年冬の上京せられたとある上は、何うしても正應元年八月往生では無い。殊に一本に延慶元年とあるに見ても、之は何うしても延慶頃迄生き延びた人に違はぬといふ事に氣附かせて貰うたのである。延慶元年とすれば既に如信上人の往生正安二年に後るゝ事八年である。而して斯く氣附かせて貰ふと同時に、今迄『歎異鈔』初めの文の意味の取りやうが大に間違つて居た事に氣を附けさせて貰うたのであります。夫れは平日『歎異鈔』を拜讀なさる方には、氣を附けて頂くに、非常に有難いと思ふ故に申しますが、『歎異鈔』巻頭の御文に、

竊に愚案を廻して粗古今をを勘ふるに、先師口傳之眞信に異なることを歎き、後學相續の疑惑有ることを思ふ。幸に有縁の知識に依らずんば、争か易行の一門に入ることを得ん哉、全く自見の覺悟を以て他力の宗旨を亂ること莫れ。仍て故親鸞聖人御物語の越、耳の底に留まる所聊か之を註す。偏に同心行者の不審を散んが爲め也。云云。

の御文である。此の「先師口傳之眞信」の先師を今迄誰も皆な親鸞聖人の事に取つて居る。處が考へると此の先師は親鸞聖人の事ではなくて、如信上人の事ならん、といふ事に私氣附かせて貰うたのである。「竊に愚案を廻して粗古今を勘ふるに、先師口傳の眞信に異なるを歎き」とある。して見ると延慶の頃になれば如信上人は既に隠れてお仕舞ひなされ、東國に

正しき信仰を傳へる善知識が無くなつた。唯圓房は寺の傳へによれば九十六迄生き延びた人である。其九十六迄生き延びた唯圓房が、親鸞聖人の孫の如信上人が六十何歳で隠れになる、其あとに生き残りて東國の信仰界が日に亂れて來る、夫を悲しんで書いたものと、思ひついたのである。若し此の先師口傳之眞信といふ言葉を親鸞聖人の信仰といふ事にとるならば、何うも此の言葉が輕る過ぎる。祖師親鸞聖人の直々のお傳へ、といふには何うも此の先師口傳といふ言葉が私の心に満足で無い。て氣をつけると茲の處の書きやうである。「先師口傳の眞信に異なるを歎き……仍て故親鸞聖人御物語の越、耳の底に留る所聊か之を註す云云」とあるのである。して見ると親鸞聖人の仰せをお傳へ下さる如信上人も既に死になされ、其の如信上人口傳の眞信が日に間違つて來て、信仰上種々なる異解を生じて來た。其處で故親鸞聖人存命中にお話し下された事、今は三十餘年の前なるも其の時のお話耳の底に留まる所之を註すといふので、唯圓房が涙を揮つて之を書き遣されたのであらうと思はれるのである。大分話が考證めいて参りましたが、私共斯く聖人滅後の時の様子を考へ、如信上人が聖人の仰せをお傳へ下された事を思ひ、又唯圓房が如信上人より生き延びて、之を書き遣された時の心持を思ふと、實に此『歎異鈔』は有難いと、私此の事につき一際有難く喜ばせて貰うたのである。夫れ故一寸此れ丈け申上げたのであります。

猶ほ言ふと親鸞聖人の事を『歎異鈔』の中には、故聖人、若しくは故親鸞聖人といふ風に書かてれある。「先師」といふ言葉

は本文中にはたつたひと所第十二章にあるきりである。夫は如何なる所に在るかといふに、御存知の如く第十二章は、學問沙汰をするは先師の御意に背く、といふ事を書かれた章である。之も氣を付けて頂くと、實は如信上人は親鸞聖人の御孫であるが、『慕躋繪詞』で見ると、學問の事には心を寄せ給はず、全く如來の慈悲一つを喜んで、非常に喜びの心の厚かつた方で、一代學者ぶり物知りぶる事なく、一筋にお喜びなされたが如信上人の一代である。其の手前より頂くと、此の先師の御意に背くといふ第十二章の御意が能く頂かれるのである。第十二章の御文に、

たま／＼なに／＼もなく本願に相應して念佛するひとをも、學問してこそなんどいひおとさるゝこと、法の魔障なり、佛の怨敵なり。みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて他をまよはさんとす。つゝしむておそるべし、先師の御こゝろにそむくことを。かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることを。

如信上人は幼少の昔より聖人の側に居て、常に聖人の教を聞きなされた。そして聖人の滅後は聖人の墓が京都に在るをも覺如上人に任かせて自分は東國に居り、毎年報恩講には聖人が稲田に御在住の頃召上がった田から出來た米を自ら持ちて遙る／＼京都に上られる、して承安二年正月金澤で隠れになつた時は、上人の持ち物は鐵鉢の中に米が三合あつた丈であつたと申す程である。斯くの如く如信上人は唯一筋にお慈悲を喜んで、學問などいふ事をひどく嫌はれた方である故に、其處を書かれたものが第十二章であると頂く

と、此の章がよく頂かれるのである。

又『歎異鈔』終りの文に
露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、あひとまなはしめたまふひと／＼御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをもまうしきかせさふらへども、閉眼ののちはさこそしどけなきこといもにてさふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくいひまよはされなんどせらるゝことさふらはん時は、故聖人の御心にあひかなひて、御もちるさふらふ御聖教どもをよく／＼御覽さふらふべし。云々。

之なども唯圓房が自分にはや年を取り露の枯草にかゝる有様である。去りながら設へ此の枯草の身でも息の根の通ふ限りは人の尋ねにも應じられよう。が彌々自分の死んだ時は聖人の教を言ふ者は最早や無くなり、「さこそしどけなき事共にて候はんずらめと歎き存じ候ひて」である。今其の思ひより此の鈔を書き遣すのであるが、若し言ひ迷はされなんどする其の時は、故親鸞聖人の御心に相叶ひて御用ゐの御本書初め、其他の聖教を見よといふのである。之れなども考へると、如信上人存命中ならば、自分が「閉眼の後にはさこそしどけなき事共にて候はんずらめ」は言ひ過ぎてもあり、又茲の書き振りの上に、如何にも自分ひとりが生き残つた丈けて、外には誰も聖人の御眞意を言ふ者が無いといふ、堪えきれぬ様が見えるのである。又此の後の方の御文にも

これさらにわたくしのことばにあらざといへども、經釋のゆくりをもしらず、法文の淺深をこゝろえわけたるとも

さふらはねば、さだめておかしきことにてこそさふらはめども、故親鸞聖人のおほせことさふらひしおもむきを百分が一分はしばかりをもおもひいでまいらせてかきつけさふらふなり。かなしきかなや、さいはひに念佛しながら直に報土に生まれずして、邊地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに信心ことなることなからんために、なく／＼筆をそめてこれをするす。なづけて歎異鈔といふべし。外見あるべからず。

之などの上にも唯圓房が此の鈔を書く時の心持がよく見えるのである。

さて斯くの如き心持で唯圓房が書かれたものと思ひ、此の度びは私疑うに疑へなくなつて仕舞うた。斯くいふと『歎異鈔』の者は誰であるか丈けの問題である如きも中々之が一通りの事て無い。親鸞聖人の仰せを直々聞いて書かれた唯圓房の『歎異鈔』も夫れが如信上人がお果になつたので大變力を落し、其の如信上人のお傳へなされた先師口傳の眞信がまぎれてはならぬと、涙を絞りに書き遣されたものである。之て此鈔の有難き事が彌々頂かせて貰へるのである。從來は唯圓房にすれば如信上人でなくなり、如信上人にすれば唯圓房でなくなり、其處に苦んだのであるが、何う考へても如信上人は自分で喜ぶ方で自ら進んで書く人で無い、聖人の仰せを口でお傳へ下さるが如信上人である。其の如信上人がお隠れなされたもの故、唯圓房が如信上人が聖人よりお聞きなされる時、自分も尋ね参りて一緒に聴いて居た。其先師如信上人もはや既に此世を去り給ひ、聖人の御正意を傳へる者今は誰も

なくなりしかと、故聖人の仰せ事の趣き、歎き註したものであると、此頃深く氣附かせて貰ふたのである。之は此頃常に喜ばせて貰うて居る事故、一言何より先きに申したのであります。乍去今斯く言ふ事ははや既に『歎異鈔』に誠められて有る事柄で、斯く考へ詮索する丈けはや既に學問沙汰である。すると肝腎のお慈悲の方は打忘れて、いらぬ詮義に趣き易い。故に斯く深き思召て書かれたものと氣附かせて貰ふ其上は、深き詮索をするのでは無い。其すがほなる如信上人の信仰の様を頂き、夫を唯圓房が親鸞聖人より直々／＼頂いた處で示し下されたものと、斯く頂く外の事は無いのであります。

二

猶ほ『歎異鈔』につきも一つ申し度い。夫れは今春來既に度々「求道」の上にも書いた事でありすが、此の『歎異鈔』に書いてある事と、親鸞聖人の『教行信證』の御教化とがひた／＼と合ふ。餘りに合ふ故久しく不思議に思つて居た事でありすが、此頃又熟々考へて、餘りに能く合ふ故唯圓房が『教行信證』を讀む中より抜き書きしたものでないかと迄思ふ位、『歎異鈔』は全く聖人の『教行信證』其の儘と喜ばせて貰うて居る事である。之に就き多少御文の上より御話するならば、今申した結文の文に、「かくのごとくいひまよはされなんどせらるゝことさふらはん時は、故聖人の御心にあひかなひて、御もちるさふらふ御聖教どもをよく／＼御覽さふらふべし」とある、此の御心に叶ひて御用ゐの聖教とはどの聖教であるか。昨年来『唯信鈔及文意』を出版して、御用ひの聖教と

は此の事ならんと、先輩よりの説もあり、話して居た事でありますが、近頃又考へるに、如何にも『唯信鈔』も聖人御用の聖教に違はぬが、何よりも聖人が御自身深山なる諸聖教中より「之れは」と思ふ御文を抜き出して御用ゐ下された『教行信證』之が何よりも先づ、其の御用の聖教なる事に氣づかせて貰うたのである。此の事も色々言ふと長くなりませ故、唯之れ丈け言ひ置く事に止めて置きますが、皆さんが平日私のお話を聞き下されるにしても、一面は雑誌に書く上より見て下され、一面は平日講話で聞いて下される。言ふ事は同じお慈悲の事なるも、皆さんの方で御聞き下される際に何うかといふに、第一話する私が、筆にする時は思ふ十分一も書く事が出来ずして講話にする時は叮嚀に／＼に言へる。筆では肝腎の處を唯一言で言うて仕舞ひ、講話にすれば同じ事を繰返し／＼細かく話す事が出来る。『教行信證』の『教行信證』の抜き書きと思つたは私の間違ひで、『教行信證』は筆に書かれた御教化であり、『教行信證』は直き／＼唯圓房への御話である。すれば同じ信仰の事を、一方は筆に書き下されたものであり、一方は直き／＼のお話を書き註されたものであると、斯く頂けば『教行信證』の御教化が、『教行信證』の御教化と合ふ事は何の不思議でも無い。が却つて『教行信證』で頂くよりも、『教行信證』で頂く方が、頂き易い氣がするも又自然である。我々『教行信證』を頂く時は、六百五十年の年月を逆上り、直ちに聖人より直き／＼承る思ひがする。其處が實に『教行信證』の『教行信證』たる有難い處で、其廣大の聖人の仰せを茲に書き置くだ、若し間違ひなどした場合には、其の根

つてある。即ち第一には、『教行信證』の初めの先師といふ言葉は知信上人の事であるといふこと。即ち『教行信證』は聖人の御孫知信上人御在世の間は、お弟子達も知信上人より承はりて間違ひも起らなかつた。が彌、上人がおなくなりなされ、此の末如何に成り行く事かと、生き遣りた唯圓房が三十餘年の昔を思ひ出し、涙をふるつて聖人より承はりし御教化の趣き書き註したものである、といふ之が其の一つである。第二には聖人が一切の聖教中より、眞のみを承り抜き下された教行信證の御教化、其の御教化を自ら筆を執り、書物に集めて御遺し下されたが『教行信證文類』であるが、唯圓房は直々聖人より其の御教化を口づから聴聞なされた。而して其の直接の御示の上より、聖人教行信證の御教化の骨目をえり抜いて示されたものが『教行信證』であつて、「御用の聖教ども云々」とある其の「聖教ども」とは、『教行信證』中に御引用の聖文類を指されたものである、夫れが『教行信證』では聖人直き／＼の御言葉となりて表はれて居るのである。といふ之れである。第三には「大切の證文ども」とは初め九章のことであつて、此の九章が聖人直き／＼のお言葉である。夫を後九章のめやすとして出されたものであるといふ、此の三つである。際立つけれども今迄『教行信證』を頂く上に於て、斯く迄さつかり人の言つた事は無いのである。御承知の如く私は毎朝『教行信證』を讀む上より、多年間斯く色々の事に氣を付けさせて貰ふ。斯の様の事分かるのが、實に『教行信證』を拜讀させて貰ふ樂しみである。

さて斯く親鸞聖人はお亡くなりなされ、御子の善鸞上人は

元たる聖人御用の聖教ども『教行信證』を能く頂くと、唯圓房が書き遺されたものであらふと、斯く頂かせて貰ふのである。

猶ほ言ひますならば、今の續きの御文に、
おほよそ聖教には眞實權假ともにあひまじはりさふらふなり。權をすて、實をとり、假をさしをきて眞をもちぬるこそ、聖人の御本意にてはさふらへ。かまへて／＼聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ。大切の證文ども少々ぬきいでまいらせさふらふて、目やすにしてこの書にそへまいらせさふらふなり。

『教行信證』は一切の聖教中より、權を捨て實を取り、假を聞きて眞を明示下された御聖教である。眞實權假を判別して、眞實の聖教のみを御用ゐ下された聖人御本意の御聖教である。夫れ故「かまへて／＼聖教を見亂らせ給ふまじく候」である。「大切の證文ども少々抜きいでまいらせ候て、目やすにして此の書に添え参らせて候なり」——之は昨夏美濃に参りて以來常に申す如くに、大切の證文どもとあるは、『教行信證』初めの九章の事である。之を「目やす」にして此の書に添えるといふのであるが、夫れを「抜き出で参らせ候て」とあるは、何から抜き出下されたのであるか。即ち『教行信證』からである。即ち『教行信證』の仰せが聖人平日の御教化に顯はれてある。其の平日の御話の中より抜き出して、間違ひ無きよう目やすとして書き置くといふのであると、斯く氣づかせて貰うた事でありませ。

今日の話は大層六かしくなりましたが、要するに以上の三

間違ひを仕舞うた。其の御子の知信上人が深くおよろこびなされ、其の知信上人も承安二年正月金澤で果てになる。殘る唯圓房が聖人の仰せが間違はうかとて、露の枯草にかゝる身を以て、涙をふるつて書いた『教行信證』である、と斯く頂くと、此の『教行信證』が實にひと際有難いのである。先き程も一寸申すが如く、甚だ潜越な申分ではあるが私が皆さんに斯く信仰のお話させて貰ふにしても、色々の話し方がある。第一には筆で雑誌に書き文章にして皆さんに見て貰ふ。又皆さんより書面を頂き、書面でお答へして、聞いて頂く場合もある。又斯く講話の席で直き／＼皆さんにお話する事もある。て親鸞聖人の『教行信證』は自ら筆を取つて文字で明示下された御教化である。自ら筆で御示下された御教化故、肝腎の生粹は皆此の中に盡されてある、が其の代はり固くて一寸分かり難い。親鸞聖人御在世の時には、分かりよいやうに御子供衆や、女房御達には延べ書にして渡されたもの、如く、惠信尼の御遺狀には

師父聖人兼て御紀念に残し下しおかれ候廣文類の御仲書、誠に辱く披き奉るたび毎に、身の嬉しさ、心の涼しさ。

とある。之て見ると『教行信證』は始終傍に置いて、常に拜讀するように仕て下されたものに違はぬ、が今言ふ如く自ら筆を執り、自分の心持ちを主にしてお書き下されたもの故、容易に分かり難い。又『未燈鈔』や『御消息集』は手紙で御教化下されたものである。是れ又有難いが、矢張り其人々々に應じての御示してある。處が此の『教行信證』は上來言ふ如く平日の御教化を其の儘唯圓房が記されたものである。『口傳鈔』も

有難いけれど、『口傳鈔』は覺如上人が如信上人より聞いて書かれたもの故、直きくは無い。處が此の『歎異鈔』ばかりは直きくである。と頂くと、此の一卷の聖教の爲めに六百年後の今日、聖人の教へが斯く弘るも最もて、唯圓房が涙を揮うたま心が、此の一卷の中に籠つてあると頂かせて貰ふ事である。斯く頂かせて貰ふも私としては有縁の善知識より、眞諦門の勸化を伺ふには『歎異鈔』を拜見すべし。

といふ適切な仰せを頂いた。此の仰せが自から廣大の手引きをなして下されたのである。斯く毎朝『歎異鈔』を拜讀し、直きく聖人の御教化に遇ふ事を得るは、全く此の有縁の善知識の御手引きによる事と、一入喜ばせて貰ふ次第であります。

三

其處で今日話さんとする「自然と廻心」といふ題であります。が、之も又上來言ふ處の『歎異鈔』の語に關連するのである。丁寧な事は又段々に言ふ積りでありますが、先き程より言ふ如く、唯圓房が涙を揮つて『歎異鈔』を書く時には信仰上の間違ひが非常に多かつた事と思はれるのである。が兎角信仰上間違ひ易きは何かといふに、一方に於て如來の慈悲は此の罪深き惡逆の者を見捨てぬとあるお慈悲であると聞く故に、其のお慈悲に慣れて、どのような悪い事してもお慈悲は捨て下さらぬ、悪い事してもかまはぬのであると、お慈悲に慣れて横着になる方の間違ひである。斯くなると如來の親のお慈悲といふ方は確かり頂かずして、我と我が身て悪い事して

もよいといふ風の横着な心を起すようになる。すると又一方には悪い事してもよいなど、言ふてはならぬ、悪い事をして夫れなりてよいといふことは無い、一つ／＼心を改め氣を取り直し、惡を止めなければならぬのである、といふ方の間違ひが起つて来るようになるのである。結局間違ひは此の二通りである。之は信仰上の問題には殆んど着き物で、悪い事仕ても善いものぢやといふ方と、惡くてはいかぬといふ方と、此の左右何れかに行くが古來からのさまりになつて居るのである。

處て之を言ひますに、親は小供が可愛い、如何程惡くても其の者を見捨てぬのが親ぢやと言つて下さる。處が之を頂くと小供の方で、親は悪い事してもかまはぬ、悪い事してもよいと言つて下さるのである、夫ては此の儘でも善いのであるかと、親の所に行くは親の慈悲が分かつたのでも何んでも無い。親のお慈悲に慣れて自分の心任せにして居るといふものである。『歎異鈔』の第十六章に

信心の行者自然にはらをもたて、あしざまなることをもあかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしてはかならず廻心すべしといふこと……

此の「自然に腹をも立て云云」である。自然に腹が立つのだから仕方が無い、悪い事しても自然に然うなるのだから仕方が無い、口論をしても自然だから仕方が無いと、何事も自分の心任せにして、斯く仕てもかまはぬ、差支が無いと自然に任かせて日暮するが、「自然に腹をも立て云云」の御言葉ならんと思ふのである。之は私初め此の心が起り易いのである。

すると一方に信心の行者とある者が、そんな事を仕て居てはならぬ「信心の行者自然に腹をも立て……口論をもしてはかならず廻心すべし」と、廻向をせなければならぬ、善い心を起さなければならぬのであると言ひ出す事となるのである。すると彌々お慈悲に氣附かせて貰ふのは何處であるか。前の自然に仕て居てよいのでも無ければ、一度々々に、いかぬ／＼と廻心するのでも無い。すれば何れが眞實の道であるか。今の『歎異鈔』の十六章は茲を指示下されたのである。一方に悪い事仕てもよいといふから、一方に廻心せなければいかぬとなるのである。皆な共に間違ひである。次の御言葉には、

……この條斷惡修善のこゝちか……

一度／＼に心得違ひを直すといふは、一度／＼に善を修し惡を止める斷惡修善の心地か、である。一邊々々に廻心して、一邊々々に自分の罪を滅して助かる我々の往生ては無い。然らば自然任かせて助かるのか、といふに然うても無い。然らば眞の自然、眞の廻心とは何んであるか。眞の廻心とはそのような自分の心でこしらえた廻心ては無いぞ、

……一向專修のひとにをいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし……

である。我々心に眞に如來のお慈悲を頂き眞に廻心するは唯一度である。一代に廻心懺悔は唯一度あるのみである。而して

……その廻心とは日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたゞはりて、日頃のこゝろにては往生かなふべからずとももひて、もとのこゝろをひきかへて本願をたの

みまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ。

である。今日話し度いのは茲の一つである。茲一つを聞いてさへ頂けば、外に言ふ事は無いのである。表より裏より、色々言ふが、極まる所は茲のひと所である。我々自分の心が悪いとて、悪い儘自然に任かすのでもなければ、又悪い心を我と我が手で抑えるが本當でも無い。何が本當かと言へば、「日比本願他力眞宗を知らざる人」である。日比廣大の彌陀の本願を知らざる人が、といふ茲ひと所が肝腎である。

猶ほ詳しく言ふならば、我々此の世で自分の惡心を止め度いとて、止められるような人間では無い。善い心を起し度いとて、起るような者では無い。罪惡深重の身なのである。善き心を起せ惡い心を止めよ、綺麗な心にならねばならぬと言はれても、實、然らば思ふも、然うなる事が出来ぬのである。然らば然うならいでもよい、ならいでも、差支が無いと聞いて、夫れならば之れなりて宜しいかと安心が出来るといふに、佛が斯く言うて下さるのだらうと思ひ、幾度び自分の心にきめつけて見ても、矢張り之れでよいとは安心することが出来ぬのである、して見れば我々惡くてもよいと安心は出来ず、夫れかと言つて善い心とては微塵も起す譯には行かず、左右何れにも行きやうの無き我々である。處が佛の本願は、其の行きやうの無き我々、思ふまじきを思ひ苦しむ我々を見て、斯る罪深き仕て見よう無き者を、哀れと見て下さるが、如來廣大の本願の御まこと心である。惡くてもよいと、言うて下さるのでは無い。子供が一步でも惡に近づくと見て、夫れでよいといふ親は一人も無いのである。けれども其の善くない

悪い事をする小供故に、其者を如来廣大の親の恵みより見て下され、其の悪い事する奴故に彌々其の者が可哀相ぢや、何うか其の悪をひるがして、早く此の恵みに氣附かせて遣り度い、といふ之が如来の親心、此の外に佛の本願は無ないのである。いつも言ふ『歎異鈔』第一章の御言葉、

彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願ひてまします。云云。

如来の遣る瀬無き心見て下ると、我々は崖へ今落ちかけて居る小供なのである。哀れ今落ちて怪我をするが、今落ちて身を亡ぼすがと如来の心は小供の危ぶない状を見て、悪い事してもかまはぬと言つて下さるのでは無い。哀れあんな危い事を仕て居るが、あれは實に善く無い。あの様に自分事の事が目がつぶれて、あの様な危い事を仕て居るのである。歎くまじきを歎き望むまじきを望み苦んで居るのである。實に夫れが可哀相であると、其の我々の迷ひの様を見て、大悲の思ひ止むに止まれず、現はれて下されたのが阿彌陀佛である阿彌陀佛とは斯かる我々の様を見て、此の私に哀れだといふ此の慈悲の外に、阿彌陀佛の心は無いのである。

段々話が廣くなりますが、いつも言ふ如く三世十方諸佛の心といふも、此の阿彌陀佛の廣大慈悲を我々に知らず爲めに種々に此の私を哀れんで下さる、其の遣る瀬無き心の外に十方諸佛の心も無いのである。『愚禿鈔』には元照律師の『阿彌陀經義疏』の文を引きなされて宜はく、

ふ爲めに阿彌陀佛と姿を現はし、南無阿彌陀佛と名乗りを上げ、光明を以て照し呼びかけて居て下さるのであるぞ」と、之を言ひ、之を我々に知らせんと一念より、十方三世諸佛が我々に向うて居て下さるのである。此の遣る瀬無き心意が十方三世諸佛の大悲である。十方三世の諸佛は各自て、異なる方面に導き、異つた物を與へようとして下さるのでは無い。諸佛の願まじくなるも、夫れは皆な縁に従ひ機に應じ、手引き、導きを仕て下さるのである。彌々知らせて下さる處は、阿彌陀佛不可思議願、不可思議の親心、之を知らせて下さる外には無いのである。其の遣る瀬無き親心とは何んであるか。即ち若し衆生を我と同じき佛と爲さずば、我も佛とは成るまい、といふ此の心である。言ひ換へると、佛既に佛とあるからは、一切の衆生を救はずには措かぬ、罪があれば有る程其の者が可哀相である、障り有れば有る程其者が不便である、といふ此の心である。此の廣大の親心を頂かせずには措かぬといふ廣大の思ひを以て、十方の諸佛が此の私を眺めて居て下さるのである。薬師如来には薬師如来の本願があり、地藏菩薩には地藏菩薩の本願があるも、之は此の親心を知らせる爲に、其の者々の機縁に應じて御手引き下さるのであつて、彌々知らせて下さる所は、大悲の阿彌陀佛の親、御まこと心、之を知らせ下さる外には無いのである。

『和讃』に

諸佛の護念證誠は 悲願成就のゆへなれば
金剛心をえんひとは 彌陀の大恩報ずべし。
斯くの如く諸佛が色々手を廻はし、姿を代へてお導き下さ

勢至章に云はく、十方の如来衆生を憐念したまふこと母の子を憶するが如し。大論に曰く、譬へば魚母の若し子を念ぜざれば子即ち壞爛する等の如し。

十方の如来が私を哀れんで下さるは、丁度母の子を思ふが如くである。其の母の子を思ふて下さる思ひは如何に、即ち魚の母が子を育てるに、子を念ぜざれば子は皆な腐れ爛れて仕舞ふ。魚の子の育つは、偏に魚の母の念力によるのである其の如く十方諸佛は我々十方衆生を哀れみ、此の私に大悲の親の思召を知らせようとて、永劫の昔より我々を護念して居て下さるのである。其の護念もひと通りの護念で無く、母の子を思ふが如く、である。夫も子一人に親一人、と言はるか、十方の如来は衆生を、一子の如く憐念す。十方の如来は皆な我々を、一人子の如く哀れみ下さるのである。又『略文類』の中には、

三世の諸如来出世のまさしき本意は、たゞ阿彌陀不可思議願を説かんとなり。

三世の諸如来も又我々を哀れみ下さる。十方と言ひ三世といふ、十方は十方法界有りとする佛のことである。三世は過去未來現在三世の諸佛である。此の三世十方の諸如来が我々に對し、母の子を思ふが如くに日夜我々を哀れみ、我々を念じて下さる。其の斯くして我々に知らさうとして下さる所は、結局何であるか。「たゞ阿彌陀不可思議願を説かんとなり」である。此の多くの佛が最後に何を知らせて下さるのであるか。即ち「大悲の廣大な親がまじく、爲すまじき事を爲し、思ふまじき事を思ふ其の者を哀はれみ、其の者を救

るが、結局此の彌陀の大悲を知らせて下さる外は無い。而して斯く諸佛が彌陀の本願の證據に立ち、護り念じて此の御慈悲一つに引き入れて下さる所以のものは、「諸佛の護念證誠は、悲願成就のゆへなれば」と、もとく阿彌陀佛の第十七願に、十方諸佛が此の我が心を傳へるやうにとの阿彌陀佛の本願がある。之れがもとになりて斯くは十方諸佛が證誠護念して下さるのである。故に言ひ換へて見れば、十方三世諸佛の證誠護念といふことも、結局は阿彌陀佛の遣る瀬無き廣大御親心といふ此の外に無い。斯くの如く十方の諸佛は遣る瀬無き思ひをもて我々を護り、持ち受けて居て下さるのであるぞ、釋尊が此の世に御出世されたも此の廣大親心を知らせんとの外には無いぞと、之れが親鸞聖人の御教化である。

四

其處で話が前に戻りて、「日ごろ本願他力眞宗を知らざる人彌陀の智慧をたまはりて云云」の御示しが茲である。言葉が多くなりますけれど、茲は何とも言ふに言へぬ。『和讃』に

十方微塵世界の 念佛の衆生をみそなはし
攝取してすてざれば、 阿彌陀と名けたてまつる。

十方微塵世界の念佛の衆生を觀をなはし、其の者を助けずには措かぬといふ遣る瀬無き思ひを以て見て居て下さるが阿彌陀如来の廣大親様である。阿彌陀佛とは此の者を助けようとの廣大親心、此の外に無い。釋尊が此の世に現はれ下された

は何の爲めか、偏へに此の廣大親なる事を知らせ下されんが爲めである。釋尊が「唯除五逆誹謗正法」と示し下されたも外は無い、偏に此廣大の親の慈悲を知らせ度いとあなたにやるせなき親心からである。本願に五逆と誹謗正法の者が助からぬとあるからとて、本願が助けぬとあるのでは無い。其の如き五逆十惡の者を助けるとある遣る瀬無き親の心が分らぬか、此の廣大の親の慈悲がまだ頂けぬか。此の悪い者が哀れだといふ親の心の分らぬ者は可哀相である、此の廣大の御心も頂かず、悪い事仕てもかまはぬ杯言つて居る者は、親の本願にも漏れ、母の慈悲にも漏れるぞと、あなたが心を盡して警め下されたのである。罪深き者が助からぬと言つて、罪深き者を見捨てられるといふのでは無い。其の様な者は彌陀の本願にも漏れるぞと、御示し下される釋尊の御意は、之程迄にしても母の心が分らぬか、親の心が分らぬかと、其の廣大の御示しが「唯除五逆誹謗正法」の文である。實に廣大の御教化であります。夫れ故此の阿彌陀佛の廣大な御意を頂かぬようならば、釋尊が此の五濁惡世に出て下された所詮もなくつて仕舞ふ。故に早く此の慈悲を頂けよと、あなたの心の有り切りを打明けてお示し下されたが今の「唯除五逆誹謗正法」の文である。して見れば惡人だからと捨てられるといふので無く、其の淺間しき者、罪の者が哀れである、といふ遣る瀬無き思ひより現はれ下されたのが、彌陀の本願である。十方微塵世界、念佛の衆生を攝取して捨てぬといふのが阿彌陀佛の御意である。先き程よりいふ十方三世諸佛の仰せといふも此の外に無い。以上は釋尊と阿彌陀佛を、

「釋迦彌陀は慈悲の父母」と、父母に譬へた上より申したのであります。又聖人は光明名號の因縁と申して、南無阿彌陀佛の六字名號の父の御名乗り、又私を可哀相であると念々念じて下される阿彌陀佛光明の母、此の南無阿彌陀佛の父の名號に呼び醒まされ、八萬四千の光明の母は慈悲の懷をひろげて攝取して下されるとお示し下されてある。又先き程も一寸申した『勢至和讃』の御示しの上より頂くと、

超日月光この身には、念佛三昧をしへしむ、
十方の如來は衆生を、一子のごとく憐念す。
子の母をおもふ如くにて、衆生佛を憶すれば、
現前當來とをからず、如來を拜見うたがはず。
我もと因地にありしとき、念佛の心もちてこそ、
無生忍にはいりしかば、いまこの娑婆界にして、
念佛のひとを攝取して、淨土に歸せしむるなり、
大勢至菩薩の、大恩ふかく報すべし。

斯くお示し下されるは何か。大勢至菩薩が我々に此の南無阿彌陀佛を知らせんと遣る瀬無き思ひから、日本に於て法然聖人と現はれて下されたのである。御師匠法然聖人は其大勢至菩薩が此の世に現はれて、自分を導いて下されたのである。と、お喜びなされたのである。斯く大勢至菩薩の法然聖人が日本に來り、此の南無阿彌陀佛の本願をお知らせ下されるは何故であるか、もと其の勢至菩薩が因地に居られた時、此の南無阿彌陀佛の念佛の心を持ちてこそ無生忍は入りなされたのである。夫れ故此の度び其の大勢至菩薩が再び此の世に現はれ、念佛の行者を導きて淨土に歸入せしめて下されるが、

法然聖人御一代の御教化であるとお喜びなされたのである。而して其の法然聖人に遇ひ聖人がお慈悲にお氣づきになるに至つた大もとは、常に言ふ如く遣る瀬無き聖德皇太子の御導きによるのである。『和讃』に

大慈救世聖德皇、父のことくにおはします、
大悲救世觀世音、母のことくにおはします。

即ち聖人十九歳の時、太子の磯長御廟で告命を受け、二十九歳の時六角堂告命の御導きにより、法然聖人に遇ひ、阿彌陀佛本願のお謂れをお頂きなされたのである。

斯く段々頂いて來ると、此の他力眞宗の教といふ事は外の事は無い、大悲の遣る瀬無き親様が、此の罪深き者を見捨てぬとの遣る瀬無き思ひより、或は光明名號の縁をもち、或は此世に現はれて釋迦の父彌陀の母と示し、或は十方三世無量の諸佛と共に、一子の如く憐念して下され、或は自分をお慈悲に引き入れる爲めには、大勢至菩薩の法然聖人と顯はれ下され、種々無量の手引きにより本願の御慈悲一つを聞かせて下される、此のお慈悲一つを頂く外に、無いとお喜びなされたが親鸞聖人の他力眞宗である。其處で「日ごろ此の本願他力眞宗を知らざる人、彌陀の智慧をたまはりて……」此の「たまはりて」が難有いのである。「……日ごろのこゝろにては往生かなふべからずと思ひて、もとの心を引きかへて、本願をたのみまいらすをこそ、廻心とはまうしさふらへ」である。今迄自分の力で善くせんらぬ／＼と思つて居たは間違ひであつた。今迄自分の惡心を止めなければならぬと、自分で止められるもの、如く思つて居たは間違ひであつた。此の到底

助かられぬ、救はられぬ此の身を救はうとの廣大御本願であつたか。此の我が身知らずの此者をかねて承知で、其者向けての御呼聲であつたかと、「日頃の心にては往生叶ふ可らずと思ひて、もとの心を引きかへて」である。斯く、遣る瀬無き親心から哀まします御慈悲なりしかと、氣のついた一念が廻心である。日頃本願他力の親のお慈悲を知らぬ者が、茲に初めて彌陀の本願に氣が付き、日頃の心にては往生叶ふ可らずと思ひて、今迄の心をひるがへして此の自分を見捨て給はぬお慈悲一つと、頂かせて貰ふ事が出来るのである。結局此の一つを頂く外はないのであります。色々言ふけれども、私共自分の計ひて幾ら善く仕度いとて、善くなる心では無いのである。又夫れが善く出来る位なら、心配は入らぬのである。其の善くなれぬ私をよく承知して、其の者が可哀相との遣る瀬無き大悲心、から、長く今迄御苦勞して下されたが、阿彌陀如來の廣大親心なのである。日頃を願他力眞宗を知らざる人云々「夫れ今迄此の廣大本願を知らなんだ者が、此の廣大の親心一つに氣附かせて頂く。お慈悲を頂くはこゝ一つなのである。此の親心に氣が附きてこそ、此の罪深き私が罪の深きに心配もせず、又罪深くてもよいなどいふ横着心を起すて無く、斯く罪深き極惡深重の私が、斯く迄深きお慈悲を蒙るとはさても、喜ばせて貰ふ事が出来るのである。斯く頂く一念に自分の心で計ふてなく、ひとりてに「もとの心をひきかへて、本願を頼み參らす云々」、如何にも如來のお慈悲が難有いと頂かせて貰ふ事が出来るのである。何うか我人共に茲に氣づかせて頂き度い事でありませう。(完)

人生問題と信仰

熊木縣會議事堂に於て

近角常觀

信仰上の話は吾々の心の上に於て絶對に之を認むる實驗であつて決して机上の理想ではない、て今日は他方信仰の根本義に就てお話を。

偕て人生問題とは甚麽ものであるか、範圍は頗る廣くなつて來るが、要するに吾々が此世の中に生れ出て、死ぬ迄に起きて來た有りとも有らぬ問題は皆人生問題である。それで此問題を一々色分けしたら種々雑多であらうが其中最も吾々に深く感ずるのは職業上、問題、生活上の問題である。釋尊の佛教を始になつたのも哲學上だの倫理學上だのと言ふ高尚なる學問上の立場からされたのではなくて、其發心された動機は生老病死の爲に此世の中に悶え苦んで居る多くの憐れなる人々を如何にしても此渦中から救ひ出してやりたいと言ふ、極卑近なる人生問題に觸れて修業されたのである。近年東京に於ける青年の間にも熾に信仰心が萌して來たが、之は全く青年の生活が眞面目になつて來たからである、て此信仰と言ふものは自己と他人との關係に於て第一歩を開くのである。

聖德太子も其十七憲法の第一に於て和を以て貴しと爲す忤ふ事無きを宗とす人皆黨有り、亦達する者少なし、是を以て或は君父に順ぜず、乍ち隣里に違ふ、然れども上和さ下睦しく事

二

世間で信仰を説く者が動もすれば、宇宙が什麼の、哲學が什麼のと高尚なる學理上の詮索のみに亘る者があるが、吾々の求むる處は其麼學理ぢやない、空論ぢやない。吾々は此日常生活と高大なる佛陀の境界との關係を得たいのである、相對有限の我と絶對無限の佛との連絡を得たいのである、天人貫通の域に達したいのである。例へば此處に一人の大富豪があつても、其富豪が他の貧しき者を救ふ方法を講ぜなかつたならば兩者の間には何等の連絡も無いのである、或は又貧者の方から救済の要求をしても富者が之を容れなかつたならば富者の有難味は無いのである。丁度貧しき苦しき惱める吾々人間同士が寄り合つてゐても、佛陀の絶對の富即力を得る事が出來なかつたならば、佛陀の有難味、宗教の味はひは全く無いのである。今絶對の佛陀と相對の吾々との連絡をつくるに二つの方法がある。其一つは迷へる人間が自分で勢一杯の力を出して理想的境界に上り佛陀に達しやうとするのである。尙少し分り易く言へば此處に菩提の岸がある、其岸を自分一人の力で登り詰めて菩提岸頭の境界は此麼者だと知り得たいと努力するのである。處が實際に於て自分一人の力で此岸頭に登り着くと言ふ事は頗る難事である、私自身の實驗から言ふと全然不可能である。時に自己の力を信じ切つて居る人々の間には、此岸の半位まで登つて居つて未だ見ぬ岸上を此麼ものだと思ひ違へながら、安心せねばならぬと思つて居る人がある、けれども吾々は其麼事せねばならぬなど言ふ餘義なくされた事

を論ずるに諧ふ時は則ち事理自ら通じて何事か成らざらんと言はれてある通りに、吾々人間社會には和と言ふ事は最も大切な事であるが、吾々は眞の和なる者を保て行きつゝあるか何うか此處が即疑問の生じて來る處である。今吾々が一寸考へて見ると、家庭間に於ても友人間に於ても眞實隔てない理想的の交をして居ると思ふだらう、いや家庭友人計りてない、宗教上、道德上の本意たる敵を愛すると言ふ精神を以て敵に對しても十分の愛の念慮を以て其敵を感化して居ると思ふだらうが、願みて沈思熟慮すれば事實吾々は眞に敵を愛して居るものではない、眞の和を保つて居る者では無いと言ふ事が分る。實際の場合に於て吾は確かに敵を愛して居ると思ふ時は半面既に彼は自分の敵であると言ふ事を認めて居るのである。念頭既に敵と言ふやうな感じがあつてはトテモ眞の愛ではないのである、此場合安心して彼を犠牲性になるの、身を捨てると言ふ事は事實出來て居ない。サア此處に人生問題は起きて來る。即吾々が絶對の愛、絶對の眞を見出す事が宗教上の問題である、人生必ず一度は此處に突き當つて來る。例へば人が死の關門を通り脱ける時になつては如何に親密なる妻子でも友人でも死に對する吾々の苦悶を除き去る事は出來ぬ、人は此處まで苦悶して來ると宗教とは自己と他人との關係、換言すれば人と人との關係では無くして、高大なる佛陀と迷へる吾々との間に貫通を得るの問題となつて來る。言ひ換ふれば相對界では絶對の力は得られぬと言ふのである。其處で聖德太子は其憲法の第二に於て篤く三寶を敬せよ三寶は則四生の終歸、萬國の極宗なりと言はれてある。

は眞の安心は出來ないのである、誠の連絡は得られないのである。然らば他の一つの方法は其麼ものかと言ふと前のは全く反對の方法である、即世の中の人は總て悶え惱んで居る、苦しんで居る、藻掻いて居る、之を佛陀の境界から眺むると什麼しても冷然見逃し能はぬのである。世間の悟つたと言ふ人々から迷へる者を見た時には唯彼は迷へるものだと言つて哀を感じずには居られやうか、大慈大悲の佛陀の遣る瀨ない心から迷ひ惱める人々を御覽になれば如何にもして救つてやりたいと其高大なる絶對の力を添へらるゝのである。例を以て前の方法に較べると、後者は岸の上から佛陀が大慈大悲の網を下げられてある、其高大なる力の網に縋りて救はれると言ふのである、即ち自分の力を以て達せむとしても不可能な事を、上から下さつた網に縋りつきさえすれば自ら救けらるゝと言ふのである。換言すれば佛陀の力によりて救はれると言ふのである。即前者は自力信仰であつて、後者は他方信仰である。然らば他方信仰の眞の味はひは何處にあるか、吾々が自己の力に倚つて岸頭に上り得ると信じてゐる間は此有難い他力の味は到底わかるものでない。私は今此眞の味に就て私の友人が信仰に入つた實例をお話ししよう。

三

私の友人に西川と言ふ理學士が居た。理想の上から佛を信じやうと努め、其麼佛が居るなどとは什麼しても思へぬと言つて信仰が起きなかつた。處が其人が遂に胃癌にかゝつて病床に苦しんだ。或る時信仰を求めて苦しんだ極、枕頭に居る兄

さんを省みて兄さんは其麼佛があるものと思はれませんかと言ふんだ私と言つた、君は佛の境界がわからぬから信せぬと言ふが夫れは大なる間違だ、吾々岸の上の境界がわかつて居れば今更佛に助けて貰ふ必要はないじやないか、吾々は實に生死岸頭の下に苦しんでゐる人間である、吾々の信ずるのは岸の上を眺めて後に信ずるのではない、徒らに岸上を眺めて憧憬するのではない、唯吾々は岸の上から垂れた救ひの力を戴く事を有難いと信ずるのである、唯信鈔にも

例へば人ありて高き岸の下にありて上る事能はざらむに、力強き岸の上のありて網をおろして此網に取りつかせて吾れ岸の上に引き上せんと言はんはんに、引く人の力を疑ひて網の弱からむ事と危ぶみて手をおさめて之を執らずば更に岸の上に入る事を得べからず、ひとへに其言葉に従つて掌をのべて之を執らむには即上る事を得へし、佛力を疑ひ願力を頼まざる人は菩提の岸に上る事難し、唯信心の手をのべて誓願の網を執るべし、佛力无窮なり、罪障深重の身をあもしとせず、佛智无边なり、散亂放逸のものをも捨つる事なし、唯信心を要とす其他を顧みざるなり。

と言つてある通りに信仰と言ふは理窟の角が折れて後に起きるのである、唯信仰してもまだ救はれんか救はれないかはわからぬから一度佛陀の境界を見届た上でなければならぬ、唯信心の力を疑ふようではトテモ信仰は得らるゝものでない、唯信心の手を仰べて誓願の網を執りさへすれば佛の大慈大悲は悪人善人の差別なく必ず救ひ上げらるゝのである。故に親鸞聖人も

た。君が今まで善だと信じ切つて居た善は未だ眞實の善でなく、今まで敵を愛し、他人に同情したと思つて居た愛や同情は眞實の愛や同情で無い事を発見した。而かして君の信仰は彌々堅くなつて来た。

此麼事は獨り西川君ばかりでなく理論的に信仰を得んとする今の青年にはよくある事である。尙私の信仰に入つた動機をお話して見ると私は自分の實行の上から考へて自分がよく出来ると思つて居る間は決して出来るものではない事を知つたのだ。今日の社會を見渡して見ても理想の高い人程餘計に苦んで居る。自分の理想と現實の境遇とが不如意なのを苦み不足に思ひ、自分の理想の爲めに却つて敵を作つて居る。トルストイは世の中は無抵抗にさへ行けば敵は無いと言つた。或はさうかも知れぬが、今人が右の頬を打つた時に直ぐに又左の頬を向けて打たせるやうな事が實際に於て其麼事はトテモ出来ぬ。其れが理想ならば知らず事實に於て其麼事はトテモ出来ぬのだと知つた時私の心はモウ堪へられなく動き初めた、トルストイの無抵抗も信ずる事は出来ぬ、自分の力一で爲し得ると信じてゐた事も事實の上には不可能である事を知つては自己の力其者の頼み甲斐なき其微弱なものである事と感して非常に苦しんだ。此時私は自力の恃む可からざるを知つて他力の眞の有難味を感じ、如來の本願とは此處である、此弱き吾を救ふ眞の親、眞の友は佛であると思ふた時、私は安心した。他力によつて救はれたいと岸の下から岸の上を眺めて徒らに岸上を憧憬して居る者は、他力の中にあつて既に自力の危きに陥つ

善人なをもて往生をとく、いはんや悪人をや、しかるを世の人常に曰く悪人なを往生す如何に況んや善人をやと、この條一旦其謂はれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり、其故は自力作善の人は偏に他力を頼む心掛けたる間彌陀の本願にあらず、しかれども自力の心を歸して他力を頼み奉れば眞實報土の往生をとぐるなり、煩惱具足の吾等はいづれの行にても生死をはなるゝ事あるべからざるをあらはれみ給ひて願を起し給ふ本意悪人成佛のためなれば他力を頼み奉る悪人最も往生の正因なり、よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと仰せられ候ひき。

と仰せられて居る。佛の親心から見れば悪い子ほど却つて可愛いのであるから自分の様な者でも佛に救はれるだらうかなど其麼遠慮心を此方から出す必要はないのである。例へば先日の鐵嶺丸の沈没の際の如きでも遭難者の中で誰が一番先に救はれるかと言へばよく海を泳ぐ事の出来る者である。即善人なをもて往生を遂ぐ、況んや悪人をやの言葉に應ふのであつて、他力の救ひと自力の悟りとは既に此根本義に於て相反して居るのである。悟の方では却て善人を先にするが救ひの方では全く反對である。此處に至つて他力の眞の味がわかる、他力救済の本旨は此處にあるのである。親鸞聖人はまた「往生程の一大事専ら如來に任せ申すべし」と言はれて居る。南無阿彌陀佛と只管六字の名號を唱へ佛の力を信じ岸上から垂れた網に縋りさへすればよいのである。説いて此處に到つた時西川君が多年の疑問は釋然として晴れ、之より熱烈なる信仰の人となつたと同時に西川君の精神は大分變つて來

て居るのである。一向専修其綱をいたゞきいてこそ他力の本願は達せらるゝのである。私は之等の實驗によつて幸に其有難い綱を頂く事が出来た。嗚呼人生に此佛あり、此恵みあつてこそ安んじて此の世を渡る事が出来るのである。願みれば佛でなければ満足の出來ぬものを私は今まで不可能の人間に求めて居た。自己に求めてゐた。敵で無い人を敵だと思つて居た自分が敵であつたのである。自分が既に敵であつては其敵をトテモ他人が愛して呉る筈はないのである。而して其の者に對する眞の同情者が佛なる事としらせて貰うたのである。

四

處が人生の要求には二つある。一は人に對して求むる同情であつて、一は人を救ひたいと思ふ同情である、之を理想通りに得れば人はよく満足し安心する事が出来るのだが、吾々相對の力では到底理想通りと言ふ事は出来ない爲に、前者の要求を持つ人は常に不足を感じ、後者の要求を持つ人は世間の道德見界から言へば感心な事であるが、時に力の及ばざる事を悲しむのである。之即ち廣大無邊の力ある佛に求めざるはぬ事を自分の力一つてしようと思ふから其麼不満足を感じるのである。法華上人も初めは自力に依つて安心を得むとして多年艱難苦行をされたが、一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業願彼佛願故の文字を讀むに至つて、吾より願を起すに非ず、佛より吾々を救ふの慈悲に絶るのであると悟られたのである。

斯う話して居ると考へ出すが丁度昨年今頃だつた。私が吉井町に滞在して居る時に滋賀縣の大地震の急報に接して其儘近江の方に歸つたことであつた。其の際長くも今上陛下には北條侍従を御使はしになつて具さに罹災民の家をお尋ねさせなされて居た。此の場合に北條侍従は如何なる方面より先にお尋になつたかと言ふと罹災民の中でも最も貧困な最も哀れなもの、其災難を最もひどく負うた者からされて漸次輕い者に及ばされた。之を實見した私は善人なをもて往生を遂ぐ沉んや悪人をやの親鸞聖人の言葉と思ひ出して痛く感慨に耽つた事であつた。そして昨年また伊藤公が哈爾濱で横死を遂げた時分に陛下からお尋ねにお使はしになつた人は矢張り北條侍従であつたのを見て我 陛下の大御心から吾々國民を見そなはせらるゝ時には上公爵も下一布衣の身も其御慈愛に至つては變りなくお救ひ下ださるのであると思つて私は又痛く感激した事であつた。佛の大慈大悲の御心も亦斯の如きもので吾々常に六字の名號を念じて救ひの綱に縋る者を佛の親心からは貴賤上ト善惡男女の差別なく必ずお救ひ下さるのである。聖覺法印は亦「唯信鈔」に

名號はづかに六字なれば盤特がともがらなりとも保ち易く之を唱ふるに行住坐臥をえらばず、之を行ずるに時處諸縁をさらはず、在家出家若男若女老少善惡の人をもわかず、何の人か之に洩れむ

彼佛因中立弘誓 聞名念我總迎來 不簡貧窮將富貴
不簡下智與高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深
但使廻心多念佛 能令瓦礫變成金

この心之を念佛往生とす。
と言はれて居る、南無阿彌陀佛(完)

告白

鈴木龍司

入信之經歷

同君は多年心を潜めて信仰問題に苦心せられた方である。而して此度絶對の信仰に入らるゝや歡喜の念やるせなく一氣呵成百二十有餘枚の告白を認められた。抑々筆を幼時の記憶より起し細大の事件皆懺悔せざるはなし實に煩惱の氷融けて功德の水となるか如くである。君は實に理想家であつた。中學時代より精神上の問題に注意し、一旦無我愛を深く信ぜられ、又精神主義に同化し、あらゆる經歷を過ぎ來られたが、中心の平安を得ることが出来ず、殊に本年初より親友の爲に我身を捨て、蓋瘞されたのが原因となりて、從來の修養的立場、主觀的對安にて満足するあたはず大煩悶の餘、遂に攝取心光中の人となられた。而して左の一篇は正しく其入信の時期を描かれたるものである。而して君が性來克己奮闘の生立は君が入信の背景として大に必要ではあるが、殘念ながら之を省略して最後入信の部分だけを掲げたのである。同君及び讀者諸君幸に之を諒せられんことを。編者識。

上

私は山中にあつて、かう考へる様になつた。成程四圍の境遇上、今私しの考へて居る如來の恩恵といふものは、誰が何といつたとて疑ふべからざるものだ、これは確信する。しかしながら、色々の事情が私を取巻いて私を苦しめる時に私はこれが、即ち私に對する愛なのだ、これによりて開發されるのだ、何事も恩恵ならざるはないのだからと、一つの理屈をそこへ入れねばならぬ。よろこべんことが來ても、いやこれは恩恵なのだ、自分で理屈を付け、よろこべんのは自分がまだ信仰が足りないからだと思つて満足しようとして居た。ところが、それではどうしても、衷心に安んずることが出來ないのを知つた。私には、今如何にするとも否定し難き二つの欲求がある。絶對に他を愛したいといふことと、絶對に他から愛されたいといふ欲求これである。私は、今迄人を愛しやうなどと思ふことは、生意氣な言草であるといふ教を聞いて、それで満足して來たが、私はそれは満足が出來ない、絶對的に他を愛したい。この度の事に於ても私は全力を盡して、他人を絶對的に愛した。時々不足は出たけれども、それは悪いのだとして一切他に報酬を求むる心は否定して居る。しかしながら、世の中に誰も自分の様な考で自分を愛して呉れるものはない。一面からいへば、我は之が爲に餘程内面的になつた。信仰的になつた。感謝に堪へない。しかし、他人が私に向つて感謝して居らぬは、明な事實である。いや私は彼等を絶對的に愛して居る以上、彼等から愛されやうと

はしない。しかし、誰か今僕が彼等を愛して居る様に、彼等は自分勝手な我儘をして居る。僕は他の悪いことを知つて居るのである。しかしながら、知れば知る程、同情は増して來る。其他の人だつて絶對的に私を信じて居るのでは勿論ない。しかし、私は捨てないのだ。その様に私を愛して呉れるものがほしい。私の中學時代の友人の母で、その友が死んだので自分の子の様に思つて愛して呉れる人がある。私はこんな人に絶對に愛されて見たいと思つたこともある。しかしその愛は自分の子が可愛いからである。私を絶對に愛するのでない。かかる場合、近代的の人は直に戀といふことを思ふであらう。しかしそんなことは、問題にならぬ。自分の解決が付かぬのに、餘計なものを一人背負込んでどうする。かゝるもので満足が出來るとは思はなかつた。また、酒でも飲んでといふ様な浮薄な考は絶對に起らなかつた。たゞ眞實の同情者に遇いたいのである。私は友人に對しても、近親に對しても、一方ならぬ心配をしてやつて居る。しかるに世間何處を見ても自分をそれ程に思ふて呉れて居る人はない。あゝこんな事を考へるのは悪いのだ、信仰が足りないのだと思つても、信仰によつてそれを切り開いて行くことは出來ても、そこにどうして一應の理屈が入る。これではいやだ。理屈なしに、ひしと私を抱いて呉れるものはないか。私一人を賭物にし、五劫思惟の願を立て、今正覺を成つて居るといふ様な、人格的の如來を拜することが出來たらどんなに心強いことであらう。難有いことであらう。今私が思つて居る様な、漠然たる如來では満足が出來ない。先生の『懺悔録』を見た時に、佛は眞實

の同情者だといふことをいはれたが、あゝいふ人格的の如來に遇いたい。梁川氏は、神を見たといふことだが、僕もどうかそういふ境遇がほしい。梁川氏の言葉に、要求の起るのも既に、他力の御催しだといふ様な意味があつた様だが、それに異いない。かゝる強き要求の起れるは、既に満たされる前兆である。難有いことである。手を合せて、何處ともなく拜んだことも二三回あつたが、未だ遠い理想として存在し、現實の感は起らず、矢張衷心満足することは出来ず、我未だ眞實の親に遇はずとの感益々深くなつて参ります。

こんなことを考へてやがて山を出て、途中國に一泊して、上京したが、如來は飽くまで私を追求して捨て給はね。又しても種々の事情を下し給はつた。何と御禮を申していいやら、心も言葉も盡き果てる。あゝたゞ泣かんのみ。南無阿彌陀佛。

上京早々、他より聞くに、私の悉しく云ふを待たずして、既に事は成立したといふ。私は一時茫然たるものがあつたが、そういふこともあらう、彼の人にしては無理もないことだと思つた。しかしさりと、あまりに脆きに驚いた。ああ我の今迄の苦しみは何に因することと思ひしに、信ずべからざるもの信じ、當てにならぬ人を過信したるに由れるか。我は各人の人格を、各尊嚴なるものとして尊重し、その何れにも偏頗なからんことを期したが、あゝこれが誤であつたか。元來今迄私は、自分のいふことは、註釋なしに誰にでも判ることであらうと思つて居た。俱樂部の人々に對しても同じ感んじてあつたのだ。それで失敗した。誰も自分の様な考を持つて

彼れか一生涯の友として呉れと頼むのに、いはれなくともさ、僕は今迄と少しも變らぬと勿論快諾を與へたのである。事情として多少困難なこともあるのは承知して居るのだから、また困る時には何時でも持つて來い、待つて居る、それまでは勝手にしろ、某氏の方へは、僕が適當に折を見て云つてやるといつたのである。

僕はその頃井々會といふ合宿所に居つた。學年の變ると共に先輩の學士は皆去つて、殘るは僅かに理科二人、一高の一人と私とになつてしまつた。理科の人々は先輩ではあるが會のことなどは何もしない人である。責任を持つてやるべきは僕一人なのである。これは既に先輩も承知して心配されたので、上の人を二人も持ち、自分一人で一切を處置して行かねばならぬ私に同情し、涙を以て托されたことである。君でなければといふ信認に感じては、調子に上り易い私は、自分の性格も、冥想も、思索も、犠牲にするつもりで僅かに二年間位と思つて涙を以て引受けた。處が九月になつて來て見れば、秋風落葉である。前の様な春風胎蕩の趣は何處を探しても見當らぬ。これはある中心があつて、それに集つたものが、中心がなくなつて、三人が三人の天下である。何れの所にも統一點を見出さない。これを調和するのが、私の役目であるが、技巧を用ひねばならぬ様を調和はしたくないと思つた。且つ休暇以來、私の思想は一變して、心中動搖の絶え間がないので、かゝる重荷には到底堪へ得べくもなし。且つ何人が考へても、維持の出來ない理由があり、各メンバーも合宿は望んで居らぬ。私は自分を犠牲としてもいゝと思つて居たが、

居るものだと思つて居た。しかし、思へば高等の教育を受け、或は受けつゝある人と、同等に凡ての人を見たのか誤りであつたか、人は矢張り人だ、僕はこれから人を輕蔑するよ。僕は今迄人間の決心は確實なものだと絶對には思はなかつたまでも、大分の價値を以て考へて居た。然るにこの爲體は何事ぞ。そのために悲觀し苦しんで居る様子を聞いたればこそ、囁困るであらふと思つたればこそ、いらざるおせつかいもしたのである。某々のいふ如く人間を輕蔑する考の起るのも無理はないことだと思つても見たが、それではどうも何となく、物足らぬ。矢張前と變らずに同情して行きたいといふ要求がある。どうせ世の中のものにはあてにならぬものだ。そんなものは輕んぜよといふ思想には同化するとは出來ない。如何なる場合でもそれが、恩恵であると考へて行きたいのだ。すべてのものを尊重して行きたいのだ。

さりながら、一方私の身になつて考へて見ると、だし扱かれたとは私のことである。今迄、何をして居たのか判らなくなつた。某氏に對して、何の面目がある。某氏は僕のいふことは絶對に信じて呉れたのである。さんま騒とは誠にこの事である。こんなことなら、初めからいはぬが増しなのだ。半年以上の苦心が何所に根柢を止むるか。かくいへば、私は腹が立つた様であるが、そうではない。今でこそかうはつきりと書けるが、その瞬間に於ては實をいへば、こんなに明瞭には意識に上らない。いやこんな不平がましいことを意識線上に出さしては悪いのだ信仰が足りないのだ、これ位なこと腹が立つ様では、まだ信仰が足りないと思つて、平氣なもの、

どうして／＼そんな生意氣をいつて居る場合でない。靜かに讀みもし、考へもし、何とか自分の考を確立しなければ立場がない。たゞ先輩に對する義理といふこと丈で困つて居たのである。私はこゝに於てか、處決した。一切の責任を自分に於て引受けて、解散すること。先輩からは捨てられるだらう。涙を以て頼まれ、涙を以て引受けたことを破らねばならぬ身の腑甲斐なさを悲んで、ついにはかくなることは、具眼の士は知りつゝも、僕一人に責任を負はせたのは、ひどいと先の信任を却て恨む様な氣も起きた。誰も眞に相談相手になるものはない、誰も同情して呉れる人はない。甲は親友だから、云つて話して見ても、どうせ僕などには意見はない、人の先へ立つて心配の出來る君は幸だ位で取合はぬ。飽きて、自分にはアクチブでなければならぬ。あんまり泣言ばかりいふ様であるが、つらかつた。メンバーの一人の如きは、そう君の様に一一眞面目に考へて行つたら、人物が大きくなれないといつたが、僕は人物が大きくなるとはなりたくないのだ。ただ安心さへ得らるればいゝのだ、責任さへ盡せばいゝんだ。そんなことをいつて居られる人が羨ましい。どうせ駄目だと思ふから皆んな先へ出さしてしまつて、自分一人で會計も何もやつたが、夜十一時少年を相手に獨りて計算を了つた時の如きは、情けない氣持もした。またこゝに住つて居つた小供を連れて老婆があつたが、それも解散となれば氣の毒だ。出來る丈は心配もしてやらねばならぬ、それやこれやで上京以來安眠の期がなかつた。老婆が貴下一人の御苦勞は一通りではな、大分ふけて來ましたよなどいはるれば、あゝ老婆にまで

同情が貰ひたかつたのか。御前にいつても判るまいが、己れの學問は世の中へ出ても大抵こんな仕事をなさるのさ。創立の様な花々しいことはないといつた。女郎の泣言の様なことばかり云つて居たのはこの時分の私である。されど一切を告白して、先輩に事情を報じた後は、氣も樂になつた。あゝ今年には僕には破壊の年であると思つた。俱樂部を離れて後輩を捨てた私は、今又先輩と手を切つたる余は今年に於て出家したる也と日記に書いた。體を破壊せねば幸だ位に思つて居る。こんな風に夜も寝ずに一人で骨を折つたが、決して信仰は失せたとはいはぬ。されどされど如來はついに私を捨て給はなかつた。

この間、私は求道を讀んで、「遠慮心と横着心」、「歎異鈔について」の二文に至り今迄の私の感じをよよいひ表はされた心地がし、益々先生が慕しくなつた。

九月二十日の日記に

自分が親の地位に立ちて、我に加はれる親心を知らないものだから、少しばかりの努力に對して直に報酬を求めめるのだ。自分はどうかして、眞實の我親にしみじみと御遇ひしたい様な氣がする。多田さんにこの事をいふてやる。

求道を讀み、非常にありがたひ感じに打たれた。泣きたくなりた。

夜社會學を讀む。

僕はどうしたとて仕合者だ。南無阿彌陀佛々々々。

九月二十一日には

中島さんの倫理を了へてから、神田に〇〇訪ふ。倫理學原

くなくとも難有いんだとか、よろこべんものが可愛さうなのだとかいふ、氣安め見た様な言葉ではどうしても衷心満足が出来なくなつて、私は自分の考をまともにいふに過ぎないのだが、どうやら浩浩一派の人に對する批評の様に聞え、又浩浩洞へ行けば御前はまた無我愛の考がぬけぬといはれる。自分はどうしても自分の信仰を確立せねばならぬ羽目になつた。私は何時もいつて居た。佛様は難有いが、人は憎らしいといふ様な信仰ならば、つまらぬものである。四周の一切の上に如來の力は働いて居るのではないか。人の親切、すべての事情條件の變化皆これ即ち如來の御徳である。悪くいつて呉れる人も、褒めて呉れる人も、一樣に如來の愛を私に注いで呉れるのである。これを感謝しなければならん、これに對して感謝の思が起らずに、別に遠い所へ如來を立て、難有がつて居たところて何になると思つて居た。或時キリスト教の牧師の處へ行つて、私の考を述べた時に、君の信仰はミスチックで、汎神論的だといはれた。或はそうかも知れないが、これ何等の不安がないのですといつて居た。故に私は世の所謂一般の宗教家が難有さうな顔をして、その實少しも感謝の念のないのに飽き足らなかつた。今私の心は動搖して居るが、これが即ち恩恵だと思つて居る。如來の御導きだと思つて居る。これで濟して置くも、世の人よりは餘計に感謝して居るのだ。世の多くの人が判つた様にいつて居るが、その實胡麻化して居るのはあるまいか。傳説に支配されて居るのではあるまいか。初めから自分は悪人だとも思はぬに、悪人てござると口の先で云つて居るのではあるまいか。私が愛し

論を求めて、夜八時過ぎ本郷の通りを歸りながらかう考へる。僕は全力を盡して、〇〇〇〇〇君のためを計つたつもりである。彼等は實に幸福だ、人から絶對的に愛せられたのだ。少くとも彼等は僕より何報酬を求めずに愛されたのだ。これ如來の慈悲が判らなければどうかして居る。しかし僕は不幸だ。親の位置、負す位置、愛する位置に立つたのだ。どうしても自分の努力に目をつけずには居られぬ。彼等から絶對的に愛されたとは思へぬ。結果はそうだけれども、意志は向いて居らぬ。この私に意志を向けて絶對的に愛して呉るる如來に是非遇いたいものであると。

九月二十三日

姉崎さんの演習に出づ。精神界を見る多田師の朽木行あり面白し。

浩浩洞を訪ふ。佐々木師に余が心事を打明くるに透徹せず。木場、加藤の諸氏も來られたれども、僕か信仰に力を與へず。佐伯といふ求道學舎に居た事ある人と共に夜歸る、近角先生を思ふこと切也。あゝ伊藤師、浩浩洞、近角師、かくも色々の人になぜ我は厄介になることよ。余の輕薄なるを知るに餘りあり。南無阿彌陀佛。

近角先生には、朝鮮傳道に行つて未だ御不在だと聞いて落膽したが、永生の問題である、そう急ぐ必要もないと思つた。伊藤先生が徳山から歸られてからも、時々參つては御話を承つて、せいゝして歸つたものであるが、先生はこの頃研究生活に入られたのだから、何も確言はせられぬ。しかしながらどうやらいつも胸にこたへることばかりいはれるので、難有

たいと云ふ欲求と、愛されたいといふ欲求と、二つあるを友にいつたときに、人間にはそんな要求をする權利がないといつたが事實こゝにあるのだから仕方がない。また私は結局我儘をやつて居るに違いないが、どうしてもそれが本當に我儘をやつて居るのとは思へない。こんなに自分は人のために盡して居るのに、これが罪惡だとはどうしても思へない。私が罪惡の凡夫であるのに、それをも見捨て給はずに、常に守り常に導いて下さる如來があると、こゝは信じたくてならぬのだ。且つ自己以外の一切は皆私に對する恩恵だと思つて居る。私は決して善人だとは思はない、しかし、どうしても私の今迄の努力が罪惡だとは思へない。罪惡だと思つたら、いゝだらうとして見たことは、随分前にあつたのだが駄目なのだ、しかしそれも眞に罪惡といふことに氣がつかぬからだらう。どうか眞實自分が罪惡深重な凡夫だと思ひたいと思つた。汝の努力といふ、無報酬といふ、しかし既に知られたいと云ふ心があるではないか、して見れば無報酬ではない、矢張眞の愛ではないではないか。それならば夫ていゝ、しかしどうしてか私にはそれは思へない。その點に於て、彼等は幸である、自分の勝手なことをし、人の顔に泥を塗る、我儘のみをやつて居るのに、その裏では色々に苦心して、その効をも知らせないで動いて居る人がある。こんなことを彼等にいへば恩恵を賣る譯になるから、いへないがもし知つたら嘸よろこぶことであらう。今迄の私のやつたことは、皆如來が私を通じてやらして下さつたのだ、これが即ち如來の彼等に對しての愛なのだ。何も私が偉いと威張りはしない。あゝ自分は知られ

たい心ばかりだと思つて居る、それで、僕は彼等が悪ければ悪い丈愛さねばならぬと思つて居る。これで彼等に如來の慈悲が判らなければどうかして居る。遂に私は井々會を解散後其の友人の家の二階に厄介になることになつたが、僕が來てから後も前に困つて居た時の様に自分に感謝しては居やしな。内心は感謝して居るに異い、どうか一切のこと指導を頼むといふ様なことをいつて居りながら、行動は全く變調を呈して居る。私は困つたことだがさああらうと思つて、只何時かは氣のつく時があるに異いと思つて居た。しかし、どんなことがあるとも今僕がこゝを出る様なことがあれば、彼は非常に困るに異い、どうしても出られない。彼は家を外の有様だから、僕が居なくなつては家がたゞない。あゝ非常に眞面目なる友はかくまで常態を逸して來た。宗教的書物を耽讀したものが、そんなことは忘れたのか、自分の悪いことに氣づいて、やけになつた様な氣味もある。私は彼甲に對して、愛情の益々深くなるのを禁ずる能はないのだ。

十月の二日の日曜日であつた。求道學會に近角先生の御講話を聞いた。朝鮮から歸られて、第一回目的御話であつたが、非常に適切に私の胸を刺し、私はついに涙を潸然として落さずには居られなかつた。それは御親に遇つたうれしさの涙ではなく、あゝこの様に自分は人のことを思つてやるのだ。こんな事はとても他に求むることは出來ないが、この自分が今やつて居る様に、私を愛して下さるのは、佛より外にない。あゝ親に遇いたいといふ希望の涙。又一方には、西村氏の話が出たが、その叔父君に對する怨言の效果なかつたが

して下さると思つて聞いたが、私の要求するところと、先生のいはるところと、一分も異はないのである。しかしその理屈はとうから知つて居るのだが、どうしてもさういふ佛に遇つたといふ感じは出て來ない。

一方では友の顔色には時々憂色が見えて、眞に安心しては居ないらしい。私はいかなる事あるも許して居る、否許すといつては語弊がある、何とも思つて居ない。寧ろ益々愛そうとして居る。かくの如く、僕は悪ければ悪い丈心を勞し、或は手を握つたり、言葉で以てしたり、慰めやう安心させようとして居る。然るに、少しも安心の色があるとは見えない。難有い／＼とはいつて居るものゝ、衷心安じて居るものではないといふことが判つた。ついに僕がいかに悪いことをしても、黙つて居て何ともいはない人が欲しいといひ出した。今迄私は悪いと思へさへすれば安心が出来る。私はどうしても悪いとは思へない、それで眞の安心が出來ないのだ。この點に於て彼等は悪いといふことは明なのだから、御慈悲がよく判るだらう。羨ましいことだと思つて居たに、この言葉を聞いて、たゞ悪いといふことを知つた丈では安んじられないものだといふことを知つた。私は自分が悪いといふことを知らうともがく必要はない、たゞ同情者がほしいのだと自分の心に感ずる様になりました。それで今迄友に對しても只罪惡觀ばかり押しつけて居つたのが無情であつたと氣付き、悪かつたと謝りました。我々の要求は自分の悪いといふことを知りたのである、眞實の同情者を得たいのだと益々深く佛を求むるの心が起つて來る。

如く、今僕が何といつたとて、彼等には皮肉にしか取れぬであらうが、もし私の眞の心中を告げることが出来る様になつたならば彼等はいかによろこぶことであらう。あゝ羨しきは彼等であると、羨やましさを涙である。

私は非常に感動してどうか、御親に遇ひたいとばかり思つて歸つて來たので、途中も甚だ悄然たるものであつて、體ても悪いのかと皆が心配して呉れた程であつた。これより前、私は姉崎先生の演習が當つて、新約全書に表はれたる、ミステリーといふことを調べねばならなくなつて居た。しかるに合宿所のことなどで大混雜で少しも手につかず、今こゝに引移つて、見れば又色々の事情で心を煩はす。然し時日が漸次切迫するので、そろそろ初めねばならなくなる。私の心中は益々多事になつた。此時分姉崎先生の講義は神人の信仰で、そのパアンナルといふは當にアンソロポヒックといふ事ではない、こちらの要求のすべてを満足して呉れる所にパアンナルレクションは成立するといはれた時に、私の眼には涙が浮んだ。レクチュアを聞いて泣くといふ人があるだらうか。もう何もかも擲つてしまいたいのであるがそれからと事柄ばかり殖えて來るのに閉口した。しかしこれも難有いのだと強いて思つて居た。

十月五日に、偶然にも近角先生が來られて徳風會が開かるゝといふことを聞いたので、非常によろこんで誰より先に出席し、西教寺の本堂に待つて居る間も、親様なつかしい様などのみを考へ、先生が御出になるや苦衷の一部を披露して教を乞ふた。それから後の先生の御話は皆私一人のために

下

十月十日の夜、近角先生を御訪ねして御教を乞はんとしたら、偶然にも徳風會の坐談會の時であつた。其御話も皆私にして下さつたのだと思つて聞いた。特に先生は何げなしに云ひ放たれた言葉であつたが、私は世間の所謂葛藤中には巻き込まれない、信仰の立場から見ると直ぐ判るといはれた事が私の胸を突いた。あゝ私は今色々の葛藤の渦中にあつて困つて居るのだ。しかしまだ、安心は得られない。閉會後、求道學會の勤行にも加はり、一切の事情を打明けて同情を求めた。然るに私が色々熱心に話さうとするに、先生は餘り同情を以て聞いては下さらん様である。私はもう何處へ行つても駄目だと思つて居る。もし先生によつて安心が得られなければ當分斷念しなければならぬ。是非聞かねばならぬと思つて居る。それに君はそんなものを恩寵だと思つて居るが、それは恩寵でもなるともなれないといふ。私が色々かゝる事情になつて來たのも恩寵だと思ふといへば、そうではないといはれる。君は一體姑息だ、初めから出來ないことは判つて居る事に骨を折つたのだ。出來ないのは當然だ。某氏に意思のないのに勸めるといふが根本から間違つて居る。某は偽善をやつたのだ、君は偽善の尻押しをしたのに過ぎぬ。自分に信仰がなければそんな事に口を出すなといはれ。それに異い、そんなものだから餘計愛さねばならぬのではないか、したくてかうなつたのではない。かうなつたのが恩寵だといつて貰ひたかつたのだ。それはあんまりひどいと思つた。然し、これまでたゞ難有

い方だと思つて居たのに、先生は信仰の一段に至つては少しも苛責し給はぬをその時初めて知つた。いはるゝことは、胸に適切ではあるが、まだ／＼何ともいへぬ。ぼんやりして、苦しい胸を抱き「信仰の餘瀝」を載いて、十二時過ぎに家へ歸つた。この頃は、私の苦悶は頂上に達したのであらう。いひ知らぬ悲哀は心を突いてどうしても安んずることは出ない。人が悪いとは断ずることは出来ず、自分が眞實悪いとはどうしても思へない、渦中に投ぜられて、ぐる／＼廻つて居る様なので、私の立場も見出せず、人の上も心配になりて、この調子で行つたなら、どうなるか判らぬと思つた。私がこゝに居ることも彼の人達には邪魔の様でもある、さればとて、出ればどんなにか頼りを失ふことであらう、どうして、この恩を賣る心、善いといふ心が失せぬのであらうと悲しむ。ついに、かゝるものが可愛さうだ、かゝるものに同情して下さるのが如來であるぞとは、眞宗の教であるといふことに氣付いて來、佛あり聖經あり、何ぞ心を安んぜざると先生の句を誦した。一方では今迄私は彼のすべての心事を知り抜き、善いことも悪いことも皆知つての上で、同情して居るのに、どうして僕に對して、眞實打融けることが出来ないのだらう、暗雲が去らないのだらうと思つて居たが、或る時、彼の机の抽匣が開いて居たので、何げなしに一寸睥いて見たら鉛筆で書いたもので、他は判らなかつたが、こんな悪くても、神は許すだらうか我知らずといふことが目に付いた。それから、兼ねて一覽を望まれて居つたものであつたが、彼の旅行日記を一寸見るに、色々如來を思ふこと自己の罪を懺悔する様な文

句が書いてあつて、特に私の感じたのは、家より出立の際在東の妹に、二十圓の金を送るべく托されたのを、之から長き旅に出るといふ途中にも係らず、自分の旅費の中金二圓を割いて、送つたといふことを知つた時である。あゝ彼にはかくの如き暖き情があるのである、私は全分を知つたなどと思つ居たが誤りであつた。僕にはとても人の心などをば知り盡せぬのである。僕が之程思つて居るのに、彼には通じないのかといふ不平もあつたが之は彼もいふべき言葉であらう。あゝ人間は五分五分だ。自分計り人を要領して居つたと思つたのは悪かつた。彼が苦悶を訴へて來た當時、信仰があるなどいつて居る奴は、自分が安心して居るので、人の衷情に對しては慘酷だといつたことがあつたが、成程そうだ。私は今迄彼に眞實同情して居つたと思つたが、そんなとは出来て居なかつたのだ、あゝ悪かつたと思ひました。かく少しでも自分の悪いといふものに氣が付き出して來ると、さあ苦しくてならぬ。先生のみは同情して下さるだらうと思つたに、こゝでも、それは君が情に引かされてやつたに過ぎぬと突き放される。人生何物も頼りになるものはなくなつたといふのはまさしくこの時であつたらう。先生から、御話を承つたその翌日は多く床中であつたが、軀を右にやつたり左にやつたり七轉八倒の苦しみ、余が信仰は全く破壊されたといふんだ。あゝ私は重惡の罪人なるを知り初めた。信仰もなき身にありながら、少くともかくの如く動搖する信仰を持ちながら、今迄信仰がある様な顔をもし、人からも多少そう思つて遇されて居た、あゝいかなる嬌慢の兒ではあつたらうぞ。ある人が、君は燃えんとして居つた己の心に火

を付けて苦しめてならぬ。君さへなければ、こんなことは考へずに過ぎたものを、憎い奴だといはれたことがあり、若い中は決して鈴木といふこと、などは聞くなど、後輩にいつて行かれたといふ人があつたが、あゝあの人にも濟まない。考れば誰にも彼にも信仰家振つた顔もして居つた、僕を何故そんなに煙たがるのだらう、決して悪く思つては居ないのだから、打融けて來いといつても何となく隔てがある様になつたのも、僕が悪いのだ。僕が嬌慢なからだ。僕がこんな考で居て、誰か打融けられるものか。今迄ついでそんな事は思はなかつたのであつたが、よくまあ僕の様なものに色々のことを打明けて呉れたものであつたと思つた。あゝ彼等に對しても合はず顔がないと思ふ様になり、悪い／＼どうしてこの苦しみを免れやうとばかり考へて非常なる苦しみを嘗めた。今よろこびの身となつては、とてもその時の心の状態をいひ表はすことは出来ない、経験ある人の御察しを願ふのみであります。少しミステリーの研究もやつたが、頭には少しも残らぬ。僕は一層こんなとは止めて、旅行でもし、一生懸命になつて考へて來やうかと思つた。いや／＼しかし、これは永生の問題である、未來までの問題である。一時に急いで、又いゝ加減に胡麻化してしまふかも知れぬ。私の様な輕薄なものは、ちよつとしたところ満足してしまふ安い。今迄のことを考へれば、皆それだ、實に淺ましい、しかしこの機を外したら、又と機會がないかも知れぬ、慎重に考へねばならぬ。大學初めての、研究發表だから、相當なものにしたが、それをよして逃げるのは卑怯だ、どうせ、いゝことは出来ないまでも、責任を濟して

それから、ゆつくりかゝらうとしても、中々心はそれでは承知しない。もう體も頭も疲れ切つて居る。一ヶ月以上種々の事情のために安眠といふことがない。終夜睡らなかつたこともある位だ。あらゆる本を讀んで見んと思ひ、「佛教講話」、「秀存語録」等を求め、なほいくらでも讀まうとするが、本などを讀むのも大儀で、心に動いて居るのはたゞ眞實の親、眞の友、眞の同情者に遇いたいといふ切實なる欲求ばかりである。「信仰の餘瀝」を讀んだが、何が書いてあるか、さつぱり判らない。たゞ何處を見ても、佛は眞實の同情者なり、佛は慈悲のかたまりなりといふことが、強き權威を以つていふてあるのみ。何處を讀む時も私の心では、眞の同情者に遇いたい／＼とばかり思つて居る。「懺悔録」をも拜見したが、事柄などは少しも頭に入らぬ。たゞ同じこと、佛は眞實の友なりといふことのみが書いてある。「親鸞聖人の信仰」にもそれより外のことを書いてない。私は最早人のことなど彼はいふて居る餘裕がなくなつた。愛することも出来ねば、愛さるゝことも出来ぬ、絶體絶命とは、この事であらう全く出離の縁がないのである。しかし信仰が全く失くなつて、こんなに苦しくなつても、屹度佛に遇へるといふ希望は決して失せない。苦しければ苦しいだけ、佛を求むるの心は強烈になつて來る。死といふ字が、一字念頭に浮んだが、こんなことは忽ちにして打消されてしまつた。永く法を聞いた御蔭だと感謝いたします。こんな具合だから、無論學校などは休んで居るのだが、その翌朝即ち十月十二日には苦悶の極堪へやらずして、近角先生を御訪ねした。朝の八時半頃である。僕はもう駄目だ

と思つた。僕の様な輕薄な奴は信仰など持つたとして、何時崩れるか判らないのだ。先生の所へ行つたとして、決して判つたなどいつて歸つて来まいと決心し、何日でも苦しむが、苦しめば苦しむ丈いゝものが得られるだらうなどと考へながら、只茫然として一高の前を通つて、求道學舎に至つた。折柄先生には、勤行御食事等のために二十分程来られなかつたが、私は應接間の椅子に腰を掛けながら、考へるともなしに考へて居ると、じく／＼と涙が出て来て止め敢へぬ。あゝ己は今迄何も判らぬと思つて居た。しかし、たゞ他力の恩恵といふこととは、誰が何んといつても疑ふとは出来ぬと思つて居た。しかるに、これも何が何だやら判らなくなつてしまつた。僕の今迄の一切の行動、たゞこれが難有いと思つたればこそだ、こればかりだ。中學時代に學科を撰んで、名利を捨て、哲學などをやり人の尻に付いて来たのも、種々人のために骨を折つたと思つたのも、又これを語り合つてよろこんだのも、意氣地なしだといはれて甘んじたのも、虫よりも嫌な坊主と間違ひられて平氣だつたのも、皆な眞實これが難有いと思へばこそだ。僕は一般の僧侶の人とは異う。眞に難有いから難有いといつたのだ。これをいはねば飯が食へぬから云つたのではない。瘦せても枯れても男一匹だ。虚言はいはなくとも生きに行くこと位は出来る。しかるに、先生は君は御慈悲を只打流して聞いて居るといはれる。こんな情けないことが又とあらうか、長くこんなことに關係して居ると遂にはプロフェッショナルになつてしまふのか。あゝ僕もなつてしまつたのか、泣かざるを得ないのであります。しかしさういはれて見れば、

そんなのだ。あゝ信仰もなき身に、信者振つたる顔付をし、如来様が難有いなど、いつて居たものゝ、その如来といふは何であるか。假定の如来に過ぎないではないか、空想の如来に過ぎないではないか。あゝ自己を欺き人を欺いて来たのであつた。今迄僕は何處が悪い、何が悪いとつゝいつて見てどうしても悪いと眞實思へなかつたが、何處が悪いの、此處が悪いのだ、あゝ僕の様な悪いものはない。十分間程かく思ひ續けて、涙がどうしても止らぬ。その中、先生が来られたが喫驚りされて、どうしました、苦しいでせう、苦しいでせうといはれる。僕は何ともいふことが出来ず、たゞ泣いて居るのみであつたが、涙の下でたゞ、何も判らないと思つて居た。たゞ、御慈悲のみは判つたと思つて居ました……人を欺き、己を欺き……といふことだけをいつたのを覚えて居る。もう私はどうすることも出来なくなつたのだ。近角先生も頼りにならなくなつたと叫んだ。先生が非常によろこばれ、聲を改めていはるゝにはそこです、そこです、無有出離之縁とはそこなのだ。そんな仕方のない奴、どうすることも出来ぬ悪人を、一心正念にして来れといふのはそこですと。それを直してとか、どうしてとかいふのではない、そのまゝとはそこをいふのだ。兼ねて煩惱具足と知ろしめしたとは、君のその心が可愛そうだと眺めて居つて下さつたのだと、數々の和讃を引いて御話し下さる。私は今何といはれたのかよく覚えて居らぬが、その一が如来の御言葉と聞かれました。近角先生のいはるゝことゝ如来のいはるゝことゝ、更に隔てがない。

何の理屈もなく、私の苦しみは何處へやら去つて、後は歡喜の涙となつて流れ、判つたなどゝはいはぬ、覺つたなどゝはいはぬ。何といつていゝかとてもいゝ云ひ表はせませぬ。絶對の慈悲に氣付いたといはうか、氣付かして貰つたといはうか、心身脱落といはうか、復活といはうか、往生といはうか、救濟といはうか、無我といはうか、純一無雜といはうか、神を見たとはいはうか、佛に遇つたといはうか、充實したといはうか、天地轉動といはうか、如何なる形容詞を用ふるも足らぬ、南無阿彌陀佛の外は云ふべき言葉を持たないのである。佛があると思ふのだとか、信んずるのだとか、難有いと思ふのだとか、そんなまどろこしい事ではない、只だ南無阿彌陀佛。この御名の中に、かくまで深き意味ありとはついで知らなかつた。その時の有様は心も言葉も眞に及ばぬ。口に出せば既に私の偽善の雲に蔽はれてしまひます。私は自分一人で樂んで居るより外はないのだ。曰くいひ難しだ。一切沈黙を守らうかと思つた。今迄自分一人で苦しんで居るより外はないと思つた身が、自分一人で樂むより外はないといふ。穹壤の差といはうか、雲泥の差といはうか。そのよろこび、その變化あゝ我はいかにしていひ表はさん。人間の力ではとても出来ないと思ひます。

しかしながら私のこのよろこびは決して私一人のよろこびではありません。私を中心として動いて居つて呉れた、一切の友達の上にも何時かは屹度、この心が傳はることだらふと確信します。私はどうしても助からぬものだ、外になにもやるべきことはなくなつてしまつたのだ。假へ近角先生に欺かれ

て、地獄へ落ちたりとも後悔はしない。あゝたゞこの御慈悲一つ、しかし今は私はどうしても地獄へ落ちようなどとは思へません。

それから後、家に歸つて、たゞうれしさに床に入つて一睡りし、勉強を初めようとするけれど、心は踊るばかりで少しも落着かぬ。涙のみ眼に出て、参ります。前には苦しうて、體を七轉八倒したのが、今は嬉しくて、おつとして居られぬのだ。睡れば屹度極樂の夢を見ただらうと思ふ。だれにか、この心話を話したいのだが、とてもいへぬ。内容はいふまいと決心した。たゞ嬉しさのあまり飛んで行つて、近所の親友の家で、何事もいはず、たゞ御慈悲が難有いといふことのみいふて來ました。友は己には國が判らぬが、貴様がうれしいなら、己もうれしいといつて呉れました。早く彼の友が歸つ來ればいゝ。よろこびを分つにな、など、心待ちにして居る間も二階の四疊半を左右に飛びはねて居りました。寄るに違いないと思ふ處ありし故來たら直に歸つて呉れ、よろこびを分ちたいからといつてやつて置いたが、遅くまで來て呉れぬ。前ならば、何時までも待つて居るであつたらうが、私はから來て呉れぬなといふことはよく判つたので、直に寝ました。その後も、不思議な程いろ／＼な事があつて、常に御慈悲をよろこばして貰つて居ます。私にはあれ眞面目な友が、かうもなつて私を眞實の御慈悲に氣付かして呉れたのかと、世の中一番氣の毒なのは友であります。あゝすべてのことがこの御慈悲に氣が付いて、眞に感謝が出来ます。是迄種々の方面から私をこゝまで導いて下さつた、幾多の師友。特に

如何なる場合にも絶対に私を信用し、御自分では何が何だやら譯も判らぬのに、大日堂といへば大日堂、旅行といへば旅行、學科を撰ぶについても、何につひても、あまり富裕でない中から、氣儘勝手にさして下すつた父上。永い間私の様なものを色々と導いて下すつた多田師、曉鳥師、佐々木師、一々御禮を申す暇がない。たゞ南無阿彌陀佛であります。特に彼等の如きは善知識であります。私は彼等に對して遠慮があつた、云はなければならぬ多くのことを持つて居ながら、いへなかつた。今はもう何もかもいはずとすればいへます。又何もいへなくともいいのであります。この家とても、何時なりとも如來の命だにあれば出ることが出来ます。今迄はそんな無情なことはどんなことがあつたればとて、當分出來ませんでした。かく御慈悲に氣がついて見れば、一切の心配事は皆消えてしまひました、何等の不安がない。全くの自由境だ。情にも色々の種類がある。徒らに妄情に支配されて、ねばつき居るを以て、その能事終れりとなす、小人の愛のみ、婦女子の愛のみ。今はこれも棄つることが出來て、いふべからざる、今迄ついで経験したことなき、愛情が彼等の上に湧きます。眞の弟の様です、眞の兄弟の様です。彼等から何物をも要求せざるの愛である。これが眞の無我の愛ではあるまいか。すべての欲求は満たされた。御慈悲に腹がふくれたと云ふのはかういふのでせうか。初めの二三日はたゞ心が踊るばかり、涙が眼に浮ぶのみ。大きな聲で和讃を怒鳴り、念佛を稱へるのみ。何事も手につきません。學校へ行つてノートを取るなどは、まどろこしい、靜に勉強などは出來ない。姉崎先生に御

てあります。悪人に悪人といふことの自覺が起る譯がない。悪人と知らして貰つたのも、佛恩、これが氣にかゝらぬのも佛恩あゝ只、南無阿彌陀佛。

この事件に於きても、私が悪いとはどうしても思へなかつたが、私が確信がなくて、こんな事に口を出したからこんな風にもなつたのであります。友に對する友情だと思つたことも親切だと思つたことも、少しも親切にも、友情にもなつて居らぬ。小人の愛だ、凡夫の慈悲だ、婦女子の愛だ。同じ渦中に廻轉して居つて、どうして眞實の愛といふ様なことが出來やうぞ。只だ念佛申すのみぞ、未通りたる大慈悲心。私には今歎異鈔の第四章が最も味はれるやうである。事情がかうなるのは當然だ、自分がかうしたのだ、もし私が眞にこれがいと思ふなら、何故人の手などを借りて事を撥んだか、これが人に益々偽善を多くさせるに過ぎなかつたのだ。自分に責任がかゝつて來てはならぬといふ臆病心があるのみ、あゝ私には始終一貫した考はなかつたのだ。たゞどちらもちんちんもよかれといふ考ばかり。私にあるものは、人によく思はれたいといふ心、責任を免れたいといふ心ばかりであつた。それに自ら親の様な位置に立ちたることに慙愧に堪へぬ。彼等の安心の出來ないのは、私が如來の徳を盗んで居つたからである。自分で如來の業を行つて居る様な氣をし、自分で免して居る様な氣がして居つたからである。皆私が悪いのである。なんて私に免す力などがあらう。免すはたゞ佛のみ、眞實の同情者はたゞ佛のみ。

こんな宏大な御慈悲があるのに、何のかんのといつて人を

願して、演習の方を延ばして貰ひ、十日間程甲州地方を旅行中も、たゞ佛恩の洪大を思ふのみ。トンネルを出てまたトンネルあり。大小四十三のトンネルはついに甲府に導いて呉れたのだ。これまで意識してからも七年以上の種々無量の縁で、今思へばつらいこともあつた。私は世の中の種々無量いふものないといつて居つた。しかしながら今迄の事は一切が非だ。一切が失敗だ。何事も成就したことはない。絶対の慈悲に氣がついて、初めてすべてのものに感謝が出来る。この御慈悲がなかつたならば、私は何も彼も出來なかつたのである。世の中に頼りになるものはたゞたゞ御慈悲一つといふことがよく味はれました。あゝ御嶽新道の谷川の音、那須のそれとは變らぬと、變りはてたるは我心哉と思ひました。

旅行に出る前、九段の先生の御講話を聞いたが、前にはよく判つた、寧ろ、くどいと思つて聞いて居たことが一一異つたる味を持ち來し、上すべりして聞いて居たことをはづかしく思ひます。

私は信仰もないのに信仰のある様な風をしたことが心を苦しめて、それは佛に對して悪いのであらうか、人に對してすまないのであらうかといふことを考へ出す時に、そんなことはどうでもいゝ、たゞ御慈悲丈、これが判らねば一切が駄目なのだからと、思つてよろこんで居りましたが、一人一人の人に對しては別にうそをいつた譯でもないのだから、責任がないのだと考へたくてならなかつたが、御嶽に參詣して歸る途中こんな考を全く取つて貰ひました。私は人に對しても、佛に對しても、そんな區別はなく、偽善者であります。悪人

頼りにしたり、恨んだりしたこと申譯がない。今はたゞ感謝の念佛、懺悔の念佛のみである。懺悔は中々出來ないものがある、樂なものではない、懺悔といふ様なものは、皆云ひ譯であつた。眞の御慈悲に氣がつかなければ、到底懺悔も出來ないことであらうと思ひます。眞の懺悔の出來るのも御慈悲があればこそ、世間たゞ南無阿彌陀佛より外に頼りになるものはありません。かく洪大なる佛恩に氣付かして頂いたも偏に近角先生の永らくの御親切の御蔭、御洪恩を深謝致します。

一人して喜はゞ二人と思へ、二人喜はゞ三人と思へ、その一人は親鸞なりとの御言葉、難有存じます。親鸞聖人の全人格は今や私の自己意識に投入し來りて、默契融會些の間隔がない。あゝ私が心中には、親鸞聖人が生きて居る、何ともいへぬ味である、聖人の信仰と絶対的に同一信念なるを味うて居ります。近角先生のとも同一だ。私の信念に同慶して下さるのは先生だ。私のよろこぶ、奥の奥を、先の方からよろこんで下さるのは先生だ、渴仰に堪へられぬ。母と父との顔見たくなり、急に國に歸らうとして、汽車の中たゞ御慈悲のみを思ふて居る。國に歸れば、私のこの度の旅行を大學を廢學して雲隠れをし世を捨てたるの姿と誤解して下すつた、大澤先生が居る。一面からそう見てもいゝのだ、先生の立場としては御尤もなる設解哉。伊藤先生をふと思ひ出した時に、何とはなしに涙がさしぐまる、無明の闇から絶対の光明に導いて下された尊師、あゝ先生にこの一佛名號の慈悲が判つたら。嬌慢の兒たることを許させ給へ。近角先生の外に逸早く私の信念に同情して下さるのは先生である。御聞かせ申したいは

先生である。あゝ先生へこの慈悲が知らしたい。あゝ私がかゝることをいふ光榮の身となりました。私の胸の中どうか御推察を願います。汽車は久喜に近づかんとして、涙はどうしても止らぬ。よその見る目もはづかしさに手拭にて顔押隠すも、胸は張りさくるばかりでした。見る人は、何と思ふだらう。思ふ程泣きたいのである。便所へ入つて心ゆくばかり泣かうと思つた。列車の一隅に退き窓にもたれて、私はひた泣きに泣きました。栗橋に着いても止まぬ。古河に至らんとしてまた泣いた。大澤先生に面會して歸つて來、今生家の二階で筆を取る私の眼には不思議や、涙が湧て、しかたがない。五劫思惟の願といはうか、兆載永劫の御苦勞といはうか、あゝ南無阿彌陀佛。かくばかりの御慈悲、この上はたゞ生かすなりと、殺すなりと御心のまゝになさしめ給へ。出離の縁のなかつた私、助かる路のなかつた私、私はたゞ御慈悲に酔ふのみである。うれしさに騒ぐ胸はどうしても静まらない。尻はどつかとすわつて居る。何といふ落着きだらう。如來の味といはうか、法悦の至極といはうか。何にも要らぬ、たゞこのままとはこの境涯で初めて云へる。何をやつても差支ないとはこの境涯で初めて云へる。私は傳道神聖の考に立出して、長いことやつて居る中、それがだん／＼薄らいて他のすべての職業も同じ事だと見る事が出来る様になつて居たがそれは御都合主義の思ひ爲してあつた。今は異なる意味に於て、何をやらうと同じ事だ。御慈悲を闡明するのみといつては語弊がある。佛恩報謝の經營である。感恩の生活である。出所進退たゞ御慈悲による。これがなければ人生何事も出来ないのである。南無阿彌陀佛。

私には今非常に智慧の眼が開いて居る。妄情に支配されず正邪の判断が付く。斷々乎として行へる。意志の力が猛烈に働いて居る。何初をも恐れない。あゝ何といつても駄目だ信仰の餘瀝といふ言葉が一番難有い。いふはたゞ餘瀝のみ。行ふはたゞ餘瀝のみ。

私がかういふとを書きますと、單なるよろこび心をあてにして居る様に誤解されんとを恐れます。私は今踴躍歡喜の状態であるが、出来る丈は、押へよう／＼として居る。然れども止め敢へぬ、よろこびは何處とも知らず出て來るのである。人にも今少し静かになつて後退はうと勉めて居ります。前と全く異つたる意味で獨居といふことも静養といふこともいへると思ふ。人は以て狂とするかも知れぬ。こんなよろこびは長く續かぬかも知れぬ。而も正定聚の位には既に入つたのである。よろこび何んとも譬へられませぬ。

經歷のみ長くして、入信後の感想の少きはとて／＼輕々にはいひ表はし難いからである。何卒御諒察を願ひます。最後に付加へて置き度いのは、無我愛の時のよろこびと今度のとの比較である。前者の時は飛び立程で、早くこれを知らせにやならん、これが判らんのかといふ態度で非常に熱狂的でした。今度のは内にはとて押へられない様なよろこびがありながらこれは人の口位でいつたとして中々判らぬ。難中の至難だ、今私の判つた／＼などといふべき所ではない。時機の至るのを待つのみといふ風であります。すべてを捨てたといふ様な、腹にこたへのある何んともいへれんよろこびであります。既にこの難中の至難なる御慈悲に氣づかして貰ひました。これから前どうしやうと力むのではありませんが、どうかして、一生涯かゝつてもよくいひ表はして見たいと思つて居ります。

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛。
於東京千駄木 十月二十六日夜十二時
於栃木實家 十月二十八日夜十一時

雜 錄

信仰問題の着眼點

上

近頃一般の求道者又は人生研究者が人生を批評したり信仰を眺むる態度が兎角人生と云ふものゝ上に眞實を認め度いか、光を認めたいとか意義を見出し度いとがする様である。又た或者は既に人生にさう云ふ意義や光を認め得たりとして人生に佛の光明を拜し得たとか如來の計らひに依りて生活して居るとか云つて居る、併し一應言葉の上ばかりでは批難の點も無い様であるが何づれも眞實の信仰としてはどうも徹底して居らぬとが多く、且つ憊う云つて居る人の如きも衷心其れに満足して居らないやうである、茲に注意すべきは其求めんとする眞實の意義とか光明とか云ふものは現實界の事物の上に實體的に認めらるゝものではない、然るに人生の實體の上に此等の考を懐き又た此等の考を見出さうとするのが善くない、佛教の上では、積極的に人生の意義や光を認むるには消極の一面を備へて居らねばならぬ、換言すれば人生の上に眞實の或者を見出さんが爲めには實體的の人生に一の眞實も無く意義もなく悉く永久のものなしと一度徹見して其處に現はるゝ所の最後の光は即ち吾等の信ずる所に依れば虚假不

實罪惡深重の吾等を救ひ玉ふ如來の大慈悲智慧光明を見出し得た光にあらずんば本當の宗教的から見た眞實の味が無いのである、茲に於て始めて眞實の意義眞實の光明を見出し得るのである、之を佛教で言ひ慣はした言て云ふと今日の人の云ふ光明とか意義とか眞實とか云ふとは常樂我淨と云ふに當たるが、佛教では涅槃の境涯を見ずして實體的の人生の上に意義光明を見出さうとするのを煩惱であり迷ひてありと云つて居る、然れば今日の實體的の人生に光を見出さんとするのは涅槃の境を云つた常樂我淨でなくて迷情の上の常樂我淨である、信仰以前に信仰を豫想してしかも無常なる罪惡なる虚假不實の人生其物の實體に眞實や光明を見出さうと叫ぶのは即ち消極なき積極であるから本物ではない、だから如此くして幾千年経つても本當の信仰は決して得られない、憊う云ふ人は假令信仰を得たと思つて居ても何かの場合實體的の人生に苦痛逆境不實なるものを見て人生の當てにならぬと云ふ消極的問題に逢着すると逆さに常樂我淨と思つてゐたものが破壊されて仕舞ふ、此迄拵へてゐた人生の意義も光明も消滅して仕舞ふ。蓋し斯くなるものは當然である。何んとなれば自ら人生に着色してさう云ふ感想を作つて居つたに過ぎないからである。勝手に構想して居つた迷情の常樂我淨が破壊せられた所で原始佛教に云ふ所の人生は苦なき空なりと觀する苦空無常無我が現はれて來る。而して眞に此の苦空無常無我の消極を通過し得た所に於て始めて涅槃の境の常樂我淨に達し得るのである。茲に眞實の人生の意義光明が味はれる、消極なき積極の常樂我淨は迷執の常樂我淨であるに對し、消

極に印せる積極の常樂我淨は涅槃の常樂我淨である。然るに今人の多く云ふところの、人生の意義とか光明とか云ふことは、實體的の人生上に直ちに見出さんとするもので、所謂迷執の常樂我淨である、之れは注意せねばならぬ。

中

消極なき積極が不可爲と云つたが然らば消極的の方面が現れたならば善いかと云ふに消極的の方面ばかりでは不可ぬ、消極なき積極の間違なると同時に積極なき消極も亦た間違ひである。今の求道者又は人生研究者の着眼點は多く、前者に陥らずんば後者に墮して居るやうに思ふ。自分は此點を大に注意したいのである。單に人生の消極方面ばかりをながめて徒に無常を歎き、苦痛を感じたとて原始佛教で云ふ所の苦空無常無我を悟つたと思ふては困る。苦空無常無我はそれとは全く意義が違ふ、今日の求道者が頻りに無常觀とか罪惡觀とか云ふが其意味の使ひ方が違ふて居る、妻を失つた子を亡くした逆境に陥つたと云つて涙を出して人生を悲歎するのが苦空無常無我と云ふ意味ではない、眞の無常觀と云ふのではない。然らば眞の無常觀といふは如何なる状態であるかといふに無常を歎く状態を通過して涅槃常住の光を見出すや否や此絶對の光明に常住を見出して、人生の固より當てになるべき者でなかつた、否當てにして居たのが抑々間違であつた實に人生は無常であると泣言にあらて手を放たれた状態になつたのを云ふたのである。佛教の無常觀、苦空無常無我はこの手が放たれた状態を云ふのである。罪惡觀亦然り、眞の罪惡觀は今日

得たと云ふべきである、之が眞の信仰である。

最後に注意すべきは然らば斯かる状態に入るには如何にすべきか、即ち有に墮せず空に墮せず中道の信仰は如何にして入り得らるかと云ふに、眞實の佛陀の光明に接することによりて得られるのである。即其無常の人生罪惡の我等を救はんとの大慈大悲に觸るゝのである。吾々が始終實驗の信仰と云ふのがそこであつて人生實體の上に言葉や思想を括つ付けないで眞に佛陀の心が得られねばならぬ。要するに人生問題信仰問題の要義は煩腦具足の凡夫火宅無常の我等を憐れみまします大慈大悲の如來の御心に依りて吾々は救はれるのである。その救はれたる有様が一面には無常罪惡を知り一面には之れを棄て玉はぬが佛恩なり知らるゝ、之れが眞宗の二種の深信である。

下

已上は正しく信仰問題に就いて求道者の着眼點を注意したのであるが、更らに之れを眞宗の所謂安心問題に就いても云ふことが出来る、或人は安心の消極方面ばかりを云つて居る、消極方面は、如來の御慈悲を喜んだりするものも嘘である、信する杯と云ふこともない、雜行を捨ててもない、佛を頼むのでもないと云ふ風に説くのである、所謂只の只の御助けとか云ふのがそれである、慙う云ふ風なのは徒らに捉まへ所がないやうになり、妄情を拂ふ爲めには善いかも知れぬが、消極的に之れを弄して居るのだから稀れに偶然に道に入り得る者があるかも知れないが確に軌道を逸して居る、即ち積極

迄如此き罪惡の者と思はなかつた身が眞に罪惡深重の者であると自覺されて斯かる者を救ひ玉ふ如來の慈悲を信知されて我身の罪惡が自覺されて、氣離れの出來た有様であつて徒に罪を抱へて泣いて居る事ではない、人生の無常なる事吾身の罪惡なることを泣くのが信仰でもなく苦空無常無我でもない、又た人に依りては我々は無常觀が起らないから困る、罪惡觀が起らないから困ると云つて苦んで居るが、之は先きの消極なき積極が實體的の人生上に常樂我淨を求むるのと同じ意味合いてあつて佛陀の涅槃を見ず如來の救濟を認めない間は決して眞の無常も罪惡も自覺出來るものではない、若し消極なき積極が有の見であると思ふならば積極なき消極は無の見であつて邪道に墮して居ることは共に同じである、今日の求道者或は人生研究者の着眼點が多く此の有の見にあらずんば無の見に墮して居るのは遺憾である。

然らば如何なるか之れ眞の信仰状態であるかと云ふに、佛教の苦空無常無我と云ふのは原始佛教では涅槃を見出した時に分る。又た吾々の信ずる他力教では如來の他力眞實が知られた所で眞の罪惡觀であり無常觀が起る、この罪惡觀無常觀には必ずしも積極的意義の伴ふもので、如來の清淨眞實があればこそ人生の無常吾身の罪惡なることが自覺され、所謂懸崖に手を放たれるのである、そこに佛陀の清淨眞實が眞の常樂我淨として又涅槃の徳として現れ來るのである、換言すれば人生其物の實體に常樂我淨を見出すのではない、寧ろ苦空無常無我の人生を救ふ佛の上に見出したる常樂我淨が絶對に人生に光被したる有様に於て人生に眞の意義眞の光明を見出し

を見ない消極に陥つて居るのである、又た之と反對に人生は光の實現である、人生は光明に包まれて居ると云つて逆境が來れば如來の爲さしめ玉ふ所なりと觀じて居る人がある。併し慙う云ふ人々は人生は光明に包まれて居る。逆境も如來の爲さしめ玉ふと思つて居るのは左様に觀じて居るのである。又たそう云ふ風に思ひなして居るのである。人生の罪惡無常に苦しんで居る者の爲めには利目があつて其れで道が開けて信仰に入り得る者があるかも知れないが、説者自身には眞の信仰になつてゐない、慙う云ふ人は消極なき積極があるからして巧に人生に扮飾を施してゐても一度び逆境か何か來ると破壊されて仕舞ふ、眞の信仰と云ふものは斯様なものではない、罪惡無常の我等凡夫を捨て玉はぬと云ふ如來の恵みに氣が附いて、安んじて居れない不安の世に安んじて居られるので、佛の御恵みなりと知らるゝことである。

更に一般の佛教界に就いても此の積極消極のことが云へると思ふ、眞如を以て宇宙の本體なり杯云つて現象を眞如の實現なりと哲學的の説明を下して得たりとする者は所謂消極なき積極であつて有の見に耽溺してゐるのである、又た原始佛教の苦空無常無我を説明するに五蘊假和合であるから無我と云ふ杯と唯物論者のやうな口吻でもつて無我の眞意味を理解し得たりとするものは積極なき消極で空見に墮して居る、佛教の眞意から云ふと諸法無我にして涅槃の大我を知り涅槃の大我を知りてこそ無我を味ひ得たりと云ふべきである。已上云つた消極積極の意味を眞宗に於ける從來の安心上の言葉を假りて其意味を明かにせば、信心を得れば現世利益である、

さりとして現世利益を得んが爲めに安心を求めたならば間違である、求道者なり人生研究者なりが目的として居る人生の意義とか光明とか云ふものは信仰の關門を入りて後得らるゝもので、若し我等が斯かるものを目當としたならば、目當として居るのが信仰から現はれたものでなくて豫想され假定されたものに過ぎないから到底得られるものではない、丁度信仰から現はれて来る、現世利益であるから、現世利益を目當てにして出發しても信仰の得られぬのと同じである、人格を高めんが爲めに信仰を求めん安心立命を得んが爲めに信仰を求めんとするの之れと同じ道理に依りて到底得られるものではない。

一、善知識の仰成りとも、成まじきなど思ふは、大なるあさましきことなり。なにたる事なりとも仰ならばなるべきと存ずべし。此の凡夫の身か佛になるうへは、さてなるまじきと存ずることあるべきか。然れば道宗近江の湖を一人してうめよと仰候とも畏りたると申すべく候。仰にて候は、ならぬことあるべきかと申候。

一、いたりてかたきは石なり。至りてやばらかなるは水なり。水よく石をうかつ。心源もし徹しなば菩提の覺道何事か成せざらんといへる古き詞あり。いかに不信なりとも、聽聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候間、信をうべきなり。只佛法は聽聞にきはまることなりと云ひ。(蓮如上人御一代開書)

を得て置くがよからうと思ふ、從來聞く所に依れば在鮮日本人の行爲が往々鮮人をして不快の感と興へたらしい、して見れば向ふばかり責めてはならぬ宜しく此方も反省せねばならぬのである。

然らば朝鮮に於ける基督教の將來は如何と云ふに、併合後頼みに人氣を失ひ非常に信徒數を減じた基督教者自身が云つて居るが、變化と云へば實に非常な變化である、之れを見て佛教徒も反省せねばならぬ、朝鮮に於ける基督教傳道の過去の動機が政治的意味であつたなれば、政治的傳道は根底の極めて薄弱なものであることが適切に知られる、同時に傳道的精神の基礎は信仰にあらねばならぬ事が分かる、此點は佛教徒も殷鑑として深く考へねばならぬと思ふ、併かし傳道の動機が政治的意味のみでは不可ぬが信仰から發動した教育は何處までも有効である、朝鮮の基督教が多くの部分が減じたとしても、多年の間教育に盡した結果として少數の堅實なものが残るに違ひ無い、だから在鮮佛教徒には決して教育杯の事業を遣つても駄目だと云ふ風な考を有たずに眞面目に出来る丈け遣つて貰ひ度い、其の後朝鮮に於ける基督教の傳道方針が一變するやうに見受けられ、日本の政治と混同したり衝突したりしない様に態度を變へて來たやうだが、過去に鑑みて外國基督教者の行動は今後とても大いに注意せねばならぬ。

朝鮮教化と邦語

すべて新らしき土地を觀察するに三段がある、一番初は其

朝鮮傳道所感

朝鮮基督教の排日觀

朝鮮で最も基督教の盛なるは平壤であつて其の叢窟とせられて居る、之れに次いで盛なるは開城等である、此等の土地には外國の宣教師が地盤を据へて經營して居る、教育の方面より觀れば下は小學校から中學校乃至大學程度の學校に至る迄凡べて基督教の手で教育を遣つて居るが之れは外國基督教の遺方である、茲に敢へて外國基督教と云つたが實際朝鮮の耶穌教は殆んど凡べてが外國人の遣つて居るもので日本人の基督教は朝鮮の精神感化に對しては日本の佛教と同じく盡して居らぬと云へる、そこで宗教と國家關係との問題であるが、之は今更ら云ふ迄も無く注意すべき事である、戦争以來政府の當局者も此點に就いて苦んで居つた事は事實であつて十年前政教問題の時吾々が頻りに云つた所であつた、朝鮮人が基督教に加入するのは宗教とか信仰とか云ふ動機からでなくて基督教の保護の下に立ちて生命財産の安固を得やうと云ふ精神であつて、所謂排日なる思想は西洋人が特に強ゆるものでなく朝鮮人が自發的に懐くのを布教の手段として西洋人が利用するにもせよ、兎に角排日思想と外國基督教との間に關係あることは事實である、排日思想を懐くと云ふ點に就ては儒教よりも基督教者の方に多い、併し基督教の排日思想たる決して李朝をどうしやうとか云ふ性質のものではなくて只バツとした排日思想である、序てだが日本人は排日云々の言に教訓

の土地に感心して仕舞ふ、それが一年も同じ所に居ると疑ひに感心した事も感心しない様になる、そこに色々の疑問が起つて來て膿腫となる、其の次には向ふの特色なり缺點なりがはつきり分かつて來て迷はぬやうになる、之れが歐米へ行つた者の等しく感ずる所であるが、今度自分が朝鮮へ行つたのは初めてであるから、第一の場合で感心して仕舞つた方かも知れぬ、併し初めての事物に接する時は能く其の特徴が分かるやうに思ふ。

朝鮮一般の人間は怠けて居ると豫ねて聞いても居り、又實際見た所が其のやうに見えるが子供の賢ささと愛らしさを見感せずには居れなかつた、釜山では朝鮮人に接する機會が無かつたが、太田で民長の渡邊氏の宅が町から離れた村落に在つて其處で氏から饗應を受けたことがある、氏は部落の朝鮮人から非常に尊敬され親まれて居つて饗應の節に多くの朝鮮人が來て俗語を話つたり杯して款待して呉れた、其等の朝鮮人に接する度に一方では彼等を可哀相だと思ひ、一方では子供の愛らしさを思ひ、辛抱して彼等を教育さすれば楽しんで遣られもし亦た彼等も遣れるに違ひ無いと思つた、蓋し彼等が長じて愚かになるのは早婚の弊だらうと思ふ、兎に角之れからは眞面目に朝鮮人の教育をせねばならぬが、自分の考へては今の朝鮮人を教育し得れば尙ほ更ら結構であるが、せめて其の子供を養成せねばならぬと思ふ、太田から以後は會ふ人々に朝鮮人に子供に日本語を教へんことを勧め、同時に日本の佛教を徐ろに兒童に教へんことを勧めて來たが此の日本語を教へると云ふことは現今の朝鮮に於けるのみなら

ず日本の教育家、宗教家、凡べて思想上に關係せる人々の注意せねばならぬ事だらうと思ふ、言語が通じないから意思の疏通が出来難い、所が茲に説ありて韓語を習熟しなければ日語を教えられぬと云ふけれども之れは間違である、なぜかと云へば日本人が朝鮮語を學ぶよりも朝鮮人が日本語を覺える方が遙に早い、仁川へ行く路の梧桐洞に對州出身の小峯氏と云ふ方が朝鮮人の教育を遺つて居られるが、氏は朝鮮に在ると三十年、朝鮮人の教育に就いては最も經驗に富んで居られるが、矢張此事を言つて居られる、氏も始めは無論韓語を遣られたのであるが、今の學校は日本語を習熟せしめそこを出た朝鮮人が別に幾くつも分校を起し本校同様に肩を駢べて獨立して居る、そして成績が大に擧つて居ると云ふ事である、して見れば朝鮮人に日本語を教ゆる事は左して困難でない事が分かる、だから此際大に邦語を彼等に教ゆる事が必要だらうと思ふ、更らに進んで之れを信仰的に云へば今のやうに組織的に教育せずとも信仰的にそう云ふ親切を持つて彼等を啓發しやうといふ精神のあることを知らずと云ふ事だけでも非常に必要なものである、見聞する所に依て見れば新同胞たる朝鮮人と在來の日本人との間に從來どうも「親しみ」と云ふものが見出されない、此の「親しみ」が無ければ同化も教化も出來得らるゝものではない、そして此の「親しみ」の無い事を日本人に言はせると朝鮮人を親しくするとツケ上がつて馴れ過ぎるから困ると云ふけれども其處が教育の教育たる所て、其の悪弊を矯正して恩威并び行はれ彼等をして善良なる國民と爲すのが教育の必要な點である、どうしても此處は信仰的態度

朝鮮開發と信仰

を以て面倒を見て遣らねばならぬ、若し然らざれば大きく云へば將來の對鮮政策として駄目だらうと思ふ。

從來日本の宗教が朝鮮人の精神感化に盡くさなかつたと云ふ點は佛教然り基督教亦た然りである、日本基督教者の事は且らく措き從來此方から行つて居る佛教者の傳道なるものは居留人間に限られてゐて朝鮮人に對して何等爲す所が無かつたと云ふ事は事實である、併し之を以つて直ちに在鮮佛教者を責めてはならぬ、なぜ從來日本の佛教家が朝鮮人傳道に着手しなかつたかと責めても、なぜ朝鮮在勤の僧侶が手を着けられなかつたかと責められぬ、彼等僧侶は幾度かの本山の政變て傳道資も途切れ勝ちの中でどうして朝鮮人の傳道が出来やう、朝鮮人に手が着けられなかつたのは無理のない事である、彼等在勤者は實に惡戰苦闘を嘗めて漸く今日あるを得たのである、だから之れは在勤者に責を歸すべきではない、自分に言はずれば日本の國民全體が從來斯かる事に注意しなかつたのである、何にかあると直ぐ宗教家の無能呼ばりが始まるか日本の政治家も教育家も乃至一般國民が朝鮮の精神的啓發に就いて冷淡であつた、併し今更ら云つた所が是非も無いが、在留邦人多くは朝鮮に於ける外國基督教の傳道振りを見て一面其將來を怖るゝと同時に一面其の行動に感心して、日本佛教家の朝鮮人傳道を希望するやうになつて來た、之は官民共に要求する所て、ツマリ基督教に刺戟せられて佛教の朝鮮人傳道を望むに至つた、だから今後日本の佛教者は大に遣らぬ

時局と十七憲法

ばならぬ、併し大に遣らねばならぬが信仰を以て直ちに實行の上に働かせて行かなければ不可ぬ、傳道者にして信仰が無かつたならば假令韓語に通じ朝鮮の事情を暗んじても精神感化の上に何等裨益する所が無い、我が東派が始め青年僧侶を派して朝鮮に留學せしめたが宗教的に其の結果が意の如く揚がらなかつたのも此の點に缺くるところがあつた爲めではなからうか、だから朝鮮人傳道に先だつて傳道者自身の信仰が無ければならぬと云ふ事を特に云ふて置かねばならぬ。

今度朝鮮て話をするのに聖德太子の十七憲法を中心として話して來た、丁度朝鮮へ行く前に豫ねて約束のあつた法隆寺へ立寄りて太子の像を貰ひ、其の像を奉じて九州沖繩を回り、其れから渡韓したやうな都合で、到る處で十七憲法の御趣意を信仰的に述べて來た、水原では南大門の樓上で講話をしたが其時は樓上に太子像を安置し島田蕃根翁の書かれた、十七憲法の軸を懸けて講話をした、水原に遷都の計畫があつたと云ふ正宗大王は日本最負の方であつた事から、朝鮮問題に一方ならぬ苦心をせられ圓滿な解決をせられた聖德太子の尊像と、太子の制定せられた十七憲法とを思へば、其の間に深き因縁が結ばれて居る事を感じずには居られなかつた。

翻つて在留邦人の精神界裡を窺ふに、内地同様に求道の精神を有つて居る者が澤山ある、釜山杯では内地で説教や演説するのと聞衆少しも變らず熱心に信仰上の質問があつた、併し全體から見れば内地より凡て十年後くれて居ると云はるゝ通り各人物質的經營に忙がしく信仰問題に熱中の度が内地程にはないやうである、併し彼等は日本の宗教家に依りて信仰問題を聴かんとするの風は充分に認められる、基督教では植村、海老名等の諸氏が時々在留日本人の布教の應援に出懸けて居る、從來佛教側の日本人傳道は別院とか布教所とかに屬せる内地からの在來信徒に多く限られてゐて新らしき信仰者は少ない、之れは實に遺憾な事である。

十七憲法は實に現下の朝鮮の時局には最も適切なる御教訓であつて、此の憲法を通じて今回併合の御詔勅を承ると更に深重の御趣意が拜察せられる、十七憲法は直截簡明に信仰的に統治の道を指導せられたもので此の御精神を以つて新舊同胞の心からなる融和同化を謀らねばならぬ、太子が推古天皇の攝政を爲し玉ひて神功皇后以來の懸案であつた三韓問題を解決せられ國威を宣揚せられたのは、武力一偏を以て征服せられたのではなくて、太子の御信仰を以て韓民を悦服せられたのであるから、今後益々此の御精神を遵奉して行かねばならぬ。

各地で講話を聴かれた人々は十七憲法に對して非常に感じたりやうであつた、軍人は軍人、官吏は官吏、各々が十七憲法

は吾等の服務規程を見るやうだと云つて喜んで居つた、私の話の要領は信仰問題を基礎として人生問題を説明しやうと云ふのが趣意で、丁度信仰上の自覚を起して水の底まで足の届いた者ならば必ず自然に人生の水面上に浮び出て圓滿安樂に人生諸般の事件を解決して行けるに違ひない、十七憲法は此の信仰の立場から人生諸般のことを指導せられたもので、平等から差別に移る徑路が教へられて居る、宗教の要は信仰の爲めに溺れるにあらず信仰を以つて人生に生きなければならぬ信仰上の細かい専門的な研究も修養も固より必要には違ひないが此の間に徘徊してゐては不可ぬ、信仰を基礎として其の信仰を直ちに實行の上に働かせて行かねばならぬ、殊に今の朝鮮のやうな場合は最も之が必要である、自分も彼地に在る間に是非朝鮮人と膝を交へて充分に話をして見たいと思つて居つたが言語が通じないと時間の餘裕が無かつた爲めに其の機会が無かつたが、ちよいと教師達に十七憲法を讀んで朝鮮人に聴かせて貰つたが、彼等も其の意味を解して喜んで居つた。

要するに私の考へては今後の朝鮮統治と云ふ事も、早く同化せしむると云ふ事も、凡べて威力を以て打克つと云ふ態度でなくて信仰を以て彼等新同胞の悦服を謀るやうにせねばならぬ、今後の朝鮮問題は畢竟するに精神問題であつて、此の精神問題の踏趣如何に依つて併合の實行が擧がるか擧がらぬか、決するのである。

であります、古來此人生上の教訓に付いて色々書殘してあるものが多いのであります、眞に一の信仰の立場からして人生の總ての事を實行して行くと云ふ事の教訓は甚だ乏しいのであります、之を言ひ換へたならば眞實自分が信仰を以て、其信仰の力を以て社會に仕事を爲して行くものが少くないので、更に之を言ひ換へましたならば眞面目なる立場に於て、眞面目なる仕事をすると云ふものが少ない、所が聖德太子が日本に於て信仰の源でありまして、且又御存じの通り日本の精神的文明の淵源でありましたが、なほ政治の方に於きましては、また又建築にも美術にも其他社會萬般の問題に於きましても聖德太子は實に我が文明の根源となられたのでございませぬ、申すまでも無い事でありまして其聖德太子が推古天皇の朝に於て攝政に御なりなされて政治上の意見を發表せられたまはすと云ふ時に於て、數多の群臣に對して此十七箇條の憲法を御示しになりました、即ち政治向の仕事をするに付いての簡條であります、之を熟々拜讀致しまするに、實地の仕事をする上に於て、甚だ適切であると思ふのでありますから、之を大きく言ふたならば、國家の政治、尙進んで言ふたならば世界の平和、小さく言ふたならば、個人が各々其役目に服する處の心得と言つて宜いのでございませぬ、私が此憲法を拜讀して感佩する事此處に多年、何も昨今に至つて言ひ出したものではありませぬが、此度因縁熟して朝鮮に参りますにつきまして、曾て島田藩根と云ふ老人が書き置かれた十七憲法を持つて参りました、事恰も時局の展開したる時に際しまして、聖德太子の當時を回想するのであります、此聖德太子の當時は

時局と十七憲法

明治四十三年九月六日京城南部警察署に於て講演

諸君、今日は御多忙中のところ態々も集まり下されまして、精神修養に關する一席の講演をば聴き下さる機会を得ましたのは洵に私の光榮と致します所でありませぬ、私は日本の内地に於きまして常に信仰上の話を致して居るのでございませぬが、此度御當地へ参つたのは信仰上のことについて皆様方と御相談を願ふつもりでありました處、倅にも本日は先づ第一著に皆さんにお目に懸つて平素自分の信じて居ります處をばお話することが出来たのは非常に喜ばしい事でありませぬ。乃ち自分の信じます處を以て申しますれば、これに皆様に御目にかゝつてお話しますことの出来たのは決して偶然に非らず、全く佛の力であると存じまして最も喜ぶこととござります。

今日お話を致しませうと存じますのは、總て人生の成立は信仰によりて行つてゆかなければ眞面目なる行動が出来ないのであります、でありますから萬事信仰に依らなければならぬといふこととあります、これは何人も言ふ處で異存の無い所だと存じます、果して左様であると致しまして、其信仰なるものは何う云ふ風にして得らるゝものであるか、而して又其信仰と云ふものは如何に働くものでありますかと云ふ事については、特に充分聴き願ひたいのでございませぬ、就きましては只今此處に斯様に掲げました處の聖德太子の十七憲法

朝鮮半島は日本の皇化に浴して居つた時代であつて而かも聖德太子が深く半島の人々に感化を興へ且つ精神上悦服せしめられたるものが聖德太子の憲法であります、此度は偶然のやうであります、此憲法の十七條をば拜讀を致して千二百年も経過しても殆ど現今の事が書いてありますやうに感ずる次第でございませぬ、只今早速此處へ掲げた次第であります、此箇條をば讀んで始終を講義すると云ふとは随分長くあります、併し皆さんの如き重要な職務に服して居いて下さる方々は何れの箇條を御覽下さつても無益で無いと思ひまして餘り長いと思ひましたが、兎に角折角持つて参つたのでありますから此を一讀致すだけでも皆さんの御参考にならうと思ひませぬ、此十七箇條の憲法の御話は今日に限らず度々當地で時機を重ねてお話が出来やうと思ふのでございませぬ、今日に悉く之を申さなければならぬと云ふ譯ではございませぬが、殊に私が此聖德太子の時代と現今の時局と對照して此處に言ふべからざる深い味ひがございませぬ、其味ひと申すのは何んであるか、聖德太子の時代に於て餘程此精神的感化の爲めに多年武力のみでは解決出来なかつた精神上の融和を實現致したのでございませぬ、現に聖德太子は三度迄兵を起して朝鮮を征伐せんと企てられたけれども、未だ此兵備をば實際に之を用ゐたと云ふことは無くなつて、悉く此信仰を以て精神的に悦服せしめられたのである、それであるから其當時に於て高麗の阿佐太子と云ふ人は第一番に聖德太子をば信仰致されて其像を書かれたものが今に御物になつて殘つて居ります、新羅の日羅が聖德太子を信仰致したと云ふことが

現はれて居ります、斯の如く精神上の悦服を來たしたのも何んであるか、外でありませぬ、信仰て有ます、聖徳太子は信仰を始めとして其當時の建築、美術其他悉く朝鮮の文明が輸入されたのである、聖徳太子は深く之に意を用ひ之を信じ自分の信じたるものを以て半島を撫育せられたのである、實に聖徳太子の精神と云ふものは恐らくは今後日本の國民が理想となし後の人が慕つて行くべき處の道筋であらうと思ひます、此事は先づ其位にして置いて其箇條に付いて二三の御話を申さうと思ふのでございます。

此第一條から讀みます。

「一曰以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨、亦少違者。是以或不順君父、乍違于隣里。然上和下睦、諧於論事、則事理自通、何事不成。」

「二曰篤敬三寶、三寶者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人非貴是法。人鮮尤惡、能教從之。其不歸三寶、何以直枉。」

此第一條は人生の目的は大平和にあることを示し、第二條は之を實現するは信仰によらざるべからざることを示されてあります、抑々第一條の精神は以和爲貴、無忤爲宗の二句であります、人間は和らいて行くのは貴いのであります、逆らうと云ふ事の無いのは一番肝腎であります、即ち今日に最も理想とする處の者は平和であります、又個人の上に於ても家庭の上に於ても友人の間總て人世の問題に於ても和らいて行くこと云ふのが必要であります、又半面を言ふたならば逆らふ事無しと云ふことでもあります、毫もいさかひの無いやうな事も

の内に蟠りの無いやうになつたならば「事理自通何事不成」と云ふのでございます、實に適切なるところの箇條でございます。

斯の如き箇條を一讀を致しますると甚だ難行の點が見えない様であるが、それを行ふに至つては甚だ六ヶ敷しいことを發見するのであります、もう一步進んで實際の上の話をすると、只今も申しました如く人と云ふものは五分々々であるからどうしてもこちらの方から隔て心の無いやうにしますれば決して仲悪くなるものではございませぬ、世の中は總て斯う云ふ事になつて出来て居る、之れが若し反對にこちらの方から人に對して隔て心をもつたり悪い考をもつて居ると人も亦其様にこちらを遠ざけて遂には仇で返へされるやうなことになる、斯う云ふ様に世の中の人々は皆蝶鏝になりてあります、だから人間と云ふものは互に悪しき心を起こさず仲善く付き合つて眞實心に於て同情を爲し察しをなして互の心が一致して行くやうにしなければならぬのであります、處が世の中に於て先づ分りやすい處で申せば此度に二人の人がある、兩方が仲善くなつて居る時には何も問題は無い、一方は人に對して善くする、他の方面も之に對して善くするやうに向いたならば仲善くなるが、又一方は善くする同情をする人に隔てぬやうにしたときに他の一方も同様に同情を爲し隔てぬ様にした時には兩方が相信じて仲善くやつて行けるのでありますけれども、もしや一方が善くして居るのに一方の者は善く思つてくれない、一方の者が同情をして居るのに其れを聞き受けぬやうな場合、一方が隔て心が無いのに一方

疑を挟まぬやう何事も眞實心で内に蟠りの無いやうにしなければなりません、之れは人生の極を言ふてあります、斯く一言にして言ふたならば如何にもさうであること云ふ事を能く承知して居るが、之が實際上實現されるとされないと分れ目は何處にあるか、人と云ふものは平和が大切である、又逆らはないと云ふのが要點であるが、自己を正しいと考へて自分の方を標準として人に向ひますと人が自分の爲めに善くしないと云ふ風に見えまして、兎に角自己と云ふ事を正として考へたならば他人は正しくない者と見えるのであります、さう云ふ事てありますと相對づくになつてどこまでも自分は善いものであると云ふ事が思はれて來ます、自分が善いと云ふ考を以て他人に向ふやうになつて來ますと此平和と云ふものが破れるから「人皆有黨、亦少違者、是以或不類、君父乍違于隣里」であります、茲が肝腎であります、古へより平和が破れると申すのは今申しましたやうな譯であります、總ての事一つのものでも、一方は此方に取らんとして引くときは一方は彼方に引くといふ様に、一方の者が心を隔てるだけ一方の者が亦心を隔てるといふ様に詰り五分々々である、こう云ふ工合に自分が善いを云ふ考を以て人を見ますと人又自身を善いと見るのと同じく、自分が他人に従順て向はない人も亦従順て無いのであります、又自分の方から隔て心を以て人に向ふたならばいつ迄も親しんで行く者でありませぬ、デヤに依て自分と云ふ考を以て他の者を同様に考へるのは何より悪いのでございます、「然上和下睦、諧於論事、則事理自通、何事不成」上からは下を憐れみ下は上に對して柔和、心

の心は解けぬと云ふ場合に多くの人間は何うするかと云ふと一旦こちらから同情を以て平和に致さうと思つて向つて居るものがもう駄目であると云ふ心を起こして前に善くして居たものがこんな事ではいかぬと云ふやうになつて今迄は人に對して善くしたのも隔て心が起り同情が無くなつて皆水泡に歸して仕舞ふのである、人間總てが凡夫に歸つて仕舞つた時には皆斯様な有様となるのである、それで「以和爲貴」と云ふ事は一の理想には違ひないが、確に理想通りゆかぬと云ふ事が世の中に多いのでございます、それで信仰上の事實が其處に必要となるのであります。

人皆誰れでも自分の心の内では善いとか悪いとか云ふ事は分つて居るが、ナカナカ善い事は出來ないもので、今申しましたやうな場合になりますると、今まで善くしやうと思つて他の爲に自分の身を捨て、居つた人間が遂に再び向ふが善くないからと云ふてもう彼は自分の言ふ事を聴いてくれない捨て、仕舞へといふ様な風になつて雙方の間が悪くなつて來ては其親切と云ふものは甚だ短いものであつて何時迄も續くものではないと云ふ、此大平和を來たすものは飽くまでも親切心を貫くと云ふことと無ければなりません、それで人に對して親切をする時には如何なる場合に於ても隔て心の無いやうに飽くまで眞實の心をもつて致さなければ眞の平和は來りませぬ、實に信仰の問題は妙なもので大きな事件も小さな事件も同じこととあります、社會上の事も家庭の事も同じでございます、「以和爲貴、無忤爲宗、人皆黨」といふやうに之が飽くまでさう云ふ事に出來るかと言へば表面は善くし居

る、舉動では善くして居るが心の内に悪んだり、心の内に不足の念をもつて居つたならば心の内に眞實が出来ぬと云ふことになつて仕まひます。是から此地で數日間お話をするのであります。皆さんもどうぞ重ねて聞いて戴きたいのであります。自分の信仰に這入つた一の丁寧なお話をしやうと思ひます。此處に於ては私が信仰の光に這入つた事をお話致します。

人間は敵を愛するが併しいよ／＼となつて眞實敵を愛する事は出来ぬ自分では敵を愛する／＼と言つて居つたが、もう今となつては敵を愛する心が無くなつて仕舞ふ、どうも彼は自分を信じてくれぬやうである、又愛してくれぬといふやうにきめて居るのでございます、やはり隔て心が止まぬのでございませう、それはどうしたならば本當の平和は来るか、そこで私が何う云ふ事によつて信仰を得たか、最初は今のやうにどうしても人に對して隔心が止まぬやうになつて仕舞つた、どのやうに心を取直して考へても止まないやうである、私の心に於てどうしても悪い心が止まぬ、そこで私が思ふにはもう我が飽くまで事を善くすると云ふとが出来なくなつて、最後に至つて我が斯の如く人の爲めに愛ひ、人の爲めに心を碎きて苦み惱んで居るのにも拘はらず、眞に我に對して同情をもつて、我を心を見抜いて、我を憐れんでくれるものはないのであらふかと、非常に痛嘆を致したのでございませう、殊に今日お集まり下されました皆様の御職務を考へて見ますると、皆さんは表面に立つて凛々しい事をなさるのでは無い、皆さんの御仕事は表面に現はれず裏面に廻はつて盡すとい

云ふことが抑々誤と言はねばならぬ、此の如く佛に安んじて初めて事を爲すのでございませう、既に佛の恵みと云ふことが分つて來ますと今迄苦んだ人生上の問題が此佛の御恵みによつて解決が出来るのであります、それで第二の「篤敬三寶」三寶者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人非貴是法。人鮮不惡能教從之。其不歸三寶何以直枉」とあります、此等第二箇條の「篤敬三寶」と云ふことは即ち佛に歸依せよと信仰が表はれて來たのでございませう、何か適切な例をもつて皆さんに御了解を願はふと思ひます。何うか充分なる信仰をもつて御聴取を願ひます。

或縣の視學官をして居られた處の某法學士が先年教科書事件があつて、其時に冤罪をもつて監獄に繋かれたことがあつた、其人は自分の心の内に於ては少しも疚ましい處は無い、決して怪しい犯罪が無いによつて何も自分は鐵窓に繋かれる理由は無い、自分は何處までも潔白であると自分を眺めたやうな次第でございませう、さう云ふ事であるが其人は最初は自分の心に於て疚ましい事は無いと平氣で従容として居つたのであります、處が段々有罪と云ふ事に極まりをうになつたのであります、後になつてから非常に煩悶をする様になつたのである、實に人生は無理である、實に人生は不可解である、國家の法律は自分に對して無理を強いるものである、裁判官は自己の考を以て勝手に無理なる處の判決を下すのである、と斯の如き事を考へて來てからは人生に於て頼みとするものは何も無いと人生を疑ふやうになつて來た、それだけ多くの

ふことで、果して上の人が下の人を見て居られるか何うかといふやうなお考へが起るてありませうが、上の人とても人間であるから實際それだけの働があつても見通されぬこともありませう、又これが見て居ることは見て居るが椽の下の方持となつて仕舞つたのでは無いかと思はねばならぬ、此の如く總ての人間と云ふものが世界に至る處果して眞實自分の心を認めてくれるものが無い、了解してくれる人が無い、自分の爲めに同情をしてくれる人が無い、自分の爲す處を知り眞實自分といふものを眺めて下さる處のものは乏しい、世に我を了解する眞實の友達がないかと大に煩悶を致したのであります、さう云ふ場合に立至つて始めて眞に自分の心を見て下さる眞の友達は佛の宏大なる御恵であると氣が付いたのが私の信仰であります、愈々最後に氣が付いて來ました時に自分は世の中に於て同情をしてくれる友達は眞に佛の御恵であると云ふことを感じました、佛の恵みと云ふことは人は誰れても口で言ひますが人間の最後は佛の恵みを感じねばならぬといふのは此處であります。

かくの如く佛の恵みが分ると同時に今まで人に對して不足の心があつたのが最早不足の念慮が無くなつてしまつては佛の恵によりて大満足と興へらるゝのであります、此に於て我の行く處進む處皆佛の恵みであるといふことになつて、此處に於て總ての問題が明瞭になつて來たのでございませう、今まで人を疑ひ人の同情を求めて居りましたが人に求むべきではない此心を恵みて同情して下さるものは只佛であると云ふ事が氣が付いたならば佛ならざる他人に向つて同情を要求すると

煩悶が起つて來たのであります、自分の心が潔白で世の中は不合理であります、人生不合理のやうでありますが斯う云ふ事が多いのでございませう、そこで其人が煩悶極まつて何うしても安んずることが出来ない、其時に私の信仰の經驗を書きました處の「信仰之餘瀝」と云ふ書物を恰も百五十部程夫等の人々に差上げたのであります、丁度其人の境遇が恰も私の經驗を味ふに善き機會であつたのであります、即ち永い月日の間天を恨み人を恨み斯の如く人生を悲觀して居る時に其者を哀れみ其人を同情して見捨て給はぬ眞の友達は佛一人であると云ふと氣が付いて自分の心が初めて夢が醒めたやうに信じたのであります、恰も釣針を脳に入れて我思を引出された様になつた、其人が佛を信ずると同時に何う云ふ念慮が起つたかと云ふに、自分は今迄は佛を知らなかつた爲めに人を恨んだのである、處が段々氣が付いて見れば他人として人間の事であれば行届かぬのは無理ではない、人は一々私の求めに應ずることが出来るものではない、然るに私が人を不足に思ふたのは自分が佛の光を見て居らぬために人に不足を言つたのであると、これは此人のみでは無い、我々も同様である、即ち一步進んで言ふたならば今日まで無罪である冤罪であると云ふとを頻に主張したのが實際的には無罪か冤罪であらうか始めて今自分を見出した此佛に對して無罪と言はれやうか、我は有形上に於て法律上無罪冤罪であつても佛に向つては精神的に有罪であると斯う云ふ考を起して來た、此處が非常に味ひがあるのでございませう、人間は如何なる者と雖も佛の前に立つたならば罪の無いものはないのであります、丁度此人が、

佛を認めると同時に自分が主張して居つたところの無罪冤罪であると思つて居つた處の心がなくなつて其結果の如何と云ふとは之は佛に任ずべきである、我は我の爲すべき務がある、即ち我は此の如く佛の恵が分つて見れば一人にても同一の境遇にあるところの人に向つて此佛の恵みを傳へねばならぬと只管他の同輩の人々に向つて信仰のことを話し、自分は一室を清め便所に至るまで掃除を致して居たのでございます、處が不思議であります、此處に至つて其人無罪冤罪と云ふことが表はれて來たのでございます、其時より其人は直に無罪なることが明瞭になつて舊の官職に復して任地の方へ出發をして其事をば一般の人に知らず様になつたのでございます、其人が任地に出發をする時に私の處へ來て其話を致し其後多年他の縣に於て教育の成績を擧げて只今は最も信用すべき處の位置に立て居らるゝのであります、斯の如き事は信仰の結果であります、此結果を得るには信仰に入ると云ふことが何より大切でございます、信仰に入らなければ現れぬのでございます、斯様に信仰は何人も大事なのでございます、どうぞ皆様も佛の恵みを得て人生に立ち下さるやうに願ひます。

「則四生之終歸萬國之極宗」此信仰なるものは胎卵濕化と申してあらゆる生きとし生けるものゝよりどころ、苟も世界に國を形作るものゝ必ず依らなければならぬ所であり、信仰なくんば人生も國家も成立つものではない、「何世何人非貴是法」古今如何なる人であらふが東西如何なる所の人であらうが此信念が一つ無ければなりません、「人鮮尤惡能教從之其不歸三寶何直枉」如何なる處の惡るいものでも

らば先方も隔て心が無くなるのは畢竟佛の恵みによつて出来るのでございます、所謂敵を愛するといふことが實現するのでございます、たとへば上の者が下の者に對して教化する時にも、下の者が善くしないけれども、向ふの方を理解し飽くまで知り抜いて、こちらの方から同情をもつてかゝりますと必ず下の者が悦服をし又理解するのでございます、之が第二の箇條でございます。

已上第一條第二條は人生問題より信仰に入ることと述べたものであります、第三條已下は其の信仰が人生に實現する有様であります、既に信仰を獲得すれば、其の結果は自然に分るのでございます、故に三條下文句を朗讀をして見ます。

「二曰承詔必謹君則天之臣則地之天覆地載四時順行。萬氣得通。地欲覆天則致壞耳。是以君言臣承、上行下靡。故承詔必慎、不謹自敗」

是は君臣上下の大義である、抑々相對の人生より一たび絶對に入るときは、其絶對の信仰は再び人生に活躍して眞實の相對界を形作るものであります、即ち第二條の信仰上に第三條の君臣天地の大義が實現するのであります、即ち皆眞面目でありますから君則臣則、皆成立つのである、之を御覽下さつた時には之は成程適切なるものであらふと御承知下さることと思ひます。

「四曰群卿百僚以禮爲本。其治民之本要在於禮。上不禮而下非齊。下無禮以必有罪。是以君臣有禮位次不亂。百姓有禮國家自治」

如何なる隔心のあるものでも此恵みによつて従はせることが出来るのでござります、前來申す通り人間の間柄は誰れしも始めの間は五分々であつて此相對界を脱することが出来ないのが人である、どんな豪い人でも五分〳〵の人間である、五分〳〵の人間でありながら外の人に對してどんな事があつても人間力で他人を感化することは出来ぬのであります、之が一度信仰に入るとコロリと感化することが出来る、誰も此信仰に入る場合に必ず考へるであらう我も本來自分の隔心が止まなんだものが一度信仰に入りて佛の恵みを知つて喜ばしい心が満ちて來た、ところが自分には此佛の恵みと云ふことを知らなかつた時は彼の様な考を起したのでは無いか、彼の様な隔て心があつたのでは無いか、他人もどうしても信念に入らぬ間は隔て心の止まぬも最もであると云ふことが他人に對して理解が出来る、自然に人に同情が出来る、其察しが出来たならば決して五分〳〵で無い、自分の力として和らぐことの出来ぬものが信仰の力として實現することが出来るのでござります、世の中の人が人間の力を以て人を同化し、他人の疑を氷解すると云ふことは出来るものでは無い、こちらの方から私が悪かつたと低くなるから先方も氷解するので其處で私も悪かつたと、其人の心を服従せしむることが出来ること云ふものであります、我より飽く迄察しを以て人に向ふと云ふ餘裕があつてこそ人を同化するといふことが出来るのでござります、故に之は信仰の力で無ければ出来ませぬ、私が一番此信仰の働きとして皆さんに聽いて戴きたいのは此處であります、それであるから人がこちらの方から隔てが無くなつた

此信仰と云ふものは極廣いものでありますから信仰に入ります事を茫漠たる處の海原の様考へる、之ではまだ信仰の眞の味が無いのである、信仰の奥底を極めざるものは相對界へ出る事が出来ぬ、しかるに眞面目に佛の信念が確立致しますると佛の御恵みが明瞭になつてくるものゆへ一度此君より詔を受けまして臣たるものは之を謹んで君に對しては眞實の心をもつて下に臨むと云ふことであります、此の如く國家の大綱たる君臣上下の區別が立つて來た時には必ず其間に秩序が起るもので「群卿百僚以禮爲本」といふが是である、此人間に限らず世の中は皆此禮と云ふものがあつて成立つて居るのでありますから、禮といふものを外づしたならば信仰が外づれるのでございます、モウ今のやうに秩序が立つて來たならば人に對して行ふ處必ず禮をもつてするやうになりませす、チャンと眞面目なる道に行くのでござります。

「五曰絶糞棄穢欲明辨訟其百姓之訟一日千事。一日尚然況累歲乎。頃治訟者得利爲常、見賄聽讞。便有財之訟如石投水乏者之訴似水投石。是以貧民不知所由。臣道亦於焉闕」

公人たるものは糞應を退けねばならぬ、又一本に糞に作りてあります、即ち貪慾心をば絶ちて訟訴を明かにせよと云ふ意味でございます、朝鮮には特に適切であります、併此は訴訟ばかりではない、此臣道といふ語が中々味がある、臣民には臣道がある、嶋田番根老人は臣道會といふものを起したいといふて此憲法を書かれて人に頼られたのでござります。

「六曰懲惡勸善古之良典。是以無匿人善見惡必匿。其

誦詐者^{ナラハ}爲^レ覆^ニ國家^ノ之利器^ト爲^レ絶^ニ人民^ノ之鋒劍^ト亦佞媚者^{ナラハ}對^シ上^ニ則好說^ニ下過^ニ遂^ニ下則誹謗^ニ上失^ニ其如此人皆無^レ忠^ニ於君^ニ無^レ仁^ニ於民^ニ是大亂之本也^{ナリ}

隨分適切な簡條でございませぬ、斯の如く正邪曲直を明かにして判断取捨して行くならば確に風紀振肅するのでございませぬ。

「七曰人各有^レ任掌^ニ宜^ニ不^レ濫^ニ其賢哲任^ニ官頌音則起^ニ奸者在^ニ官禍亂則繁^ニ世少^ニ生知^ニ克念^ニ作^ニ聖^ニ事無^ニ大小^ニ得^ニ人必治^ニ時無^ニ急緩^ニ遇^ニ賢自寬^ニ因國家永久社稷勿^レ危^ニ故古聖王爲^ニ官以求^ニ人爲^ニ人^ニ不^レ求^ニ官^ニ人材登庸^ニありませぬ。

「八曰群卿百僚早朝晏退公事靡^レ監^ニ終日難^ニ盡^ニ是以遲朝不逮^ニ干急早退事^ニ不^レ盡^ニ職務精勵時間勵行^ニありませぬ。

「九曰信是義本每事有^レ信^ニ其善惡成敗要在^ニ于信^ニ君臣共信何事^ニ不^レ成^ニ君臣無^レ信萬事悉敗^ニ此十七條の憲法の順序を論ぜば、此憲法發布の歳定められたる官位の名、徳仁禮信義智の順序になつてある、第一と第二とは徳、第三、第四とが仁、第五第六第七第八之が禮、第九が信でありまして而も信から義が出るのである。即ち此第九の中の信と義といふ字でありませぬ、他の場合などを見ますると信義となつて居りまするが、此處では信と義とを分つて居ります、信が本になりて夫から義と云ふものが出て来る、義理義務を先にして事を爲すのではだめである、中心より人に對して眞實親切に物事を爲すと云ふ意義で、人と云ふものは

「十四曰群卿百僚無^レ有^ニ嫉妬^ニ我既嫉^ニ人々亦嫉^ニ我^ニ嫉妬之患^ニ不^レ知^ニ其極^ニ所以智勝^ニ於己^ニ則不^レ悅^ニ才優^ニ於己^ニ則嫉妬^ニ是以五百歳之後乃^レ今遇^ニ賢^ニ千載以難^ニ得^ニ一聖^ニ其不^レ得^ニ賢聖^ニ何以治^ニ國^ニ嫉妬猜忌は役人根性の病根、此摩擦の爲に勢力を消磨すること大なりと言はねばならぬ、若し幸に此弊を去りて同方向に勢力を用ゐなば其結果如何。

「十五曰背^ニ私向^ニ公是臣之道^ニ矣^ニ凡人有^レ私必有^レ恨^ニ有^レ恨非^レ固^ニ非^レ固^ニ則以^レ私妨^ニ公^ニ恨起^ニ則違^ニ制害^ニ法^ニ故初章云^ニ上和^ニ下睦^ニ其亦是情^ニ歟^ニこれは私偏を去りて公正に就くこと臣道の要なり、不公平のために恨を買ひ、人を固くしたならば必ず平和を破ることである。

「十六曰使^ニ民以^ニ時古之良典^ニ故冬月間以^ニ可使^ニ民^ニ從^ニ春至^ニ秋農桑之節^ニ不^レ可使^ニ民^ニ其不^レ農何食^ニ不^レ桑何服^ニ今一例をもつて御話を申し上げますが、太田地方に或時に河の畔に朝鮮人が死骸を置いた事がある、さうすると巡査が何ぞこんな處へ死骸を置くか、實に甚だ宜しく無いと取拂を命じた處、此處へ死骸を置かねばならぬ方角によつて置いたものであるから、どうしても他の場所に置くことが出来な

い、成程迷信の上から言へば其れを取除ける譯にはゆかぬ、そこで悲歎の餘り或人に相談をした、そこで頓智を以て一の方法を教へてやつた、其法と申すのは外でも無い、一人々々が其方角を極めないて一箇村全體の者が皆集まつて共同の方角を

自分の爲すべき事をすれば成功は人から與へられるのであるから其結果は要求するに及ばない、我が眞面目なる道を守つて能く其道理を理解して行けば好いのでございませぬ、嘗て私が北海道岩見澤に於て適切なる話を聞いた、明治の初年北海道開拓の時深林拂下を得て労働者を使役して美田を得たる大地主と云ふものは今日では一つも其土地を所有して居らぬ、のみならず、何處へ行つたか行衛不明となつたものや、大方は零落をして一つも残つて居らぬ、而して其土地をば今では誰が持つて居るかと言へば其當時耕した處の労働者が持つて居ると云ふことを聞きました、實に此話は殖民地に於ては成功ばかりをねらうて信が浮足になる人に向て誠に適切な訓戒であると思はれませぬ。

「十曰絶^ニ怨棄^ニ願^ニ不^レ怒^ニ人違^ニ人違^ニ人皆有^レ心々各有^レ執^ニ彼是則我非^ニ我是則彼非^ニ我必非^ニ聖^ニ彼必非^ニ愚^ニ共是凡夫耳^ニ是非之理詎能^ニ可^ニ定^ニ相共賢愚如^ニ環无^ニ端^ニ是以彼人雖^ニ願^ニ還^ニ恐^ニ我失^ニ我獨雖^ニ得^ニ從^ニ衆固舉^ニ實に千古の格言、何人も一言ありませぬ。

「十一曰明察^ニ功過^ニ賞罰必當^ニ日者賞^ニ不^レ在^ニ功^ニ罰^ニ不^レ在^ニ罪^ニ執^ニ事群卿宜^ニ明^ニ賞罰^ニ信賞必罰^ニありませぬ。

「十二曰國司國造勿^レ歛^ニ百姓^ニ國靡^ニ二君^ニ民無^ニ兩主^ニ率土兆民以^ニ王爲^ニ主^ニ所^ニ任官皆是^ニ王臣^ニ何敢與^ニ公賦^ニ斂^ニ百姓^ニ朝鮮兩班の聚斂誅求實況に對して適切でありませぬ。

「十三曰諸任^ニ官者同知^ニ職掌^ニ或病^ニ或使者有^レ闕^ニ於事^ニ然得^ニ知^ニ之^ニ日相和^ニ如^ニ會識^ニ以^ニ非^ニ與^ニ聞^ニ勿^ニ妨^ニ公務^ニ極めて一定の處に一箇村のものが土地を選定することにしてやつたならば宜いでは無いかと聞かしたをうてあります、此話は私が聞つたのであります、さう云ふやうに何事も行くのは畢竟智慧である、其人の心の内に至つて見れば何んとも無いやうであります、其事は容易ならぬ大事件でございませぬから何事でも向ふの心になつて處分をしてゆくと云ふこととあれば圓滿にしてゆかれるのでございませぬ、所謂かやうな事は信仰よりあらはるゝ智であります。

「十七曰大事^ニ不^レ可^ニ獨斷^ニ必與^ニ衆宜^ニ論^ニ小事是輕^ニ不^レ可^ニ必衆^ニ唯違^ニ論^ニ大事^ニ若疑^ニ有^レ失^ニ故與^ニ衆相辨^ニ辭^ニ則得^ニ理^ニ五箇條の御誓文の萬機公論に決せよとあると同様であります。

もつとこれ等の簡條に付いて悉しく申述べて見たいと思ひますが、斯の如く一氣呵成で朗讀をしたのでございませぬから御不審の處もございませぬが、どうか之等の簡條をば充分に反覆熟讀して下さい、御職務上適切なものがあつたならば時節柄最も幸とする所であります。

之を要するに人生の問題は總て信仰によるべきもので、其信仰の力によりて斯の如く眞面目にみな働いてゆくと云ふことは信仰問題の要義であります、信仰と云ふものは一度心の内に於て佛を信じ佛の光を見出したならば何事も眞面目に行つてゆくことが出来るのであります、何も上の人に對して眞面目にするのでは無い、自分の心の信仰の上から眞面目にするとしてあつて、外からせよと言ふふらすると云ふのでは無い、即ち眞面目なる立場から眞面目なる仕事をすると云ふのは上

下に拘らず、決して其職務の大小に拘らず人間のする事はみな此眞面目なる立場からすると云ふとが肝腎でございます。又總ての事業が眞面目なる信仰に至つてやつたならば大きい結果を持来するのでございます、大なる地位にある人も下なる地位に居る人も其職を眞面目にすることは信仰に於ては少しも違はないのでございます、眞面目なる立場に入つて仕事をすればたとへ其事は小さな金であつても純金は純金であるのでも決して粗末に出来ないのでも眞面目にやると云ふことが肝腎でございます、即ち信仰の立場から社會を眞面目ならしむるのでございます、勿論心の内に佛を信じ佛の御恵みを感じたならば其信仰の現れといふものは必ず確實なものでございます、其眞面目なるものは何んであるかと言ひますれば即ち佛の大なる御恵みを知つて總て眞面目なる處の精神を起し得られるのであつて先程信仰の經驗を申しましたが、私は個人的に申して居りましたやうでありますけれども社會的國家的に致しても同じなことであらふと思ひます、今後日本の國民として朝鮮半島に於て御働さ下さる方々が從來よりも尙一步進んで眞實に自覺の問題に入つて新國民を同化致さなければならぬといふやうになつて、即ち精神的同化で無ければならぬといふことが今日は殆ど社會上の輿論となつて此事に付ては何人も疑を挿むもので無いのでございます、果して赤心を人の腹中に置くといふ様に眞實に向ふの人の心に自分の心を置くことが出来るか出来ないかと云ふに、自分が高き所より人を見下し親切にしてやるといふ様な氣では駄目である此

は腸を引裂くやうな思ひがするのであります、能く其邊を味はつて貰はなければならぬのでございます。

最後に一言致したいのは先達而私がこちらへ参ります時恰も稻葉子爵が優詔を奉じて渡られた御勅使と船を同ふするの榮を得たのでございます、此度優詔を拜讀を致すに李の王家及新國民に對して御丁寧なる大御心を感佩し奉る次第であります、即ち新に皇化に浴せる朝鮮上下に對して赤子を安んずるが如く飽まで赤誠を人の腹中に置くといふ厚い處の御思召をもつて下されたる處の優詔でございます、即ち畏れ多くも陛下より御丁寧なる優詔を賜はれたのであるから我々臣民たるものは新同胞に對して心の内に少しも隔て無く飽迄同化に努めねばならぬ、夫につきては上來述べたる信仰によらなければならぬのであります、今日は皆さんの如く御熱心な方々が御集まり下されまして京城に到着するや一番始めにお話をすることを得ましたのは誠に光榮に存じ且又感謝に堪へないのでございます、甚だ複雑な話を致しまして私の思ふて居る十分の一も盡くして居らぬであります、どうぞ此十七憲法をば充分に御會得になりますやうに願ふのでございませう、尙今日から四日間此地に滞在を致しまして諸處に於て講演を致すのでありますから、詳しく申述べる機會があらうと思ひます。

佛の恵みに對して見れば實に隔ての多いものである、罪の深い者である、それと總ての人間は斯くである、是程に爲してやつたといふ様な感情をもつて人に及ぼしてはいかぬ、智慧のある人でも如何に言葉の上手な人でも策略やこちらの氣質をもつて人の心を動かしたり同化したりすることは出来ませぬ、古へより何事をするにも誠を以てなすべしとある通り第一に佛を信じて四海皆兄弟と云ふ心持で隔て心の無いやうにするのが何より肝腎でございます。

最後に一言して置きます、私が斯う云ふやうな御話を致しますると、中には眞面目なる仕事をするには唯やさしくさへすれば善いと云ふ様に誤解なさる方があるかも知れませぬが此信仰と云ふものは眞實自分が斯の如く信じた結果から發動したのであつて、これはやさしくするばかりで無い其心を充分先方に届ける爲めには丁度子供を親が育てるが如く悪い處をば涙をもつて親が子を育てるやうに強い言葉をもちて誠むるが如くにしなければならませぬ、即ち心の内は柔らいても言葉は嚴格で無ければならぬことがあります信仰の味ひは其處にあるのであります、國家の上にも社會の上にも於ても軍備法律裁判制裁等は此嚴しき形に表はれて居るものでございませう、さう云ふ現象が表はれて居りましたも眞に腹からの同情といふものは信仰が無ければならませぬ、古來嚴父慈母と言つて父親の強い言葉の下に母親のやさしい處の涙が籠つて居るので、父母の言葉通りに同化するやうに育てる事が出来るのである、父親の言葉は強けれども其下に内心

信仰書簡七章

謹て申上候まことに、如來大慈悲の御念力の程は、何とも有難く、たゞ南無阿彌陀佛と押し戴くより外に、此よつゝかなる、凡夫には申され難く御座候。

扱て此處に一層、如來五劫の思惟と十劫御まぢわびの御苦しみをしみじみと感じ且つは他力信仰念佛者、無碍の一道なる事を今日六日、事實として感じ、今日一日嬉しいやら、有難いやら、勿體ないやらにて泣き居申候。さて、私が去る四十二年七月一度、落第仕り候時、其れまでは、例月手紙の二三本もくれ、金圓の二三圓も惠送され居りし、叔父よりは、ハツタと普通たえて、此れまで父なき私の眞の父とも、たのみ居申候叔父より、殆んど破門せられたるが如く、何一言を云ふて来られず、さては叔父が私の落第を、不甲斐者と存じて全然望を私に絶ちたりと思ひ、其理由をかくさず、つゞまらず申送つて、詫び申候へども、返信無之、何度詫びても返信のあらばこそ、遂に愚兄に其の事問ひ申候ても、兄よりは更に其の事心配すなと申たるのみにて、これも要領を得ず、甚だ心細く相成り申候て、其れまで一度も思ひ出したる事なき亡父を慕ふ念、切に起り嗚呼眞身の父親なればと力なく、胸にせきくるかなしさをとめかねて月に泣き、星にかこちて人目を忍びて、女々しく泣きたる事も幾度なるを知らざる程に候へど其の度毎に嗚呼あやまてり、愚痴なりけり、四歳の昔より女の手一人にて私等兄弟を育てられし母の恵を思ひなば、亡き父をなんと泣く事は、母の苦しき二十六歳の昔よ

り今日までの御苦勞に不足を云ふと同じ事と、願ては心にわびて涙を拂ひ申たる事幾度、然れども一方にては、人は果して如何の問題は種々の思想によりて益々亂脈となり、學費を送る養父母に對しては甚しき不平がつり、學校生活の不快は度をすゝめ、思ふまいと云ふ叔父に對する不平も又起り、嗚呼此れまで望を有したりし叔父は、既に余を望なきものとして捨てたるや、余は今何を好んで練三合持たぬと云ふ耻を凌ぎて、學問するの要あらんやと、學校の事は一向勉強せず、哲學ひねり、神學ひねり、禪に法華にキリストに、何れに至りても心の風雨は、口先のみ鎮まりて、如何ともする能はず。時には飲酒すら敢てするに到り、而かも月夜三更の頃、窓外に出づれば、亡き父の俤見たりし、影にても見度し、叔父に對して、我れは面目を恢復する事不可なり、時々机の中より短刀取り出して一息に此のつまらぬ人生を葬らんと存じたるも母はかなしむらめと思ふては立ちかへり、其のまゝ手紙に書きては、かくまでに詫びる私であるから、葉書一本でも宜しいから、忙しいなら、何にも書かずとも宜しいから送て下されと書き送りたる事幾度となく、遂に力つきては、叔父一匹何のそのと捨て、顧みざる様になりても矢張り父にかはりて、一より十まで、世話になつた恩を思へば、泣く泣くまた昔の叔父になりて給へよと、五十日が間朝早くより、冷水かぶる行をはげみし事もあれこれあだのものとなり。破門したならしたと云ふて、此の苦痛を、のぞき給へかすと云ふて送りし事も幾度かなれども、滿二ヶ年が間、葉書一本も給はらざりしなり。

來の親様は案じたまふ、有り難さ。乗る船のりが暴風にくるしむより、其れを心配する船のりの妻の苦しき思はいかに苦しかるらん。待たる身は待つ身の苦しさを知らずとかや、さて、如來大慈の有難き事は何にたとへ申すべき様もなく、此の身此のまゝ、慈悲の涙にひたされて、往生をばとぐると思ひて、南無阿彌陀佛と申すより外には、凡夫のよからんとも、あしからんとも、はからはざるべく候。まことに不思議に候、滿二年間かゝりて、血書幾通の効なきも一朝にして此の有り難き手紙を、叔父より賜はりしも、これ如來大慈の、くまなく、とゞき渡らせたまふ故なり。まことに念佛者は無碍の一道に御座候。

是れまで、人生は如何、信仰は如何、何主義、彼に主義、安心立命など、立論のみして、安心の日なかりし私は、日常生活に不満足を感じ、人生の努力も、價値も何處にあるとも、うか／＼としてたゞ、三寸の舌はよく自慢、自傲に走り居申候へども、今は早や、凡夫のよからんとも、あしからんとも、何一つ自力のものはなしと、自力の野心をすて、念佛申さしめらるゝ、此のうれしさ、此の十二日より始業になる新學期も、かほど嬉しくむかへられたる事なく、これまで空論の書及び小説等にふけりて、學校の教科書は試験の前夜にのみ積み込みたる私は、今は空論の書見るひまあらば、教行信證よましてもらはん、小説よむ暇あらば、御一代記よましてもらはんと存じ居申候、八ヶ間敷く人生の意義など云ひたりしこれまでの意義は無意義にて。念佛は義なきを義とすと云ふ味もよく、有り難く承知仕り候、先生の御著、親鸞

嗚呼不思議なる哉、今日九月六日、二年間血にそめて書きたてたる、幾十と云ふ書面に一本の葉書も、答へくれ給はざりし叔父より一封書飛び來り申候。

此れは外にもあらず、先生の御導きによりて、如來大慈大悲の恵の有り難きと、私の淺間しきに氣がつきて、慚悔廻向の一念に念佛申す身となりたる事を、過日叔父に書き送り、此れまでは、詫び申たりと云ふも詫にあらざり、皆恨みの言のみ、不満の言のみ、人間の力にて詫びも出來ると思ひたりしは、未だに自分の悪しきを心から詫びるに非ず、筆に詫びて、心に恨みしにて候。今はたゞ大慈大悲の佛力に乗じて、我が爪の垢程の力は一向あてにせず候と書き申たる、短き一信の返事として、今日六日、此の叔父の手紙に接し申候。而かも其の手紙の中には金二圓を御惠封下され、其の文の中には、私の涙を呼び起したる次の文句有之候。嗚呼有難いと叔父に今まで申たる、恨の詫び言を慚愧して有難く慈悲をいたゞき申候。

此處に於て、嗚呼これは此の世の事乍ら、思へば五劫の間我身となりて、あらゆる水火の難をしたまひて、其の後十劫の間我がために休む日も夜もない如來様、我れは六道をめぐり、娑婆はつらしと泣くよりも、泣かぬ娑婆の思にくるしむ阿彌陀如來が、嗚呼さて／＼と思へば、いよ／＼如來様の有り難く、今は叔父上の怒をときて而かも此の眞の有り難みを御手まわし下さる如來の大慈。まことに、案じらるゝ身となるも、案ずる身になるのでないぞと云ふものを、やるせなき如

聖人の信仰」は二度まで讀ましていたゞき申候。其他諸鈔類は皆よましていたゞき、猶近き中に、親鸞聖人全集を取りよせる事を本屋に依頼し置き申候。求道の新刊は拜讀仕り、別しても、横着心と遠慮心は二回までよまして戴き、有り難く感じ入り申候。何やら前後、まとまらず候へども、疎筆をかへり見ず申上候。且つ奥州のゾー／＼は例によりて、かなを違へ候故御判讀下され度候。末筆にてまことに相すみ申さず候へども、御機嫌よう、あらせられ度、南無阿彌陀佛と祈り申上候。

九月六日夜

西村友次郎

講啓、長途の御旅行、嘸／＼御氣削の程奉察上候。陳者先日實に以て御手厚き御指導に預り、難有存奉候。三日間の御講演、全力を擧げて拜聽仕り、其結果、疑問相起り候要點、御開陳申上候通りに御座候。然る處、御出立の際、厳しく御教示に預り候得共、當時はボンヤリ致し、左程の感も無之御別れ致し、一日間は疲勞と、多忙と相加はり、一層ボンヤリと相成候處、四日に至り、フット御實を理意でさゝ來り候事に氣付、御出立の際の御言葉は、やるせなき御聲に感ぜられ、其時何か一と言ふ言申上候ことの拙劣なること思ひ浮べ耻しき俄かに相覺申候。以來晝夜不斷、心中何となくすが／＼致し、モヤクヤ、スツカリ相去り、人の腹立さへ見ても心動き候ものが、内外共にたゞはれ／＼致す許りにて、稱へんともせぬに稱名不斷に御座候。稱名しつゝ時にかゝるものをかく

までお護り下さるゝ事の忝じけなさとの感浮ひ申候。かゝる實驗は嘗て無之、特に作りてなすわざにもなきに自然にかくして頂き候事、たゞ難有、今朝歎異録十九節

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案するに偏へに親慈一人がためなりけり、さればそこばくの業をもちける身にありけるを、助けんとほしめし立ちける本願の忝けなさよと御述懐候ひしことを、今また案するに、善導の自身はこれ現に、罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに沈み、つねに流轉して、出離の縁あることなき身と知れといふ、金言にすこしも、たがわせおはしませず、されば忝しげなくもわが御身にひきかけて、我等が身の罪惡のふかき程をも知らず、如來の御恩のたかきことをも知らずして、迷へるを、おもひ知らせらなうためにて候ひけり。まことに如來の御恩をいふことをばさたなくして、吾れも人も、よしあしといふことをのみ申し合へり。

右は四日より只今までの實驗心中のありのまゝを相述へ、高恩の萬分の一に答へ申候。思ふ程は書け不申、不惡御諒察奉願上候。今一度御對面致し、重ねて厚き御教示に預り度、御歸途には必ず御立より下さる事と、樂み、御待ち申上候。先は御禮を兼ね心中告白申候。

九月七日

南无阿彌陀佛。

伊藤 甫

拜啓、先生には、永々晝夜の御傳道、特に韓國迄御巡錫被下、御慈悲の程難有奉謝候。

筑後羽犬塚にては不思議の御縁にて二晝夜も親しく御側に侍し、しみ／＼と御法活拜聴致し候こと、何たる恩寵かと、感泣の外無御座候。先生久留米に御出發被遊候後は、何ともいへぬ寂寥悲哀の念生じ申候へども、忽ち先生の御教訓起致し、一しほ直き／＼に如來の御慈悲を氣付かせて頂き申候。

其晚景、聽衆散して後、獨り柱に依り居候處、罪惡の想ひいと切に、遂には心洞然として一物なく、庭前の綠樹、西天の彩雲、宛然淨土の觀を呈し、愉快歡喜の情押へんとして押ふる能はず、念佛自ら口を衝いて出て來り、自分ながら不思議に感じ申候。其後懈怠勝ちには候へども、朝夕念佛の裡に樂しく、公私の務めさせて頂き居申候間、何卒御安神下され度候。要するに此夏は不思議の御計ひにて、多大の御引立に預り深く御禮申上候。

時下冷氣相催し候間折角御自愛の程奉願上候。右延引ながら御禮迄如此に御座候。

九月二十七日

敬具

譽田 豊吉

拙なき筆にて、貴き先生に書を呈せんも、實にあつがましい事で、幾度か筆を置きました、けれども實に此れは、二年以來の宿望で有りまして、いつか／＼と思ひながらも、女の事ではあるし、意の如く筆も取れず、是非一度は御禮申上げんとは、常に腦裡をはなれた事は、ありませんでしたが、遂に

ならずも失禮致しました。此度は、勇氣を出し、拙なきもかへり見ず、一書を差上げる事に決心致しました、何卒私の心中御察し下さつて、御よみ下らば、私のよろこび、この上は有りませぬ。私等のたゞ今の様に樂しき日を送くることの出來ますのは、全く如來様の大慈悲にもとづくのでありますが、併せて先生の貴き御教へによりますので、かげながら、常によろこんで居ります、申上げるも恥しい次第で有りますが、申さねばかへつて、心苦しく、何卒御ひまの折に御讀み下さいませ。

私は生を此の世にうけ、數日の後、父親に先立たれ、情ある母には、東西も知らぬ折から別れて、他人の手にて育てられ、尋常の科程を終りました。早十三歳の其の時より此の世中に面白い事は少しもなく、たゞ父はなぜ死んだのだらうか、母のそばで教を受ける事は出來ないか。外の朋友の如く、高等の教育を習ふ事はできないかと、何んとなく、悲しくてなりません。幸ひに第二の父ができましたので、幾分か嬉しい様で、有りましたが、依然として親のひざもとで暮す事は出來ませぬ。私が十七歳の時(一昨年)不幸にも、父は肥前武雄温泉入湯中、不意に病氣にかゝり、誰一人行く間もなく、かの世の人になりました。其の報に接した時は、氣も狂はん許り、かなしくて、いよ／＼世の無常を感じました。とり残された母と、かよわき弟と三人、當時のこと思へば、夢の様であります。ところが、如來様は罪深き私を、御見捨てもなく、樂しき社會に導くよと、ありかたき報に接しました。當時はつまらぬながら、小學校の教職に従事從事し

て居ました。同僚の先生は、いつまでも、悲しんでも返らぬ事ですから、此の書物を、讀んで御覽らん、きつと愉快になりますからと、簡単に申されて、御貸し下さつたのが、「求道雜誌」でありました。何氣なしに讀んで見ました所が、不思議にはありませぬか、幼い私の腦には、如何に感じたので有りませうか、貴き先生の御話しは、一言一句、涙のこぼるゝと共に、何ともいへぬ、うれしさが起りました。今迄の様な悲しさは、自然に薄らぎ、若い私等には、異様に思つて居た、珠数が手からはなれぬ様になり、朝夕佛様に、御禮申さねば、氣が沈むよう、何んとはなしに、嬉しさが、日に／＼増す許りて有ります。當時近くに佛教演説、説教等が有ります時は、如何にしても参り度で、家内の者まで、不思議に思ふまで、御法義を有難い／＼と申して居ました。其より後は大慈の如來様は、常に私のそばを往復遊ばして、悲しい時も嬉しき時も、起寝する迄も、御守り下されて、亡夫の墓に参詣するが、こよなき樂しみになりました。如來様の御恵みは、實に身にあまりて、其の年の夏は、谷本先生の御講話も聞く事が出來ました。一昨年は、先生の九州に、御下り遊ばし、我等のために御遠路も御いとひなく、御教導下された時は、天にも登る心地して、一言たり共御禮申上げんと、千秋の思ひして、待つてありました。如來様は、私の心中御察し下さつて、幸にも先生の御講話を拜聞する事かてき、其の上、先生には、有田廣様の、御盡力にて、私の如き不肖の者を御照會下さつて、身にあまり、御言葉まで受け、たゞ其の有りがたさ、身にしみて、涙にむせぶので有りました。如來様の御

縁で、先生の有がたき御言葉、猶、耳に残り、いつも春の花の咲いた心地して、樂しき日を送つて居ります。これ全く、如來様の御慈悲と、御同情に富み給ふ先生の御力と、皆さまの御盡力によるので、日夜謝して居ります。三四年前の苦痛は、今は昔語りでありませぬ。私は九州の北端で、三百里もへだて、居りますが、常に御先生の御徳に、浴して居りますのは、とても言語に盡されませぬ。以後はます／＼御訓導の程御ねがひ申す。拙なきもかへり見ず、失禮の段、御免下さいませ。先生には、暑さも増せば、御體大事に遊ばし、此の教のために庶人を御すくひ下さいませ。亂文にて心のまゝを述べ厚く御禮申上す。

七月二十六日

九中よね子

尙ほ私の從兄に、大變先生を御慕ひ申す者があります。是非一度、先生に御目にかかり度と申して居りますが、只今は滿州に参り、異國の空にても、常に如來様の御情をうけて居ると、よろこんで居ります。そろいも揃つて、我等兄妹は、かく如來様、先生方の御慈悲を受けますのは、深い縁でありませう。此度先生に手紙を差上げた事を知らせましたならば、如何によるこぶ事で有りませうか。たゞうれしくて他に發する言葉がありません。

拜啓秋冷の候に相成候處、御先生益々御清寧被遊御座奉大賀候。先月御傳道の折は、誠に御無禮のみにて、恐縮に奉存候。乍去御懇篤なる御教誨により、無限の御慈悲に浴せしめ

からざるを得ざらしめ給ふ點は、全く智慧光の御力と感申候。小僧は、昨年福岡にて、拜顔を辱せし時、どうだとの御尋に今は何も申事無之、難有のみと申上候處、此度の御教誨にて、矢張、皮相的に、御慈悲を弄びつゝ有つた事を自覺せしめられ、江頭六郎氏、塚本氏への御意見は全く、小僧への御意見にして、兩氏は小僧の代理として、膝下に進まれたる事を、伏し拜み候。攝取と云ふは、逃ぐる者を捕へて導き給ふの味、眞に身に沁み候。

昨年は福岡にて、先生の引止め給ふ御袖の下より逃げ歸り候處、本年は追ひかけ來りて、やるせなき親心を、知らせて戴き、胸中、全く残り無く任かされ、重荷を卸して下され候間、身輕に成りて、喜び居候。乍去地體は如仰、何時迄も地體にして、かく申上候傍に煩惱、妄念叢り起り候。之れに付けて、そくばくの業を持ちける身と云ふ事を、眞實に知らせて戴き、此者を助けんと思召立ちける御本願と戴けば、全く私一人の爲たる事、疑ふべき餘地無之候。感泣する斗りに候。長の御傳導に引續き、朝鮮御傳導、嘸御疲れ遊され候御事と、奉恐察候。御挨拶もあと前きに相成、欠禮奉萬謝候。

本會は、彌陀、觀音、大勢至の御方便により、大願の船に乗せて戴き候者の集會にて候て、唯今、解纜致た斗りに候。將來何卒、護持御養育を仰ぎつゝ進むのみに候何卒、宜布く御願申上候。乍延引、感謝旁、御願迄如此得貴意申候。頓首。

尙會員一同より宣布申上候。

十月二十四日 光善寺内求道會にて 木屋久磨

られ、難有さ言語に絶し候。此度の御教化を蒙り、腹の底より、ねぢきられ候様に感じ申候。振返へり見れば、從來は上への喜びなりし様に被存候。飽迄、根本的に、極濟せては止まぬ、御慈悲を沁み／＼と感じ候。祖母は、かぎに引きかけられたと、毎日毎夜に喜び語らひ申居候。小僧のみならず、祖母や妹も、同様に御本願の繩に、すがらせて戴き候。何としたる光榮にて候ぞや。御禮の辭無之、只々感泣するの外無之候。尙當村長母及妻と娘とは、近來非常に喜ばれ居候らひしも、本人は、唯道理を知りたる斗りにて、法悦の味無かりしが、俱樂部にての、御講話を拜聴されてより、宿善開發し無上に喜ばれる様に相成申候。九月二十五日は、紀念の爲、夜會を開かれ、求道を拜讀しては、喜び／＼縁ある人を導き被下候。其節俱樂部へ参詣せし十有餘名有之候間、紀念の爲、求道會を設け候て、月々一回集會し、前月の求道を讀みて、感ぜし所を互に語り合ひ候。小僧は、親鸞聖人の信仰を一節づ／＼拜讀のして、さ／＼やかなる感味を御話致居候。而して來年九州御傳道を御待受ける精神に御座候。御蔭により、九州中の僻地、往古懷良親王の隠れ給ひし、人跡不通の地方近きに耕す片手にも、岩に踞し、畦に憩ひては、佛恩をた／＼へて感涙にむせびつゝありと承り候。實に此夏已來の不思議の現象に候。嗚呼、佛恩窮り無く、師恩亦限りなし、俱樂部にて、聖德太子の尊像を拜して、太子は觀音の垂跡と仰げは、先生は勢至の化身と感じ候まゝ申上候。其後、益々其感深く相成申候。吾人の胸中を徹鑑して、永劫の苦い心を抛て、大悲にす

謹て愚報を以て御禮申上候。先日は御多忙中、参上仕り、實に御親切なる御教化に預り、難有御禮申上候。

扱て、小生等過る土曜日まで、在京し、第二求道會の御講話に参り度は、山々の希望に有之候處、何分永々の旅にて、東京以西の巡拜も尙一ヶ月半も掛る豫定にて、今後、氣候等の心配も有之、就ては、小生等夫婦とも、残念ながら、四日午後、東京出發致事にし、同日午後三時横濱に着仕り、同夜は横濱に宿泊仕り、横濱別院に参詣し、宿に歸りて、先生より頂きたる「求道」如來の護念の講話を、二章程拜讀し、十名斗の御同朋と共に喜び申候。翌五日は徒歩にて、五里斗、横濱より鎌倉までの間の御舊跡、三ヶ寺参詣し、五日夜は鎌倉山の内、御舊跡寺、成福寺へ宿泊仕り、翌六日汽車にて、横須賀、第一回の御舊跡、三ヶ寺参り、同日鎌倉へ歸り宿り、七日午後まで、同地の名刹、古跡を巡見仕り、藤澤まで來りて宿泊仕候。八日朝、藤澤より平塚まで、乗車、同地平塚入道の舊地に参拜を遂げ、大磯より國府津まで乗り、茲にて、聖人七ヶ年の留錫の靈場、御すゝめ堂、眞樂寺等へまいり、これより徒歩小田原へ來り。有名の御身代如來様を拜し、此日は箱根麓湯本まで参り止宿し、昨九日は早朝より舊道、即ち聖人の御通過なされたる道を通りて、午前九時過に、笈ヶ平と稱する、所謂、性信房御別の地と傳ふる所まで來り、道脇の岩の上に「見眞大師御舊跡、笈ヶ平、性信房御別の地」と赤ペンキにて書附けあるを見て、夫婦とも此處にて暫く泣き申候。性信房の昔、此所にて、御師匠様との御別れ、如何に幸

らかりしかと思ひ出すと共に、近角先生のことを思ひ出し、夫婦ともに相語り合て、泣き申候。(中略)先生の常に仰せられる、彌陀の五劫思性の願を、よく案んずれば、ひとへに、親鸞一人がためなりけりの、御言葉を思ひ出し、涙をながして喜ばせて頂き申候、求道は、東京以來、電車中、汽車中、歩行中も讀ませて頂き、箱根の麓までに全讀了し、丁度先生の御講話を拜聴しながら、御舊跡を巡拜する氣持仕り、四十五六里の間は、先生の御共をさせて頂て、御舊跡参りをしたと同様に御座候。

さて笈ヶ平より、箱根頂上までは、先生の御噂ばかりし、先生の御姿や、御言葉を、とほして、吾々の身に被らし下さる、阿彌陀如來の廣大無限の大悲を感謝しつつ、箱根町に達したるは、午前十一時頃に候。それより、權現様、萬福寺等へ参り、九日の夜は三島に宿り、今日は汽車にて静岡に到り同地、光信寺の舊地教覺寺へ参詣の都合に有之候處、朝來雨天の故、今日一日滞在、休養仕り候。何程も申上度候計は山々候へども他日拜顔の上緩々御語り申上御禮申述べ候。敬具再拜。

十一月十日朝

千里 誠意

此手紙、あまり長くなり、千里に見せ候ところ、千里申すには、あなた、何程か、くられても盡きません、淨土へツキヌケルまで、書かねば盡きぬと申候。おもしろい事と味ひ候。まことに、このそらことたはこと申て、淨土をツキヌケて、悟り候へば、心も言葉も絶えはて、不可思議の妙境

を見ました、其は巻物の御經です、私は御經が讀み度い……今晚は腹の中がすつかり明るい様になりました、平生は二口三口しか、喰へなかつた、粥が、今夜は一杯喰べられましたと申候。小生が手の珠數を見て「珠數が欲しい」とせがみ候に付、珠數を遣り候處「珠數を肌に着けていても善いですか」臥ていて念佛を言つても構ひまんか」など問ひ候。例の下井氏も、懇ろに、いたはり遣り下され候時、同君の手に所持の、名號を見て「其がほしい」と言ひ出し候由にて、同君は机上に据へやり被成候へば、満足して嬉ひ候。昨夜は足痛の爲め少しも、睡眠せず、終夜念佛候由、今朝申居り候。誠に、當院の如き、不良少年中、如此、念佛を嬉ひ候者出來候は、稀有の事實に候、小生も唯々恍然して、不思議の感に不堪候、唯だ残念なるは、當院は殆んど、無信仰者の集合にて、信仰の道に付きても、不本意の數々、存在候は、致方なき事に御座候。右先生に申上度、大亂筆をも不願有の儘申進ぜ候。拜具。

十一月十日

森脇忠市



界でありませう。それまでは、何程申しても、そら事、たわことでありませう。南无阿彌陀佛。

拜啓、近來稀の有難き事實を目撃致し、如何に考へても、先生に御話せては止まらず候に付左に陳述仕候。

小生昨日夕方、當感化院廊下を歩行中、不圖第十二號室に須田基當十四歳と申す兒童の病臥し居るを思ひ出し、一寸覗き見候處、非常に瘦せ衰へ見變へる許りの姿に驚き、病床に近づき、いたはり遣り候處、且最早死相を呈し居り候に付「何か言ひ度い事はないか」と尋ね候處、「姉を呼んで呉れ」と申候に付「親は如何だ」と反問候處、「親は當てにならぬ」と答へ候。此の時小生思はず「其の姉も當てにはならぬぞ、最う斯うなつたら、先生も、保母さんも駄目だ、其の頼りのないお前が可哀相だ、助けてやると云はれるのが如來様一人だ」と申すや否や、その子供の顔にサツと紅をさし進り出づるが如く、口により念佛を噴出致し候(彼は此の時覺えず、遺尿いたし候由後に語り候)其より同人は肩て息をしなから、「あ、嬉しい」と兩眼に涙を浮べ候。

猶彼が物語候には、「自分が此の病氣の元は、坂本(同室の兒童)と喧嘩をして、枕を打つ付け合つたからです、其時斯んな有り難い話を聴かない内でしたもの云々」と、無意識に申したるは小生も一驚を喫し申候。

昨夜第二回到病室を訪問しやり候時大に喜び「先生待つていた」と叫び候。尙病兒の申す様は「先生が去つてから、夢

時報

朝鮮傳道

八月三十日夜かねて法隆寺にて貰ひ受けたる聖德太子御像と島田蕃根翁手書の十七憲法とを奉じて門司より連絡船に乗り込む、稻葉子爵勅使の一行と船を同ふす、山陰の海岸、島嶼を間中朦朧として認めながら出發す、甲板上に徘徊して星辰の燦たるを眺めながら思を古今に馳せて、唯慈光の照耀千古溢らざることを感謝す、夜深船床に入りて寝に即く。

三十一日は我か従弟東溪大歡兄が三十八年講和條約締結の後北韓葛布嶺に於て戰死したる命日也、而して六年後の今日合邦正に成りて我今傳道の爲に渡鮮す、朝鮮の傳道は日露戰爭後在朝鮮の御同朋によりて度々促がされたる所なりしが今や正に宿縁純熟して其時來る、洵に廣大の恩徳たらずんばあらず、既にして船釜山の棧橋に達す、多年釜山に於て信友を作りたまひし輪番井上香憲師及び舊友澤井君を初として御同朋出迎はる、何れも破顔嬉々として舊知の如し、感謝極りなし、九月三日に至るまで晝夜朝夕信仰談ならざるはなし、磯谷一家、高瀬商店を初めとして御同朋は夜の目も眠らず、法味愛樂到らざる所なし、殊に伊藤甫氏の熱心なる求道の態度の如き、別時茫として自失せるもの、如し、出立後入信告白の狀態前記書面の如し、釜山に於ける求道心の切實なる内地已上にして、且つ皆「求道」の御同朋也、是井上輪番の盡瘁の結果也、冀くは將來益朝鮮信仰界の關門たらしめよ、釜山監獄には嘗て巢鴨に在職せられし、山田氏典獄たり、不動氏分監長たり、同監獄に就きて教誨を爲す、其因縁を感せずんばあらず、釜山三日慈光につつまれつ、前途の照耀を仰きつ、出立。

四日太田に着す、大谷派説教場あり、昨年新築成る、眞宗大學出身松林深慧君其主任となりて經營する所なり、法學士澁谷太吉君漢湖銀行支店長として最も愉快なる家屋を新築せらる、手に予か宿泊に充て一日間懇切なる接待を受く、佛教青年會に求道學舎に予と信交の親みあるを以て也、又民長渡邊寛治氏越後安塚の人温厚朝鮮部落に居住し、頗る鮮民に敬慕せらる、一日招かれて氏の宅を訪ふ、鮮民土俗のドラ太鼓等を叩きて豊年踊様の踊をなして觀覽せしむ、鮮童、子の如く來る、其様子無邪氣にして頗る愛すべし、此時始めて朝鮮兒童に日本語を教ゆべきことの頗る愉快にして且つ必ず有効必需の事業たることを感ず、又江州の人辻謹之助、頗る篤信者也、教場に於て又學校に於て講話し、又守備聯隊の爲に講話す、少數なるも熱心なる求道者出づ、加賀の人菊池友雄君の如き其最たり、求道會を月々開くことす。

六日水原に着す、同地は正宗王の遷都せんとして計畫したる所也、南大門の如き結構頗る壯也、聖德太子の像を安置し、十七憲法を掲げて講話したる所也、而して此月は恰も昨年築めて同地に説教場を開設したる紀念日也、中山祐晴君其主任也、同君は嘗て薩摩琉球に於て開教及監獄教誨に充り、亦朝鮮開教の事に従ふ、頗る勉めたりと謂ふべし、抑々朝鮮開教の實情を見るに、先づオンドロ式の朝鮮家屋を借り、次に之を買求め、進て地所次は家屋と漸次歩武を進むるなり、而して多くは本山より出資するに非ずして、左留邦人間に信徒を得合力の結果遂に説教場を實現するもの、其困難恐くは内地僧侶の夢想するあたはざる所也、而して水原説教場の如き此オンドロ式の朝鮮家屋也。鮮民に對して言語不通傳道容易の事に非ず、從來各地とも鮮民傳道まで手の届かざる固より其所也、併今後は益々本山及主任、且邦人一般協力して此舉に出でざるべからず、水原にては韓國銀行支店長近藤虎之助氏宿泊せしめられ款待を受く、同氏初め有志諸氏韓童教育の事に盡さんと

山本願寺を除けば最完全に近かるべし、奥山五百子女史の碑建てられたり、他郷故人に遇ふの概あり、つゝしみて碑前に讀經して生前の昔を懐ふ、女史の面目髣髴として見るが如し、近時敏子女史亦渡鮮各地に演説せらる、乃母の衣鉢を襲くものと謂つべし、余警察署員に對して話し、又別院に於て公衆に對して信仰を説く、十三日仁川より發して梧柳洞に於ける對州人小峰氏經營せる鮮童の小學校を參觀す、七歳より二十歳已下の鮮童日本語を領解し、其進歩の著しきに一驚を喫せり、初めて悟る日本人の朝鮮語を學ぶよりも寧ろ朝鮮人に日本語を教ふるの捷徑たることを、是に於て益々鮮童を教育するの急なるを確信せり、京城已後朝鮮各所に於て此事業の着手を懇請せり、而して其會名を選ひて一音會を命名す、佛以一音演說法、衆生隨類各得解を本據としたるなり、冀くは將來同文同語にして且同信たらしめたまはんことを、如來尊號甚分明、十方世界普流行。南無阿彌陀佛。

十三日海城に着す、説教場主任は今濱亮成君なり、同郷の舊友にして別後三十年忽ち他郷に相遇ふ、是如來の引誘たらずんばあらず、晝及晨朝は説教場に於て夜は小學校に於て公衆に對して講話を爲す、人生問題によりてを信仰を求むるの人多し、又守備隊に於て講話す、海城は高麗朝の舊都なり、李朝之を滅して起り、而して今や李朝亦滅亡す、一夜烟月千古の昔を偲ふ、翌朝を拂ふて高麗王宮の廢墟を吊す、草離々として瓦片累々たり、而して此地に亦李家發祥の屋敷あり、盛なる碑二基あり、今や却て高麗朝の運命を襲く、生者必滅、會者定難と謂つ可し、此地に於て亦説教場信從惣代の邸に宿泊せしめらる、淨窓明几一として佛天の恩賜ならざるはなし、殆んど夜を徹して時局と十七憲法講演筆記の校正を爲す、南無阿彌陀佛。

十四日開城を發して兼二浦に至り大同江を下りて鎮南浦に着す、船着せし時、黃昏説教場主任豊島良寛師及信徒囉迎せら

を諾せらる、又月々求道會を開くことなる、守備隊亦來聽す。七日より十日まで京城及び龍山に傳道す、南山本願寺輪番井波潜彰師京城に於ける傳道の日程を作り待受けらる、蓋し朝鮮の中心たる京城内外有力の部分に向て遺憾なく行き渡りて傳道する事を得たるは多年同師開拓の結果たらずんばあらず、同夫人は吾信友後藤龍縁君の令姉にして實に宿縁の甚厚を感せずんばあらず、京城傳道の大要を約言せば愛國婦人會に於て統監府を始め官民上流婦人に對して、大谷婦人會に於て信仰を中心とせる婦人に對して、京城婦人會に於て久しく京城に居住して慈善事業に従事せる婦人に對して、又教育會に於て統監府を初めとしてあらゆる教育者に對して、又南部警察署員に對して、又大倉商業學校に於て、統監府中學校に於て、又韓人教會に於て、其他公衆の爲に公會演説を開會すること二回且つ毎朝法話して特に篤信の同朋と共に法味を愛樂す、同地は何分にも教育ある、現代の思潮に浴せる人衆多きが爲め、青年にして信仰問題に對する理解する多く、又從來の開法篤信の人も少からず、冀くは新日本の中心として佛光普く八道に光被せむことを南無阿彌陀佛。

九日終日を龍山に費したり、龍山は駐劄軍のある所、先づ砲兵隊に向て講話す、我「求道」の信友砲兵中佐光井香兵兵器工廠長として在勤せらる、氏が誠心誠意の款待を受け同氏官舎に午餐の饗を受け午後經理部長小倉美佐雄氏官邸に於て將校家族悉く來會せらる、深く信仰を解せらる、實に稀有なる清新和樂の會合なりき、而して圖らざりき同夫人は吾從弟丸山夫人の姉君ならむとは、他郷初めて近親の人の邂逅す、其感言ふべからず、是皆佛陀の導たらずんばあらず、龍山説教場に於て晝夜二回開催す、特に篤信者多し、是主任者の盡瘁の結果たらずんばあらず、

十一日仁川に着す、輪番重永元龍師及同行待設けらる、古くより開教せる所なるを以て建築頗る行届きたり、京城の南る、厚意身に泌むを覺ふ、且つ海月樓に宿泊せしめられ款待を極めらる、篤實なる信者に對しては説教場に於て法話を爲し、公衆に對しては劇場に於て演説を爲す、精神頗る貫徹せり、埋立の海岸を散歩し、島上に菩提樹ありしかば紀念の爲め新芽を移して之を今や本國に植付けたり、心の菩提樹の佛種は正に本國より將來して之を八道に移植せんと欲す、冀くは枝葉鬱蒼として繁茂せんことを。南無阿彌陀佛。

十六日再び大同江を沂り亦兼二浦を過りて平壤に着す、平壤には大谷派説教場なし、故に大庭民團長主催として開會せらる、本派及淨土宗の諸師出迎らる、柳屋旅館に宿泊す、翌朝の平壤城戰場を訪ふ、乙密臺に登臨して牡丹臺玄武門を眼下に眺め亦大同江の水溶々たるを隔て、遙に船橋里を望みて當年の義勇奉公を懷はずんばあらず、學校に於て開會、向井檢事正及理事長を初めとして來聽者多し、滿身の光榮を浴しつ、佛種を此無縁の地に播きつゝ、出立東に向ふ、十七日晚新幕の旅館に一泊す、鮮民該天に演せる喜劇を見る、人間到る處情相同じ、然らば如何なる人も亦同一大誓に乘托せずんばあらず。南無阿彌陀佛。

郡山は曩きに傳道日程の中に入りしかども交通不便の爲に一旦中止と決せしが長電頻々として來群を促すこと割切誠意肺臓を貫く、初めて知る如來の本誓重願のやるせなき亦此の如くなるべし、我は逃げんと企てつゝある者、佛は逃ぐるを追ひたまふ、實に此親心たらずんば非ず、自然之所牽は實に若不生者不取正覺のやるせなき御誓によりて初めて引き寄せらるゝ也、十八日朝仁川を経て群山行の汽船に乗らんとして一旦龍山に着せし時、布教監督龍山嚴雄井波師ととも迎へらる、乃ち龍山師は今回各地を糾合連絡して申込まれし人、師と同道して仁川に至り袂を分つて群山は向ふ、十九日群山に着し、説教場主任三好長九師を初め一同雨中我を勇み迎へたまふ、先づ師に遇ふや初對面なれと予白して曰くドンド引き付けら

れて来ましたと、三好師満足殆と言の出づる所を知らず、大農氏の宅に迎へられ敬待を享く、晝は説教場にて夜は劇場にて講演を爲す、天野理事長を初めとして殆んど十年の舊知の感あり、殊に渡鮮己來佛像を得んと欲するの心切也、しかるに三好師の珍藏する釋尊坐像を拜するに及び其式法隆寺式に類せり、恰も是予が捧持せる聖德太子の本地として之を懇請して遂に之を得たり、而して平壤街頭にて買求めたる二脇士と共に予が終生の紀念に供するのである、志涯き御同朋に送られて、出發二十日晚を船中に廿一日朝仁川に着し、永登浦を経て歸途に即く、水原に中山君近藤氏等太田に辻氏出迎へらる、晚釜山に着すれば御同朋二十有餘人終日大に待受けられ是非一泊せよといふ、益々言の出つ所を知らず、二十三日より江洲古郷にて報恩講をつとむる筈なれば中心其涯き御志を受けて袂別乗船す、嗚呼新日本朝鮮長へに佛陀の慈光に浴して自覺の生命を發せよ南無阿彌陀佛。

二十二日聖德太子御命日朝下關へ歸航、有田廣君態々迎へらる、岡山より神谷君來り見えらる、三人同車大坂四天王寺に詣す、二十三日京都本山に詣して祖師聖人の尊影を拜し、教學部長に面會し午後兩君と共に歸寺健在にして五尊は詣し母上に見ゆ。乃ち三晝夜報恩講を終了す、神谷君歸國前に佛祖深厚の御慈悲を感謝せずんば非ず、二十九日晝夜吉田龍誓君の寺に水聲悉く光明ならざるなし、二十九日晝夜吉田龍誓君の寺に講話し、同君の案内にて江州に於ける聖德太子の靈蹟善住寺白馬寺に詣し、日野に於て午後及夜講話し、三十日有田君とともに歸京、學舎佛前に於て百有餘日夏期傳道の功を全ふせしめたまひし恩徳を感謝し奉る。南無阿彌陀佛。

會津、新潟、鳥屋野、佐渡各地、飯山、針村、越後信濃御駐錫各地、大磯、大濱、灘各所、薩摩、琉球、大嶋、人吉、熊本、羽犬塚、久留米、大隈、小倉朝鮮各地に於ける各位諸

彦の御手厚き御もてなしを蒙り深く感銘仕候、早速一御禮申上へべき筈に候へども略儀ながら茲に謹んで感謝の誠意を表し奉り候。頓首。

近角常觀

本誌前月號休刊致候に就き、其の埋め合せとして本號は紙數倍加致し從て誌代も本號に限り二冊分(廿錢)申受け候間左様御了知願上候也。

求道發行所

精神修養

每月一回 十月 號 發行

後藤男爵處世百訓

終木生

不景氣に對する修養如何(咄堂、步佛、波哉、白星、劍虹、蓮堂)

國家の活動は個人の活動にあ(男爵、牧野、紳、顯)

朝鮮三國時代の小説(李、鏞、齋、翁)

現代青年の無氣力なる所以(伯、爵、大、隈、重、信)

宗教と教育との一大疑問(文、學、博、士、井、上、哲、次、郎)

支那革命の話(代議士、松本、君、平、翁)

支那革命の話(代議士、松本、君、平、翁)

淺間登山記(傑然とする一年前の譚)

壯烈なる志士團(九州日々主筆、小、早、川、秀、雄)

同人雜記(吐堂、波哉、蓮堂、鐵腸、白星、冷眼生、劍虹生)

大國民、小國民、大人物、小人物

加藤咄堂

前田博士題字 泉文學士叙傳

よるこびの跡

近角常觀序 故管瀨夫人日誌

紙定 部十 郵 引割上以部十 錢二稅郵

本書は昨年求道第九、十兩號に亘り告白欄に其の一部を掲載せる故管瀨夫人の日記を輯録し紀念の爲め出版せるものなり。夫人の日常生活其儘の告白なる事は、既に本誌讀者の知了せらるる處、今更に次版なる、道友諸君の一讀を勸告す。

定價一冊四錢 半年八錢 一年一十五錢 (郵稅一錢) 東京淺草區三橋所 精神修養社 東京市本區區本所 東田 堂京東

東京市本區區本所 東田 堂京東

親鸞聖人の信仰

人生と信仰

◎第一章 人生問題と信仰 ◎第二章 悲觀思想と信仰 ◎第三章 倫理力行と信仰 ◎第四章 犯罪心理と信仰
◎第五卷 社會問題と信仰 ◎第六章 國家秩序と信仰 ◎第七章 世界宇宙と信仰 ◎第八章 諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

懺悔録 附録 歎異鈔

本書は著者が實驗の信味に基づき、古來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舎城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ『懺悔録』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず。

訂正 信仰之餘瀝

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の黒暗界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心の經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に此の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十一版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先きに第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根柢は本書に於て明かならん。

施行用小冊子

信仰之餘瀝要略

第二版

定價五錢 郵税二錢 部數に應じ充分割引す。(但し四冊迄は) 本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を抜萃し、傳道用小冊本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

冠頭 唯唯 唯唯 信信 意鈔

新版

定價七錢

郵税三冊迄貳錢(部數に應じ充分割引す)

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて参照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

東京市本郷區森川町一

振替口座一六六九六番

大賣捌所

東京市神田區表神保町

堂

發行所

東京市本郷區森川町一番地

(振替口座東京一六六九六番)

規定

- 本誌は毎月一回十五日發行とす
- 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 凡て送金受取人名宛は「東京市本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の住所を通知する事
- 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 本誌定價左の如し

部	一ヶ月	六ヶ月	一年
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢
郵税	一冊	一冊	一冊
	に付五厘		

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十三年十一月十二日印刷
明治四十三年十一月十五日發行

發行兼編輯人 近角常力

印刷人 白土幸力

發行所 求道發行所

東京市本郷區森川町一番地

大賣捌所 東京市神田區表神保町

東京市本郷區森川町一 求道發行所

前號要目

求道

◎深信と報謝

講話

◎如來の護念

聖傳

◎デヤ、イタカ釋尊傳

久遠劫の昔(完結)

近角常觀

講義

◎歎異鈔——第十二章

歎異鈔の著者は何人か

『先師』につきて

告白

近角常觀

◎造る瀨なき御念力

小松原謙三

◎信仰書簡四章

時報

◎爾後の地方傳道

(本號に限り定價廿錢)

求道第七卷第八號 明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十三年十一月十五日發行 (毎月一、同十五日發行)

東京市神田區本町二丁目三十九番地